

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第146集

た がしら やま  
田 頭 山 古 墳 群

平成14・15年度 東駿河湾環状道路建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



田頭山古墳群全景(合成写真)  
6世紀末葉から8世紀後半の墓域である

巻頭カラー2



田頭山3号墳石室全景(開口部より)  
石室内に組合式箱形石棺を2基有する



田頭山3号墳 出土遺物集合写真  
小刀の茎にハート形の銀象嵌が施される

## 巻頭カラー4



1. 1号方形周溝状遺構検出状況(北東より)

1辺4m程の方形周溝状遺構と火葬墓(SF3)が検出された



2. 1号方形周溝状遺構出土遺物集合写真

方形周溝状遺構の溝内から須恵器が出土

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第146集

た がしら やま  
田 頭 山 古 墳 群

平成14・15年度 東駿河湾環状道路建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 序

たけとやま

今回報告する田頭山古墳群の調査は、東駿河湾環状道路建設に伴い、平成14年度から平成15年度にかけて実施された。当古墳群が所在する三島市は、北西には富士の靈峰を仰ぎ、東に箱根山、南には天城連山に囲まれ、西には駿河湾を望む風光明媚な土地である。市域の東半は、自然豊かな箱根山西麓が占めている。

この箱根山西麓の丘陵には、初期群集墳である向山古墳群や横穴式石室を有する夏梅木古墳群、赤王山横穴墓群など古墳時代から奈良時代にかけて多くの古墳群や横穴墓群が密集して分布している。

調査では、3基の横穴式石室墳と奈良時代の方形周溝状遺構1基、火葬墓と思われる土坑4基が見つかった。特に3号墳には2基の組合式箱形石棺を有しており、直列に連接されていた。この石棺内からは小刀が出土し、鍾部分に銀象嵌が施されていた。古墳群の築造時期は6世紀末葉～7世紀後半に及ぶ。一方、方形周溝状遺構は周溝内から須恵器高台壺、長頸壺、土師器壺が出土し、8世紀中葉に築造される。そして、火葬墓は骨蔵器として土師器長胴壺を使用しており、8世紀後半に構築されたと考えられる。

これまで、当丘陵一帯には横穴式石室墳と横穴墓が混在する地域として知られていたが、当古墳群と同一丘陵上に方形周溝状遺構、火葬墓が検出されたことにより、石室墳に後続する古代の墓制が明らかになるとともに同一集団による墓制の変遷がうかがわれ、周辺の古墳群や横穴墓などの調査事例と併せて当地の具体的な歴史解明に深く寄与することであろう。

最後に、現地調査並びに資料整理にあたって御援助、御協力をいただいた静岡県教育委員会文化課、国土交通省沼津河川国道事務所、三島市教育委員会をはじめとして関係諸機関に感謝申し上げるとともに、現地調査と資料整理作業に従事した作業員の労苦をねぎらいたい。

平成16年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤忠

## 例　　言

1. 本書は静岡県三島市大場字田頭山1059-1他に所在する田頭山古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査は東駿河湾環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として国土交通省沼津河川国道事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成13年9月に1次調査、平成14年9月から12月、平成15年4月から9月まで1次・2次調査を実施し、平成15年10月から平成16年3月までは資料整理を行った。
3. 調査体制は次のとおりである。

平成13年度　所長 斎藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 余田徳幸 総務課長 本杉昭一  
会計係長 大橋 薫 調査研究部長 佐藤達雄 調査研究部次長 栗野克巳・及川 司  
調査研究三課長 飯塚晴夫 調査研究員 小川伸吾 笹原千賀子

平成14年度　所長 斎藤 忠 副所長 飯田英夫 常務理事兼総務部長 余田徳幸  
総務課長 本杉昭一 会計係長 大橋 薫 調査研究部長 山本昇平  
調査研究部次長 栗野克巳 調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三  
調査研究員 越智 撫 井鍋誉之

平成15年度　所長 斎藤 忠 副所長 飯田英夫 常務理事兼総務部長 余田徳幸  
総務部次長兼総務課長 錦田英巳 会計係長 野島尚紀 調査研究部長 山本昇平  
調査研究部次長兼資料課長 栗野克巳 調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三  
調査研究員 池ヶ谷和明 井鍋誉之

4. 現地での基準点測量・景観写真は㈱シン技術コンサル及び㈱フジヤマに委託した。
5. 調査区の方眼設定は日本測地系（平面直角座標第VIII系）の軸線を基準に国家座標を原点に南から北方向へ、西から東方向までグリッドを設定した。
6. 本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。 SD：溝状遺構 SF：土坑 SX：不明遺構
7. 本文中に用いる色彩の用語・記号は新版『標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修1992）を使用した。
8. 鉄製品の保存処理・遺物の写真撮影は当研究所保存処理室長 西尾太加二及び当研究所技術員が実施した。
9. 出土遺物の石材鑑定は静岡大学名誉教授伊藤通玄氏に依頼した。
10. 火葬墓及び方形周溝状遺構のリン・炭素分析は㈱パリノ・サーヴェイに委託した。
11. 本書は、第Ⅱ章1節を当研究所技術員 吉村たまみが執筆し、それ以外は井鍋誉之が行った。
12. 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
13. 発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

# 目 次

## 卷頭カラー

## 序

## 例 言

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と工程	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	5
第1節 地理的環境	(吉村たまみ) 5
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 遺構と遺物	9
第1節 1区	9
1. 1号墳	13
2. 2号墳	19
第2節 2区	21
1. 3号墳	23
2. SF1	41
3. SF2	41
4. SF4	42
第3節 3区	45
1. 1号方形周溝状遺構	45
2. SF3	47
3. SX1	48
4. SD1	48
第4節 包含層出土遺物	50
1. 土器	50
2. 石器	51
第Ⅳ章 まとめ	55
第1節 横穴式石室について	55
第2節 改修された石室の検討	56
第3節 組合式箱形石棺の検討	59
第4節 方形周溝状遺構と火葬墓について	63
第5節 結語	65
付 編 田頭山古墳群の自然科学分析	69
写真図版	

## 挿図目次

第1図	三島市位置図	1	第31図	1・2号棺 復原模式図	32
第2図	田頭山古墳群位置図	1	第32図	3号墳 遺物出土状況図	33
第3図	東駿河湾路線配置図	3	第33図	3号墳 遺物実測図(1)	35
第4図	周辺地質図(沼津市史)	5	第34図	3号墳 遺物実測図(2)	36
第5図	周辺遺跡分布図	7	第35図	3号墳 遺物実測図(3)	37
第6図	古墳群分布図	8	第36図	SF1・2 実測図	38
第7図	トレンチ設定図	9	第37図	SF1・2 遺物実測図	39
第8図	全体図	10	第38図	SF4 実測図	40
第9図	1区 全体図	11	第39図	SF4 遺物実測図	41
第10図	1号墳 墳丘図	12	第40図	3区 全体図	42
第11図	1号墳 列石実測図	13	第41図	1号方形周溝状遺構 実測図	43
第12図	1号墳 閉塞石実測図	14	第42図	1号方形周溝状遺構 遺物分布図	44
第13図	1号墳 石室展開図	15	第43図	1号方形周溝状遺構 遺物実測図	45
第14図	1号墳 基底石実測図	16	第44図	SF3 実測図	46
第15図	1号墳 遺物出土状況図	17	第45図	SF3 遺物実測図	47
第16図	1号墳 遺物実測図	18	第46図	SX1 実測図	48
第17図	2号墳 墳丘図	19	第47図	SD1 実測図	49
第18図	2号墳 閉塞石実測図	20	第48図	包含層土器実測図	50
第19図	2号墳 石室展開図	21	第49図	包含層石器実測図	51
第20図	2号墳 遺物実測図	21	第50図	開口部立柱石をもつ石室の諸例	55
第21図	2区 全体図	22	第51図	奥壁の改修例	56
第22図	3号墳 墳丘図	23	第52図	側壁の改修例	57
第23図	3号墳 閉塞石実測図	24	第53図	袖石の付加	58
第24図	3号墳 石室展開図	25	第54図	組合式箱形石棺を有する石室の諸例	59
第25図	3号墳 断面図	26	第55図	組合式箱形石棺の諸例	61
第26図	3号墳 基底石実測図	27	第56図	長側石の維ぎ方	62
第27図	3号墳 石室掘り方実測図	28	第57図	組合式箱形石棺の配置状況	62
第28図	3号墳 1号棺・2号棺平面図	29	第58図	方形周溝状遺構の諸例	63
第29図	1号棺展開図	30	第59図	火葬墓の諸例	64
第30図	2号棺展開図	31	第60図	内容物採取位置図	70

## 挿表目次

表1	調査工程表	2	表8	直刀・刀子計測表	54
表2	東駿河湾環状道路関連遺跡一覧表	4	表9	石器計測表	54
表3	周辺遺跡地名表	8	表10	横穴式石室計測表	54
表4	出土土器観察表	52	表11	方形周溝状遺構計測表	54
表5	鉄鎌・針・弓金具計測表	53	表12	火葬墓計測表	54
表6	玉類計測表	53	表13	組合式箱形石棺の内法	60
表7	耳環計測表	53	表14	土坑覆土の理化学分析結果	70

## 図版目次

- 卷頭カラー1 田頭山古墳群 全景（合成写真）  
卷頭カラー2 田頭山3号墳 石室全景（開口部より）  
卷頭カラー3 田頭山3号墳 出土遺物集合写真  
卷頭カラー4 1. 1号方形周溝状遺構検出状況（北東より）  
　　図版1 1. 田頭山古墳群 全景（富士山を望む）  
　　図版2 1. 1号墳 全景（南より）  
　　図版3 1号墳 石室全景（南西より）  
　　図版4 1. 1号墳 奥壁検出状況（南より）  
　　3. 1号墳 石室掘り方土層堆積状況（右側壁側）  
　　5. 1号墳 鉄鏃束出土状況（西より）  
　　7. 1号墳 直刀出土状況（南東より）  
　　図版5 1. 1号墳 基底石検出状況（南より）  
　　図版6 2号墳 全景（南東より）  
　　図版7 1. 2号墳 奥壁検出状況（南東より）  
　　3. 2号墳 閉塞石検出状況（北東より）  
　　5. 2号墳 石室掘り方検出状況（南より）  
　　図版8 3号墳 石室全景（南より）  
　　図版9 1. 3号墳 全景（南より）  
　　3. 3号墳 石室検出状況（北より）  
　　図版10 1. 3号墳 1号棺検出状況（南東より）  
　　図版11 1. 3号墳 2号棺検出状況（南東より）  
　　図版12 1. 3号墳 2号棺左側壁検出状況（北西より）  
　　3. 3号墳 1号棺除去後奥壁検出状況  
　　図版13 1. 3号墳 基底石検出状況（南西より）  
　　図版14 1. SF1・SF2 検出状況（南より）  
　　図版15 1号方形周溝状遺構・SF3検出状況（北東より）  
　　図版16 1. 1号方形周溝状遺構 検出状況（南西より）  
　　3. 周溝内高台灰 出土状況（南より）  
　　5. 須恵器擴み蓋 出土状況（北東より）  
　　図版17 1. SF3 検出状況（南西より）  
　　図版18 1. SX1 検出状況（北より）  
　　図版19 1号墳・2号墳 出土遺物  
　　図版20 1号墳 出土鉄器集合写真  
　　図版21 3号墳 出土土器(2)  
　　図版22 3号墳 出土鉄鏃・玉類・弓金具・耳環  
　　図版23 3号墳 出土直刀・象嵌小刀  
　　図版24 奈良時代出土遺物 集合写真  
　　図版25 方形周溝状遺構・SF1 出土遺物  
　　図版26 SF2～SF4・包含層出土土器  
　　図版27 包含層出土石器
2. 1号方形周溝状遺構 出土遺物集合写真  
2. 1・2号墳 全景（東より）  
2. 1号墳 石室全景（南より）  
2. 1号墳 石室掘り方土層堆積状況（奥壁側）  
4. 1号墳 左側壁開口部立柱石検出状況（西より）  
6. 1号墳 丸玉出土状況（石室床石）  
8. 1号墳 直刀出土状況（西より）  
2. 1号墳 石室掘り方検出状況（南東より）  
2. 2号墳 刀子出土状況（北東より）  
4. 2号墳 基底石検出状況（東より）  
6. 2号墳 周溝内焼土検出状況（東より）  
2. 3号墳 石室検出状況（南より）  
2. 3号墳 1号棺内直刀出土状況（南東より）  
2. 3号墳 2号棺内耳環・玉類出土状況（南より）  
2. 3号墳 右側壁検出状況（南東より）  
4. 3号墳 奥壁検出状況（南より）  
2. 3号墳 石室掘り方検出状況（南より）  
2. SF1・SF2 完掘状況（南西より）  
2. 周溝内須恵器高台灰・土師器等の出土状況（南西より）  
4. 方形周溝状遺構 長頸壺 出土状況（南より）  
2. SF3 長胴甕検出状況（南より）  
2. SD1 検出状況（北東より）  
3号墳 出土土器(1)  
3号墳 組合式箱形石棺材

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

静岡県東部地域は、自動車への依存性が高く、主要幹線道路は、慢性的な渋滞に悩まされている。また、伊豆半島は日本屈指の観光地であるため、観光による交通量が増大し、地域生活や経済活動に影響を与えている。このため、慢性的な渋滞を緩和し、豊かな市民生活と円滑な経済活動をめざすために計画されたのが、静岡県沼津市から下田市を結ぶ伊豆縱貫自動車道である。

このうち、沼津市岡宮から田方郡函南町平井を結ぶ15kmの区間が、東駿河湾環状道路である。路線は、沼津第一東名インターチェンジから第三東名長泉ジャンクション、国道246号バイパスを結び、三島市塙原の国道1号線を経由して、熱海函南線に至る高規格幹線道路である。

この路線は平成元年に基本計画区間が策定され、平成2年に路線予定地内の遺跡確認調査が行われた。その結果、周知の遺跡を含む41ヶ所が埋蔵文化財包蔵地として報告され、静岡県教育委員会文化課の指導のもと財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査機関として発掘調査を開始した。

東駿河湾環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、田頭山古墳群を含めるとすでに35箇所の発掘調査を終了しており、現在も現地調査・資料整理作業が進められている。当古墳群は平成13年9月に1次調査、平成14年に1・2次調査、平成15年に1・2次調査を行い、資料整理作業を実施した。



第1図 三島市位置図



第2図 田頭山古墳群位置図

## 第2節 調査の方法と工程

田頭山古墳群の調査は用地取得の関係上、平成13年から15年の3ヵ年にわたり、実施された。平成13年に1次調査が行われ、その結果、横穴式石室墳1基（1号墳）を確認した。平成14年9月～11月には1号墳の2次調査を行い、このとき、さらに1基の古墳（2号墳）が発見された。また、同時に周辺地区の1次調査を行い、横穴式石室墳（3号墳）が検出された。平成15年6月～9月には、この3号墳の2次調査及び残りの調査区の1次調査を行った。この1次調査では奈良時代の方形周溝状遺構や火葬墓が確認されたため、そのまま2次調査に移行した。その結果、同一丘陵内において横穴式石室や奈良時代の方形周溝状遺構、火葬墓が検出されたことになった。このように古墳時代終末の墓制から奈良時代の墓制への変遷を辿れる事例は、県内において貴重であることから8月30日に一般を対象とした現地説明会を実施し、およそ240名の見学者が訪れた。その後、石室や火葬墓の解体作業をすすめ、9月第2週には現地調査を終了した。

表1 調査工程表

平成13年度		平成14年度					平成15年度													
田頭山	9月	田頭山	9月	10月	11月	12月	田頭山	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
1次調査	→	1・2次調査																		
資料整理																				→

### 1次調査

今回の調査範囲は山林であり、調査にあたって草木の伐採作業から開始した。現況の地形測量図は光波測定器により、1m間隔で測定した座標データをグラフソフトにより図化した。1次調査は古墳を想定して等高線に沿って、頂上部には十字にトレーンチを設定した。古墳が見つかった段階で石室の規模、周溝等を把握するため、サブトレーンチを設定し、調査終了後一旦埋め戻した。

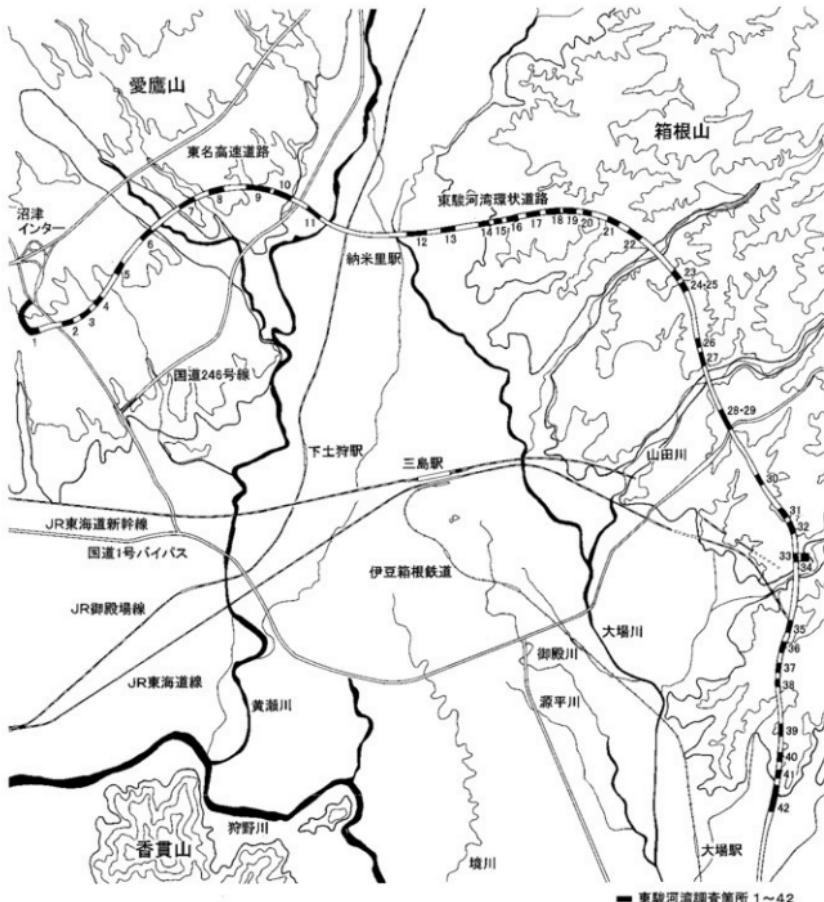
### 2次調査

表土除去・排土処理作業は、バックフォー及びクローラーダンプを用い、包含層・遺構掘削にあたっては鍛鋤、簾を使用し、人力で行った。平坦面における遺構埋土は、黒色土または黒褐色土をなしており、遺構の検出は比較的容易であった。また、調査で排出された土は、路線内に仮置きし、調査終了後に埋め戻した。

調査区は平成14年度に1区、平成15年度には2・3区と設定し、その対象地内にはグリッドを国土座標に基づき、10m方眼に設定した。国土座標値は旧日本測地系を用い、(X=41040・Y=-99290)を基点とし、北から南にかけてA・B・C、西から東にかけて1・2・3と付した。墳丘及び包含層から出土した遺物は、光波測定器を用い、座標管理して取り上げている。石室内の図化作業は石室主軸を設定し、1/10を基本に行った。遺構写真撮影は、4×5判（モノクロ・カラーリバーサル）を主に使用し、作業工程記録用には35mmのカラーネガを用いた。遺構全景写真は、ローリングタワー及びラジコンヘリにより撮影した。なお、現地調査と併行して出土遺物の洗浄、注記作業等の基礎整理作業を現地事務所にてすすめた。また、石室使用石材を確定するため、現地で石材のサンプリングを実施し、資料整理作業で石材鑑定を行った。

### 資料整理作業

資料整理作業は、当研究所本部（静岡市谷田）において土器の接合作業や鉄器の汚れや錆落としといった1次処理作業をすすめ、順次実測、写真撮影作業を行った。このとき、鉄製品のX線撮影により3号墳の2号棺内から出土した小刀の鍔部分に銀象嵌が施されていることが確認できた。また、SF3（火葬墓）の内容物を明らかにするためにリン・炭素分析を行った。さらに、報告書刊行にむけて遺構、遺物図の版下・トレース作業、原稿執筆をすすめた。こうして報告書に掲載された遺物は、挿図番号順に収納し、必要に応じて検索できるように収納台帳を作成した。



第3図 東駿河湾路線配置図

表2 東駿河湾環状道路関連遺跡一覧表

整理番号 市町村 整理番号	遺跡名	内 容	報 告 書
<b>沼津市</b>			
1 4	上松沢平	縄文早期前半集落	2004『上松沢平遺跡』
2 3	虎杖原1号墳	横穴式石室	2003『寺林遺跡・虎杖原1号墳』
3 2	寺 林	旧石器時代（YL層）石器群	
4 1	丸 尾 北	1・2次調査予定（縄文草創期～中期後半）	
<b>長泉町</b>			
6 54	桜 烟 上	1・2次調査中（縄文中期集落）	
9 37	池 田 B	縄文早期末～前期初頭集落、奈良時代	2000『池田B遺跡』
10 38	鉄 平	縄文早期末～前期初頭集落	2002『鉄平遺跡』
11 48	大平(1期) 大平(2期) 大平(3期)	中世墳墓 中世墳墓、弥生前期末集落 1・2次調査予定	1998『大平遺跡』 2001『大平遺跡II』
<b>三島市</b>			
14 2	北ノ入	縄文中期前半集落	1999『北ノ入遺跡』
16 4	長兵衛平	縄文	1998『長兵衛平遺跡』
17 5	小 池	縄文早期後半包含層、中期前半集落	1998『小池遺跡』
18 6			
19 7	徳倉 B	縄文中期前半～中期後半	1998『徳倉B遺跡』
20 8	上ノ池	旧石器（YL、BB0、BB I、BB II、BB III層）石器群	1998『上ノ池遺跡』
22 10	八田原	押型文系土器、BB III層土坑群	1997『八田原遺跡』
23 11	加茂ノ原 B	BB III層土坑群	1996『加茂ノ原遺跡』
27 15	焼 場	鐵倉古道、縄文早期後半（東海系）～前期	1994『焼場A遺跡』 1996『焼場遺跡（B地点五百石司遺跡）』
28 16	下 原	旧石器（YL層）石器群	1995『下原遺跡I』 1996『下原遺跡II』 1998『下原遺跡III』
29 17			
30 18	押 出 シ	縄文中期後半集落	1999『押出シ遺跡（遺構編）』 2000『押出シ遺跡（遺物編）』
31 19	生 茨 沢	横穴式石室、BB IV～VII層石器群	1999『生茨沢遺跡』
32 20	中 峰	旧石器時代	1998『中峰遺跡』
33 21	桧 林 A	縄文草創期石槍、有舌尖頭器	1998『桧林A遺跡』
38 26	田 頭 山	横穴式石室、方形周溝状遺構、火葬墓	2004『田頭山古墳群』
39 27	大 明 神 洞	一部1次調査済み	
40 28	長 命 洞 B	1次調査予定	
41 29	大 場 向 山 B	1次調査予定	

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

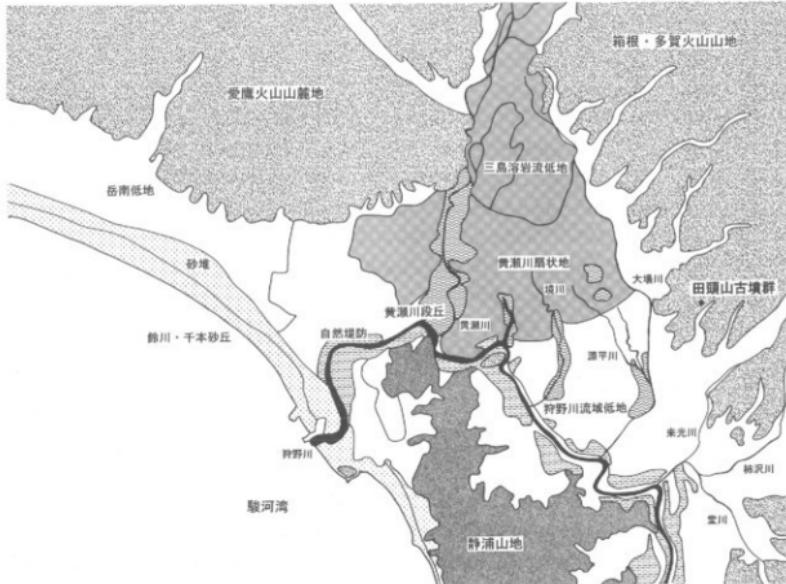
田頭山古墳群が所在する三島市は、静岡県の東部、伊豆半島の付け根に位置する。北に裾野市、南に田方郡函南町、西に駿東郡長泉町、東は神奈川県箱根町に接する。市の中心部はJR東海道線、JR東海道新幹線が通過しており、この周辺には住宅地、商業地、水系を利用した工業地として土地利用されている。市域の東半は箱根山西麓で占められており、近年は畠、ゴルフ場、住宅地、道路として開発が及んでいる。

箱根山は古期外輪山・新期外輪山・中央火口丘群からなる三重式火山であり、大きく3期にわたる活動により、現在の緩やかな斜面を形成している。

第1期の活動は約40万年前に足柄山地へとつながる湯河原火山の裾部から噴火し、溶岩流・火山灰・軽石などの噴出物を20万年ほどかけて堆積させ、最古期の円錐型成層火山体、古期箱根火山が形成された。その後、主要火山の中央に階段状陥没が起こり、古期外輪山が出現したとされる。

第2期は爆発的な活動はほとんど起きず、溶岩が静かに流出したのみでカルデラ内部に緩傾斜な楯状火山が形成された。そして、約5万年前には火砕流が10数回にわたり繰り返され、多量の溶岩が根火山を流下した。この活動後、楯状火山の西側が陥没し、新期カルデラができ東側に残った楯状火山が新期外輪山を形成したとされる。

第3期は火山体中央が爆発的な噴火を起こし、多量の軽石を噴出し、山体の東部、南東部に堆積した。その後、北西から南東方向の地殻の割れ目に沿って新たな噴火が起き、中央火口丘が形成された。そし



第4図 周辺地質図（沼津市史より一部改変 1999）

て、箱根山の活動の終末には古富士火山の活動が始まったとされる。古富士火山の噴火は約8万年前に溶岩や泥流の噴出があり、その後、1万年前には新富士火山が活動を始め、休止期を経て、三島・猿橋溶岩流を噴出した。古富士時代からの多量の火山灰は、偏西風にのり、広範囲にわたり厚いローム層を形成した。このような活動により形成された箱根山西麓斜面は谷が浅く、あまり侵食されていないために、緩斜面が比較的多く残っており、旧石器時代、繩文時代の遺跡が多く分布している。

今回、調査を行った田頭山古墳群は三島市南東域の箱根山西麓に所在し、周辺の丘陵は境川、沢地川、夏梅木川、宮川などに侵食・開析され、小さな舌状の丘陵地形を作り出している。当古墳群は侵食の高い丘陵に立地しており、上部ローム層はすでに流失していた。このため、表土下の包含層は黒色土で、遺構確認面は褐色土であった。

周辺には初期群集墳である向山古墳群、夏梅木古墳群、赤王山横穴墓群などが存在する。標高80m～90mの西側にのびる丘陵の緩い南斜面と宮川に張り出した尾根の付け根部分に当古墳群が分布する。1・2号墳は田方平野に張り出す丘陵のやや緩やかな南斜面に並列して立地する。1号方形周溝状遺構やSF3の火葬墓はこの丘陵の先端部の南斜面に分布する。3号墳はこの主尾根と南に張り出す丘陵の付け根部分の緩やかな南斜面に位置しており、田方平野南部を見渡せる景観である。  
(吉村)

## 第2節 歴史的環境

田頭山古墳群が所在する箱根山西麓には旧石器時代から歴史時代にいたる多くの遺跡が分布する。しかし、遺跡の大半は旧石器時代から繩文時代の遺跡であり、弥生時代以降の遺跡は少數である。その中でも当地域は古墳群及び横穴墓群が混在する地域である。他にも当山麓には横穴式石室のみが築造される地域、横穴墓が盛行する地域と地域的なまとまりがそれぞれ抽出でき、現在、石室墳はおよそ80基、横穴墓は240基と推定されている。

古墳時代前期には狩野川流域や箱根山麓を含む周辺には前期古墳は全く確認されておらず、古墳群の形成が始まるのは5世紀後半の向山1号墳とされる。1号墳は木棺直葬の埋葬施設が検出され、鉄剣、鉄鎌、直刀、鉄鉾などが副葬されていた。この古墳をはじめとして同一丘陵に前方後円墳を含むいわゆる初期群集墳が形成される。この古墳群は県指定史跡であり、全長25.4mの前方後円墳と10m～22mの円墳13基から構成されている。5号墳は刀子、須恵器提瓶が出土し、古墳群の造営が6世紀中葉まで及ぶとされる。

他方、韮山村では、5基から構成される多田大塚古墳群も築造されるようになる。3号墳は木棺直葬墳で大刀、鉄鎌、横矧板銅留短甲が出土し、4号墳の石室からは大刀、鉄鎌、四獸鏡、f字形鏡板付簪、横矧板皮綴短甲、須恵器等が出土している。そして6世紀前半には人物埴輪を有する駒形古墳が築造されるが、その後の系譜は不明である。また、近年、発見された赤王法師隠古墳は、径30m高さ2.5mほどの円墳で単独に立地しており、古墳時代前期・中期の古墳である可能性が指摘されている。

横穴系埋葬施設が箱根山麓地域に導入されるのは6世紀後半以降であり、遠江地域と比べると石室の導入は遅い。古墳群の築造時期は7世紀前半まで造営され、愛鷹山麓地域の古墳群に比べると比較的短期間である。そして、8世紀前半までには追葬・墓前祭祀へ移行する傾向が伺える。これは7世紀中葉以降、当地域で横穴墓の盛行と無関係ではないだろう。この点に関して平野吾郎は中央政権によるあらたな地域開発を目的とした渡来系民衆の集団植民によるものと位置付けている(平野1981)。いずれにしても、石櫃を有する横穴墓の存在や遠江系の土師器をもつことから外的要因による影響が強いであろう。

石室の形態は当地域では無袖式石室が主流であるが、開口部に立柱石をもつ石室も認められる。また石室内部には組合式箱形石棺を有する古墳が比較的多く認められることを特徴とする。当古墳群の北側には夏梅木古墳群が立地しており、夏梅木川に開析された標高30m～90mの末端丘陵上に分布する。こ

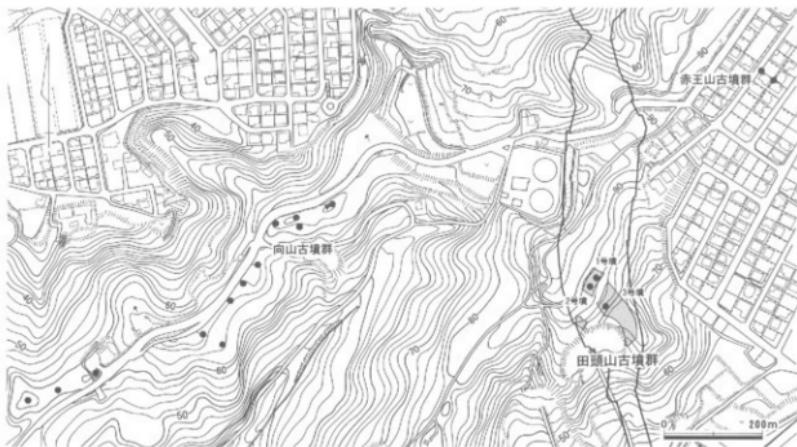


第5図 周辺遺跡分布図

の丘陵上には6世紀末葉～7世紀前半にかけて造営された群集墳が14基確認されている。石室は無袖式石室や開口部に立柱石を有する石室がみられ、玄室の平面形は長方形と胴張り形などが認められる。6世紀末葉から築造された古墳は、馬具や装飾付大刀などの豊富な副葬品をもつ。また、赤王山古墳群は2基の石室墳により構成され、夏梅木古墳群とほぼ同時期に造営されており、石室形態も類似性が認められ、その関係が注目される。

一方、横穴墓については6世紀後半にわずかではあるが認められる。しかし、横穴墓が盛行するのは7世紀中葉～8世紀前半で、この期間に爆発的に築造される。当古墳群の500m西側の南斜面には赤王清水洞横穴墓群が築造されており、さらに南には赤王法師隠古墳も認められる。赤王清水洞横穴墓群は8基が確認されており、7世紀後半から築造され、8世紀前半まで継続する。

以上、本遺跡群を含む当該地域は5世紀後半から古墳が築造され、8世紀初頭まで古墳群及び横穴墓群が築造されており、北伊豆地域の古墳（横穴墓）を考える上で重要な地域といえよう。



第6図 古墳群分布図

表3 周辺遺跡地名表

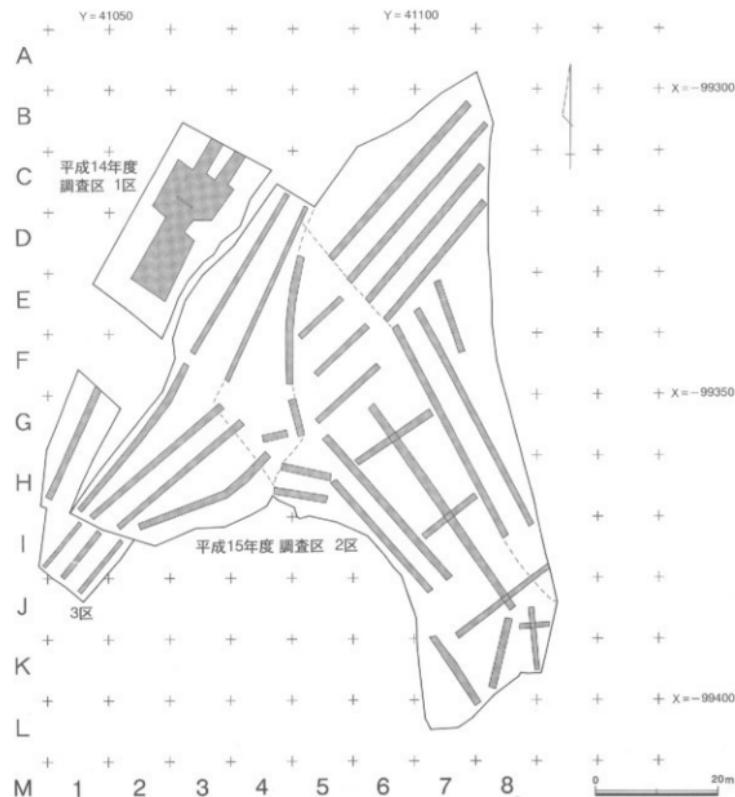
番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	田畠山古墳群	古墳(後)～奈良時代	古墳	20	伊豆遜信病院内遺跡	弥生～平安時代	集落
2	赤王山古墳群	古墳時代(後)	古墳	21	轟ヶ淵遺跡	古墳時代	散布地
3	向山古墳群	古墳時代(後)	古墳	22	柏谷横穴墓群E地区	古墳時代(後)	横穴墓
4	赤王清水洞横穴墓群	古墳(後)～奈良時代	横穴墓	23	柏谷横穴墓羣	古墳時代(後)	横穴墓
5	赤王法師隠古墳	古墳時代	古墳	24	柏谷横穴墓D地区	古墳時代(後)	横穴墓
6	赤王横穴墓群	古墳時代(後)	横穴墓	25	柏谷横穴墓A地区	古墳時代(後)	横穴墓
7	如来横穴墓群	古墳時代(後)	横穴墓	26	木戸古墳	古墳時代(後)	古墳
8	城西遺跡	弥生～古代	散布地	27	向原遺跡	縄文・弥生・古墳時代	集落
9	壱町田遺跡	弥生～古代	集落	28	鰐塚古墳	古墳時代(後)	古墳
10	井上遺跡	古墳(後)～古代	散布地	29	浜井塙古墳群	古墳時代(後)	古墳
11	井ノ森古墳	古墳時代	古墳	30	浮名古墳群	古墳時代(後)	古墳
12	夏梅木古墳群B群	古墳時代(後)	古墳	31	伽藍沢遺跡	縄文～古墳時代	散布地・集落
13	夏梅木古墳群A群	古墳時代(後)	古墳	32	国清寺北古墳群	古墳時代(後)	古墳
14	八重宿横穴墓群	古墳時代(後)	横穴墓	33	半ヶ淵古墳群	古墳時代(後)	古墳
15	落合・藤明古墳群	古墳時代(後)	古墳	34	多田大塚古墳群	古墳時代(中～後)	古墳
16	反り御遺跡	古墳～平安時代	集落	35	比丘尼塚	古墳時代	古墳
17	谷戸横穴墓群	古墳時代(後)	横穴墓	36	比丘尼塚遺跡	古墳時代	古墳
18	台崎古墳	古墳時代(後)	古墳	37	油免遺跡	古墳時代	集落
19	久保遺跡	縄文(中)～古墳時代	散布地	38	安久遺跡	弥生時代～中世	集落

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

### 第1節 1区

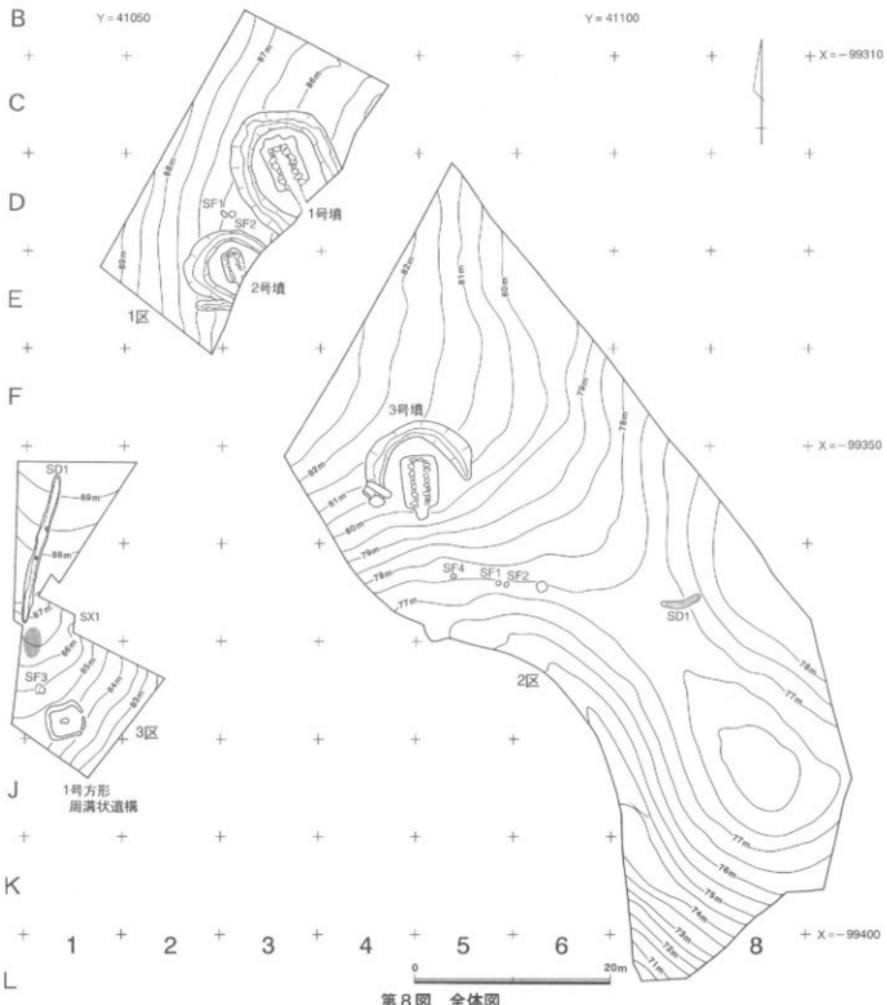
#### 古墳群の概要

田頭山遺跡は調査前までは『静岡県文化財地名表Ⅰ・地図Ⅰ』によると須恵器等が採集されており、散布地として登録されていた。同一丘陵上には赤王山古墳群が存在し、1981年に2基の横穴式石室墳が発掘調査されている。この古墳群は田頭山古墳群から直線距離にしてわずか250mほどの南に張り出す丘陵上に位置している。当古墳群の調査前状況は墳丘等の高まりは認められず、石室を構成する大型の石材が散乱する箇所が数箇所認められたに過ぎなかった。このため、赤王山古墳群と同様の古墳の立地状況を想定しながら、その周辺部や等高線に沿ってトレンチを設定し、確認調査を実施した。



第7図 トレンチ設定図

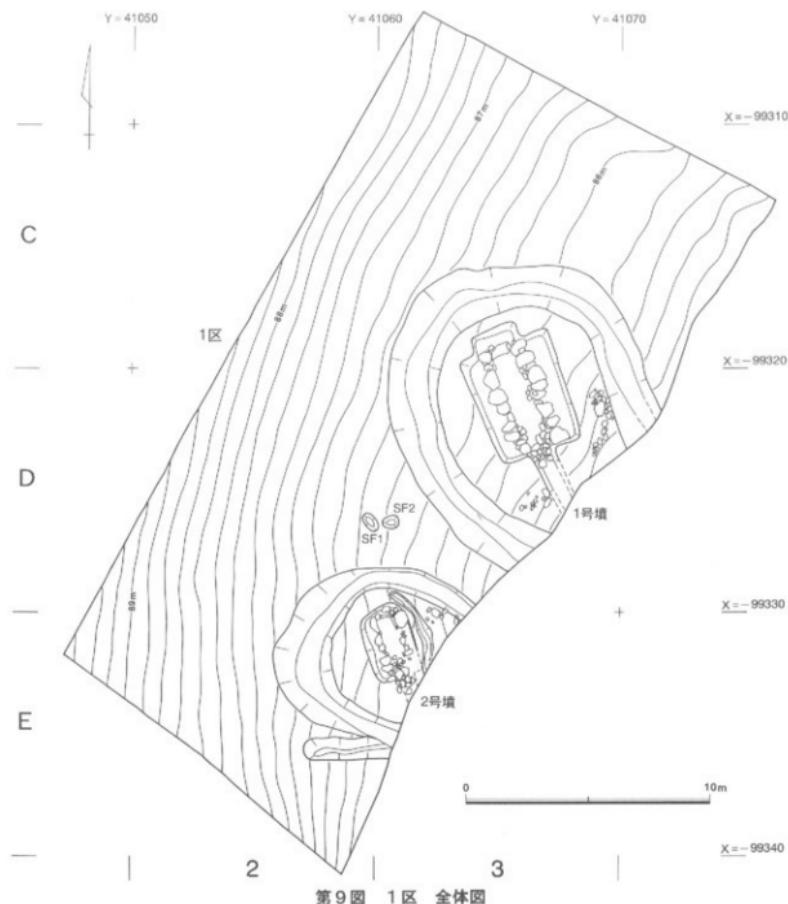
その結果、横穴式石室壙3基が確認された。古墳の立地状況、石室構造から大きく1・2号壙(1区)と3号壙(2区)に分離して捉えることができる。1・2号壙は西に張り出す丘陵の緩やかな南斜面に立地し、古墳間の間隔はおよそ10mで、並列して分布している。石室の主軸方位も西に20°前後傾いた方向を示す。さらに、1号壙の東側には深い谷状地形があり込んでおり、トレンチ調査では石室等の遺構は確認されなかったが、須恵器等の遺物が採集されていることから、本来はその東側にも古墳が存在して



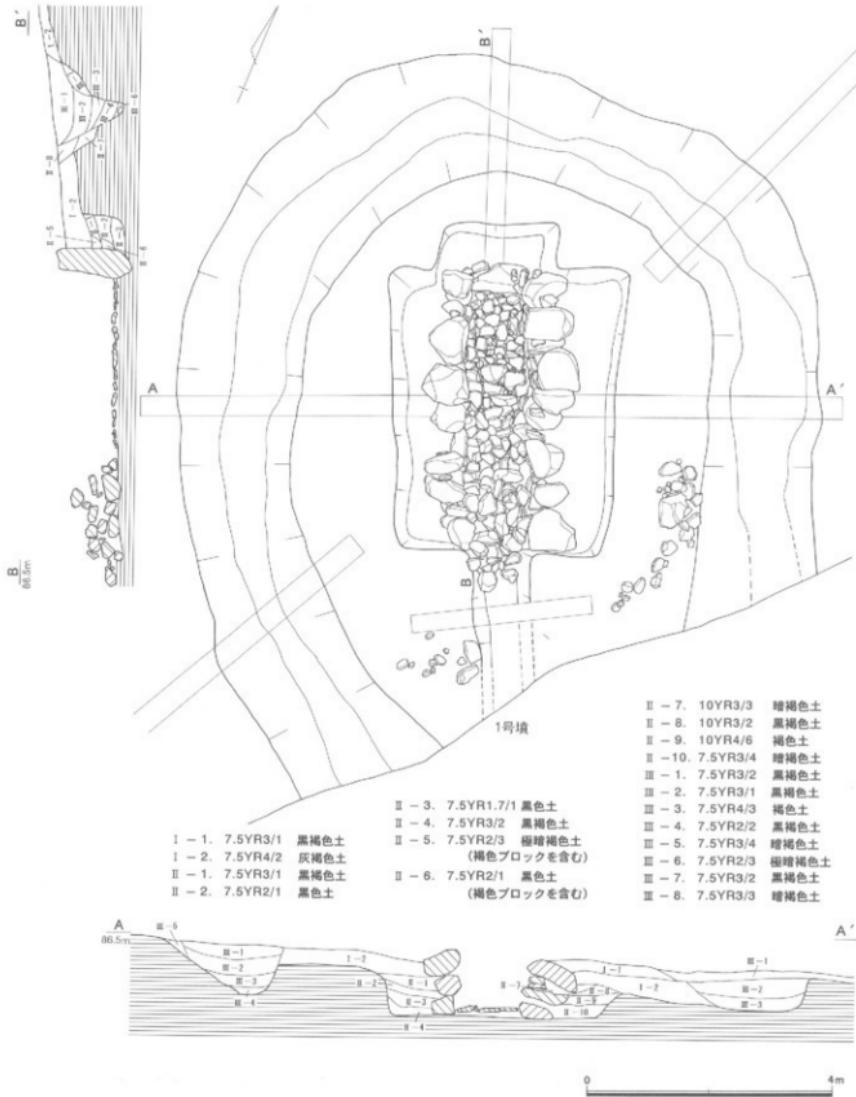
### 第8図 全体図

いた可能性が高い。一方、3号墳は1・2号墳よりおよそ南東へ30m離れており、西に張り出す丘陵と南に張り出す丘陵との付け根部分に位置する。主軸方位はほぼ真北を指す。1～3号墳は無袖式石室であるが、開口部の造作から左側壁（奥壁から開口部をみて）に立柱石を据えていることなどの共通点が認められる。築造時期は3号墳が6世紀末葉に構築され、その後1・2号墳の順に構築されたと考えられる。

1・2号墳が位置する丘陵から50m南西へ離れた南斜面（3区）に奈良時代の方形周溝状遺構1基、火葬墓1基、集石遺構が検出された。方形周溝状遺構の周溝内より須恵器高台坏・摘み蓋・長頸壺・土師器坏等が出土し、中央部には埋葬施設と思われる浅い土坑状の掘りこみが認められる。周囲には石室を構築する石材は認められることから、木棺墓の可能性が高い。そのすぐ北側には、木炭を充填した火葬墓（SF3）が検出されている。火葬墓は土師器長胴壺を正位の状態で埋設しており、内部には人骨等



第9図 1区 全体図



第10図 1号填 填丘図

は認められなかった。このほか、3号墳の周囲にも長胸壺を正位の状態で据えたSF1・SF2が検出されており、火葬墓としての性格が強い。

このように若干、墓域の移動があるものの、当古墳群は概ね同一丘陵内において6世紀末葉から7世紀まで横穴式石室墳が構築され、8世紀中葉は方形周溝状遺構、8世紀後半には火葬墓が築造される。7世紀後半～8世紀前半に空白城があるものの、概ね同一集団による墓制と考えられ、葬法の変遷が伺われる調査事例である。

### 1. 1号墳（第10図～第15図 図版2～5）

#### 墳丘

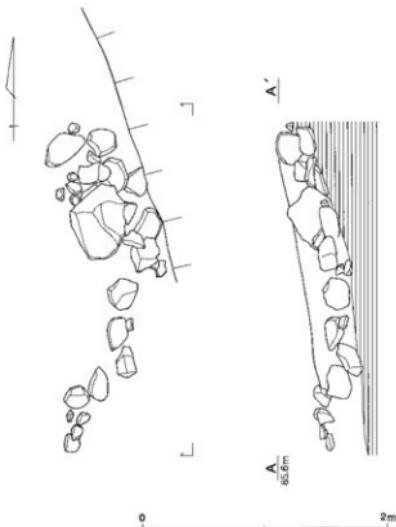
1号墳は比較的緩やかな丘陵南斜面に築かれている。大半の盛土は流失しており、わずかに東側部分で認められたに過ぎない。墳形は円形を呈し、東西で径10.8mを測る。古墳南東部分において列状に石が検出されている。径0.5mほどの礫や人頭大の礫から構成され、墳丘裾に沿って認められる。当初は石室を構築する石材が廃棄されたものと思われたが、周溝内にこの石材が認められることから、墳丘構築に伴う列石と判断した。墳丘の南東部分は標高の低い場所であり、この部分にのみ列石が認められることから、これは盛土流出防止を目的としたものと考えられる。

周溝は比較的明瞭に観察でき、この幅は西側で1.8m、北側で2.2m、東側は1.7mである。深さは奥壁側が最も深いが、底部は南に向かって低く傾斜している。周溝の立ち上がりは急であり、周溝底部と墓壙底部は、ほぼ同じレベルまで掘削されている。また、古墳の北側は急斜面になっており、特に西側の周溝底部は一定ではない。このように流路の痕跡を残していることから盛土流出防止や排水の役割を意識したものといえる。周溝内の上層において土師器の細片が認められるが、儀礼等の痕跡は不明であった。

墓道は南に向けて掘削されている。閉塞部分との段差は認められず、奥壁から緩やかに低く傾斜している。この墓道内から耳環が1点出土している。南に張り出す尾根に切断されているため不明であるが、墓道はさらに直線状に南へ延びていくと思われる。本来は3号墳が立地する丘陵に統一、緩やかに南に傾斜していったものと考えられる。

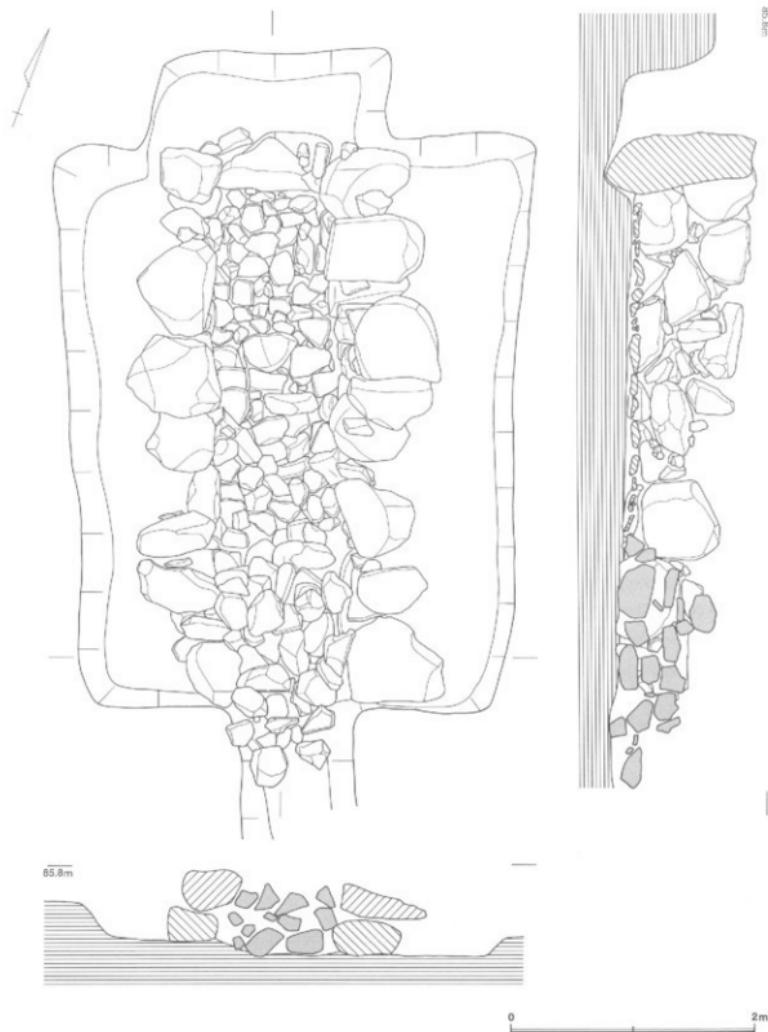
#### 石室掘り方

石室掘り方は墳丘中央部に穿たれている。平面形は奥壁部分が突出した形となっており、全長5.4m中央部幅3.6m奥壁幅1.92mである。奥壁は長さ1.0m幅1.0m奥行き0.48mの大型の石が広口積みされている。1枚の石が検出されたに過ぎないが、さらに石が乗っていた可能性が高い。突出した奥壁部分には黒褐色土と暗褐色土が裏込め土として確認される。この突出した奥壁部分の掘り方は、奥壁より0.66m離れており、側壁部分と比べるとやや広い印象を受ける。また、突出部分の幅は奥壁に相当する幅であることから、最初に奥壁を設置するための土坑を掘削して奥壁の基底石を設置し、その後に側壁部分の掘り方を掘削した可能性も想定される。また、右側壁部分は側壁1段ごとに黒褐色土と黒色土の互層が



第11図 1号墳 列石実測図

認められ、疊を詰める造作はない。ただし、左側壁側はこうした互層は明瞭ではない。この裏込め内から遺物は出土していない。

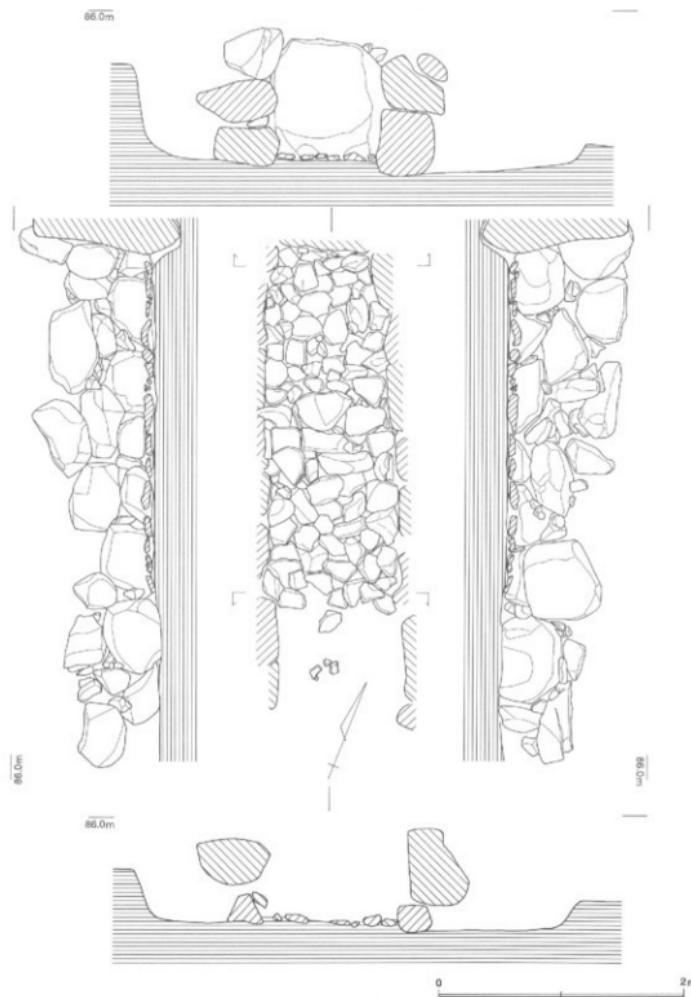


第12図 1号墳 閉塞石実測図

## 石室

1号墳の埋葬施設は南から西へ $21^{\circ}$ 傾く方向に開口する無袖式石室である。石室全長4.1m幅1.06m、掘り方底面からの残存高1.0mを測る。石室の長さと幅の比率は4:1である。奥壁は掘り方底面より掘り窪められた穴に据え、大型の石1石が残存していた。

右側壁は2段残存しており、高くなるにつれて大型の石材を用いている。この側壁2段は奥壁の1枚



第13図 1号墳 石室展開図

石の高さに相当する。左側壁は2段残存しており、開口部には立柱石が認められた。ただし、基底部には小型の石を用いており、この立柱石は2段目から据えられていた。立柱石の広口面は石室の側壁に揃っておらず、やや移動している。側壁の持ち送りはそれほど認められない。

床石は奥壁から2.8mの位置まで認められる。手のひら大の扁平な石を用い、敷き詰められている。中央部には、やや細長い石や大型の石を用いているが、石室空間を区分するほど明瞭ではない。この周辺で丸玉が3点出土している。

閉塞石は奥壁より2.8mの位置で、左側壁の立柱石よりやや開口部側にあたる。そこから長さ2.0m幅

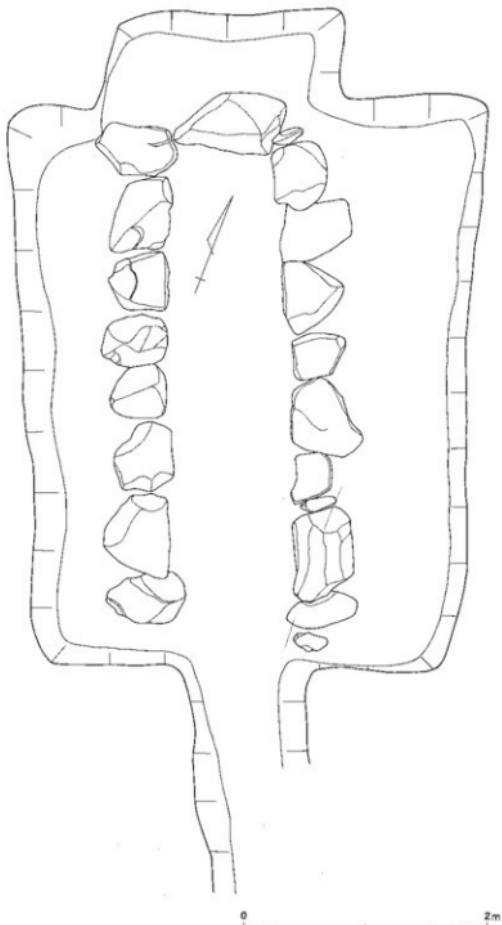
1.1mにわたり、閉塞石が確認された。人頭大の礫の小口を奥壁側に向かって、3段から4段残存していた。この閉塞石の最下部は、やや大型の石材を使用し、奥壁側から4石が3列認められる。玄室側から面を揃えて並べ、次に細長い石を4石、塊状の石を4石、人頭大の石を2石と規則正しく丁寧に置かれている。この閉塞石下部と床石のレベル差はさほど変わらず、開口部に向けて低く傾斜している。

#### 遺物出土状況

石室内の遺物は、右側壁寄りの中央部で直刀1振り、丸玉3点、鉄鎌10本、鉄製針1点、奥壁と左側壁のコーナー部分で、刀子1点が出土した。直刀は切先を奥壁側に向けて出土した。この刀の下には、人頭大の礫が床石とは別に設置されていた。鉄鎌は多少散乱しているが、10本で1束として出土し、鎌身部を奥壁側に向けて置かれていたと推定される。その中には端部に孔が穿たれた針が1点認められた。丸玉は石室中央床石で2点出土した。

#### 出土遺物（第16図 図版19・20）

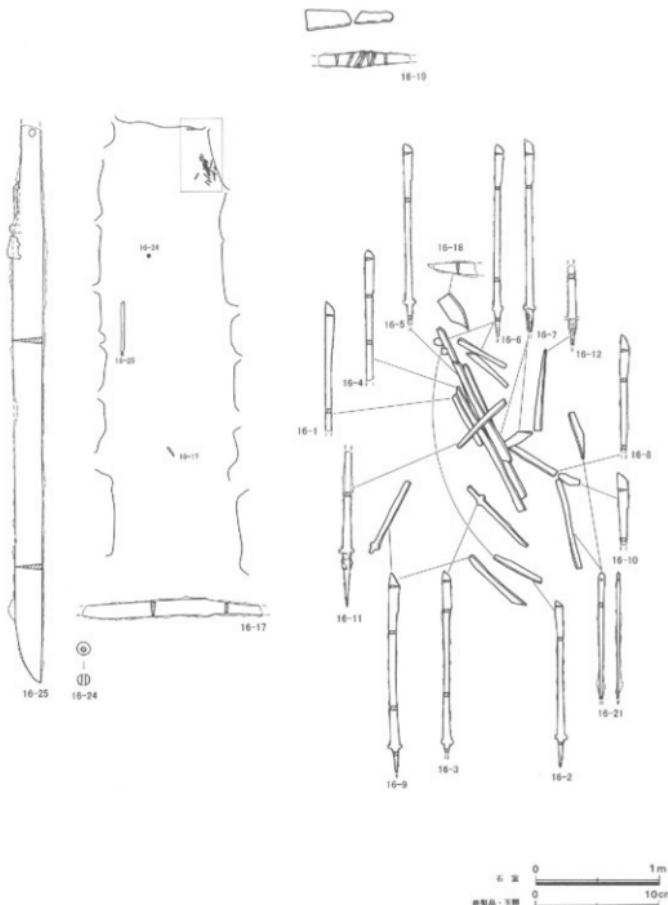
16図-1～10は尖根式片刃箭鏃である。16図-1と2は鏃身に闕を有しないもので、その他は、撫闕を有する。長さ15cm前



第14図 1号墳 基底石実測図

後刃部3.0~3.7cm茎部2.4~4.7cmである。特に16図-8~10の鎌身端部は、茎で斜めに裁断され、鋭角的になるものもみられる。茎間は、すべて鍊闇である。16図-17は平棟平造りの刀子であり、残存長14.7cm 刃部長10.2cm 茎部長4.5cmを測る。茎間は不均等の両闇である。棟はやや内湾して切先に向かう。刃部は緩やかに外反し、切先へ至る。16図-18と19は同一個体である。不均等な両闇で、撫角である。闇部には木質が付着する。切先の形状は先端部が欠損しているが、ふくらである。16図-20は切先部分のみであるが、カマス切先に近い形状である。残存長3.8cm先幅0.9cmを測る。

16図-21は鉄製の針である。鉄鎌束の中から出土している。先端部は欠損しているが、残存長10.6cm 最大幅0.5cmを測る。端部から0.5cmの位置で径2mmの穿孔がみられ、この部分は薄くたたき延ばされて

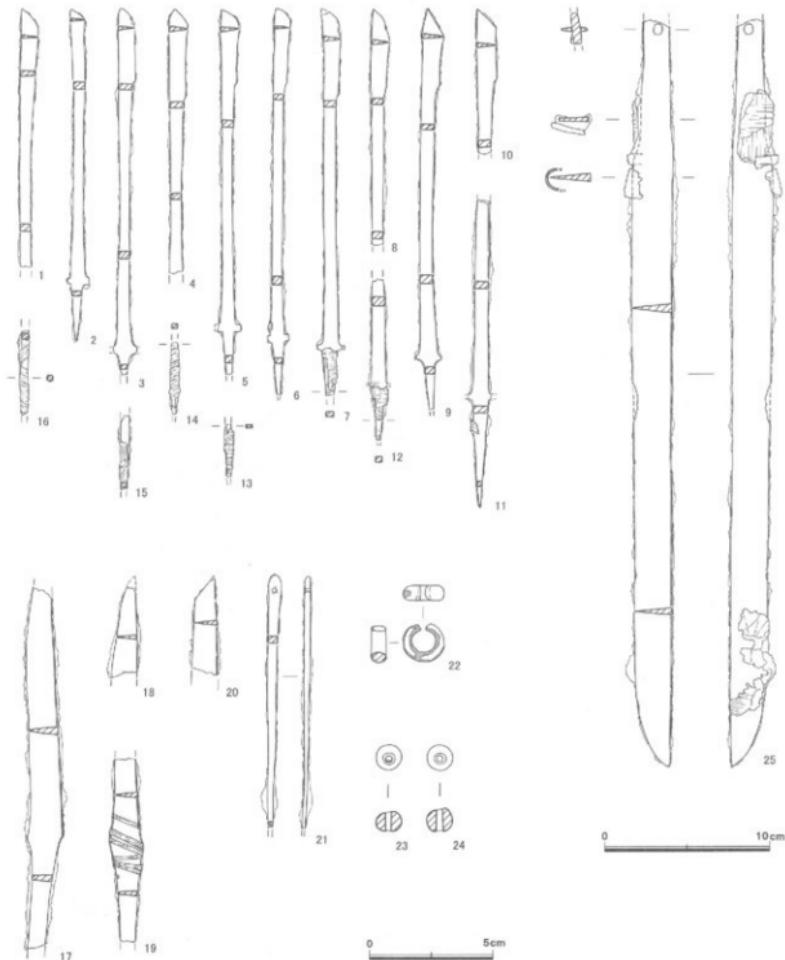


第15図 1号墳 遺物出土状況図

いる。断面は方形である。

16図—22は耳環で、墓道覆土より出土した。銅の錆化が著しく、金属箔の遺存状態は良好ではないが、細めの銅芯に金属箔が巻きつけられる。色調は金色を呈する。

16図—23・24は蛇紋岩製の丸玉で、23は石室内の覆土から出土した。24は奥壁から1.05mの石室中央床石から出土している。16図—25は、残存長45.6cm刃部長37cm茎部長8.6cmである。茎関は不均等の両関で、撫角である。目釘穴は径6mmの楕円形を呈し、長さ1.6cmの鉄製目釘が遺存する。切先はふくらで、佩裏側には柄縁金具が部分的に残存する。また、刀身の先端部付近には鞘木の一部が遺存する。

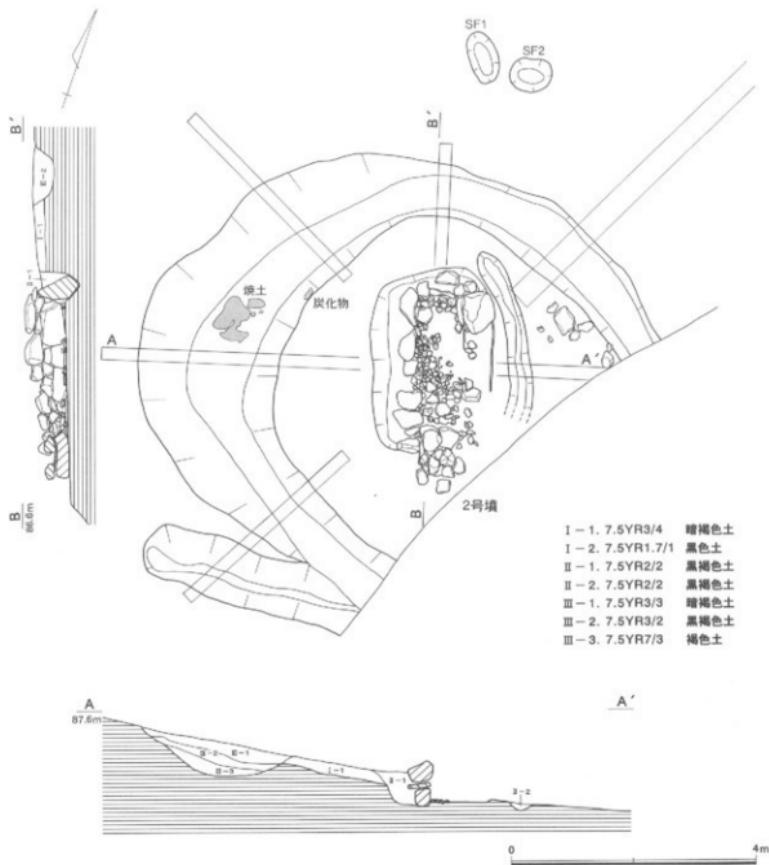


第16図 1号墳 遺物実測図

## 2. 2号墳（第17図～第19図 図版6・7）

## 墳丘

2号墳は1号墳の10m西側に位置している。1号墳同様に墳丘盛土は流失しており、明確に確認されなかつたため、墳丘基底面で石室を検出した。周溝は地形に応じて掘削されており、標高の高い北西部分で最大幅1.4m深さ0.6mであり、開口部に向かって窄まる。最大幅の周溝部分は標高が高く、多くの水が流れ込んでくるために掘削したものであろう。墳丘規模は径8.8mの円墳である。1号墳と同様、標高の低い墳丘南東部分において石が列状に設置されていた。周溝内においても石が認められることから、1号墳同様、墳丘内にあったものと考えられる。また、墳丘基底面の東側部分には弧を描く溝状遺構が検出されている。この溝は墳丘構築後には埋没されており、盛土の状況が不明であるため明確では



第17図 2号墳 墳丘図

ないが、盛土が崩れやすい低い部分に掘削されていることから、墳丘維持のためとも考えられる。周溝埋土Ⅲ-3層上面には焼土や炭化物が検出されている。この層から土師器の細片が出土しているが、時期を明確にするまではいたらない。いずれにしても、墳丘構築後に、ある程度埋土が堆積した状態をあらわしていると推定される。これは周溝内における儀礼行為として考えられ、あるいは、単なる挽火行為と解釈することができる。

#### 石室掘り方

墳丘盛土はほとんど流失しており、表土直下で墳丘基底面が検出され、この面で石室掘り方を確認した。左側壁の開口部は搅乱により破壊されており、明確ではないが隅丸長方形をなすと思われる。石室掘り方は側壁より0.5m離れており、II-1層が裏込土として確認されるが、奥壁側は掘り方が近接する位置に設定されている。全長3m幅1.94mで1号墳と比較すると小規模である。墓道は石室主軸に合わせて延びており、残存長0.6m幅0.8mである。

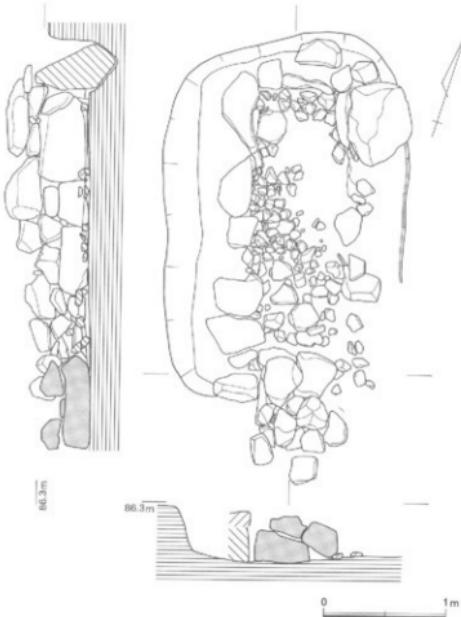
#### 石室

2号墳の埋葬施設は南から西へ20°傾く方向に開口する無袖式石室である。石室は特に左側壁部分が大きく搅乱が及んでいたが、奥壁、右側壁、左側壁の一部は遺存していた。推定すると全長2.43m幅0.82mである。石室全長と幅の比率は3:1である。奥壁は1枚の石が残存しており、側壁2段とほぼ同じ高さに相当する。側壁は2段から3段残存しており、横口積み、小口積みが認められる。側壁基底石は右側壁で6石、左側壁で3石残存していた。奥壁寄りでは細長い石を横口積みに設置し、開口部にかけて

小口積みに置かれている。特に開口部には立柱石ではないが、他の側壁基底石とは異なる三角形状の石を用いており、側壁に埋葬空間を区画する意図がみられる。床石は搅乱が及び、奥壁から左側壁にかけて抜き取られた状態であったが、本来は、全面に床石が施されていたと考えられる。閉塞石は奥壁から2.15mの位置で検出された。上部は乱雑に積まれていたが、最下部は細長い大型の石の小口面を石室に向けて設置していた。この下部の閉塞石は掘り方底部より掘り窪めて設置されておらず、床面上に設置されている。このため石室構築時に据えられていたのかは判然としないが、この上部に積まれた閉塞石とは大きく異なり、追葬時に動かすとは考えにくいほど大型の石を用いていることから、段を意識している可能性がある。

#### 遺物出土状況

石室床石からは刀子が1点出土したのみであった。切先を奥壁側に向け、石室中央右側壁よりから出土している。



第18図 2号墳 閉塞石実測図

鉄鎌は左側壁寄りの床石が抜かれている部分から破片が数点出土したに過ぎない。よって、この古墳の築造時期は不明であるが、石室規模から判断すれば7世紀中葉以降であろう。なお、周溝内より出土した土師器は細片であり、器種、器形も判別できなかった。

#### 出土遺物（第20図 図版19）

20図-1は刀子で、刃部は欠損しているが、残存長10.4cm元幅1.6cmである。茎部は6.8cmで、木質が残存する。茎と刀の境は両闇である。柄縁金具は楕円形を呈し、内部にも木質が残存する。

20図-2は片刃箭鎌で、5と同一個体であると考えられる。棘闇で茎部は木質が残存する。20図-3は鎌身部のみ残存し、片刃箭鎌である。鎌身部は明瞭な闇を持たない。20図-4・6は頭部で、4は残存長4.7cm、6は残存長7.4cmを測る。7は鉄鎌の茎部である。

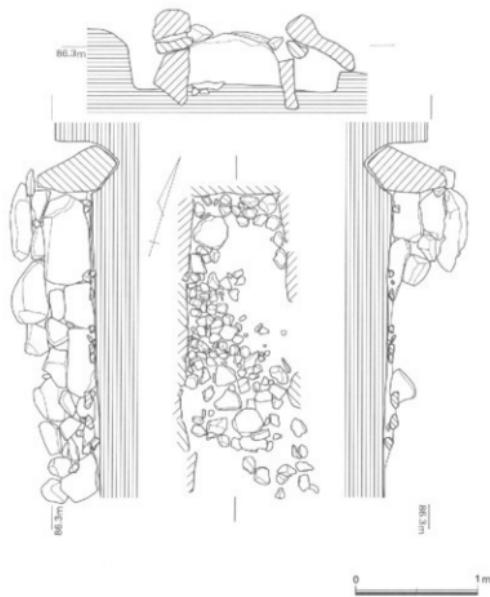
#### その他の遺構（第8・9図）

1号墳と2号墳の間からSF1・2が検出され、楕円形を呈する。覆土は黒褐色土で、遺物等は出土しなかった。時期・性格については不明である。

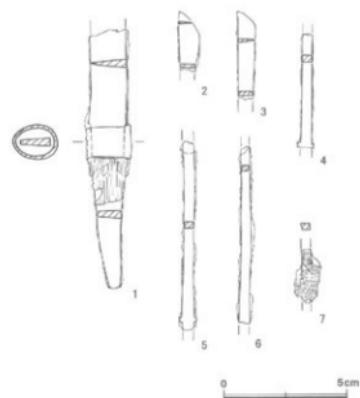
## 第2節 2区

### 2区の概要

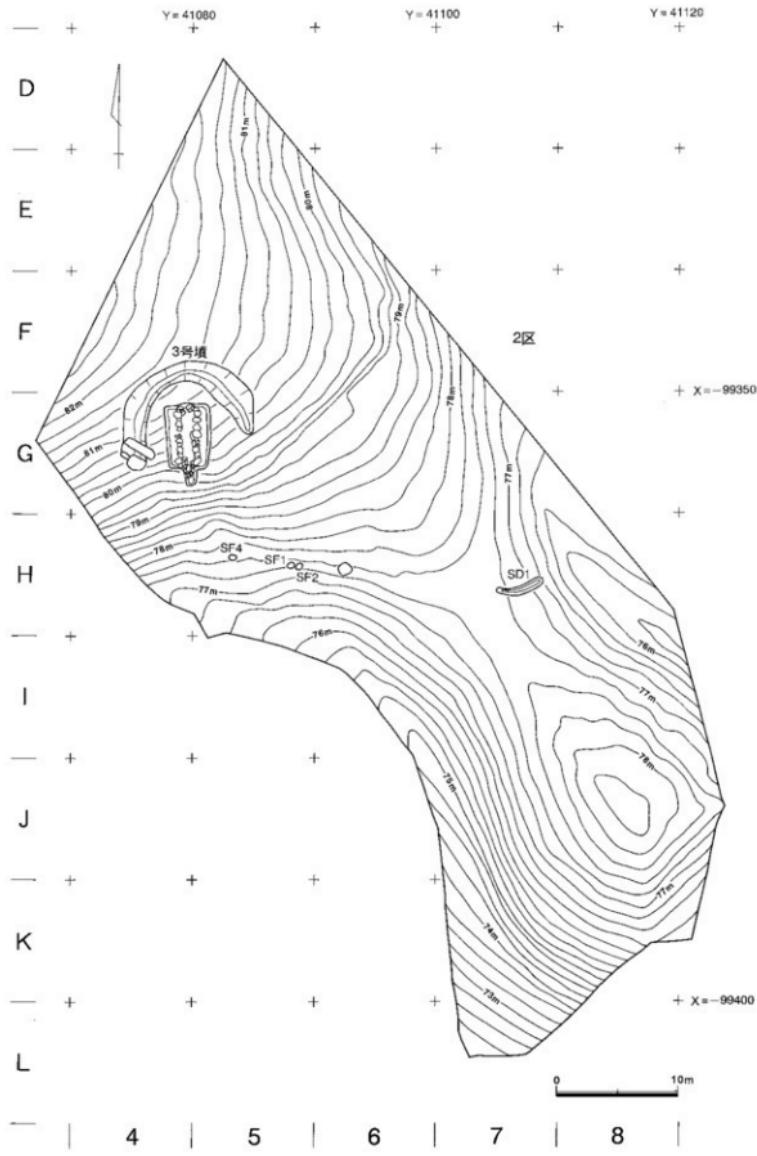
2区では横穴式石室墳1基、火葬墓3基、溝状遺構1基が検出されている。調査区は南に延びる丘陵頂部から南斜面であり、頂部は比較的平坦である。3号墳はその頂部と南斜面の地形の変換点に位置し、主尾根との付け根部分にあたる。火葬墓3基は、3号墳より南東方向の緩やかな南斜面に立地する。そのうち2基は、隣接して検出され、楕円形の墓壙に土師器の甕を正位に据えていた。この他、弧状を描く溝状遺構が丘陵東斜面から検出されており、土師器の細片が出土した。また、この丘陵の先端部は、当初から高まりが認められ古墳等が想定されたが、遺構・遺物は確認されなかった。



第19図 2号墳 石室展開図



第20図 2号墳 遺物実測図

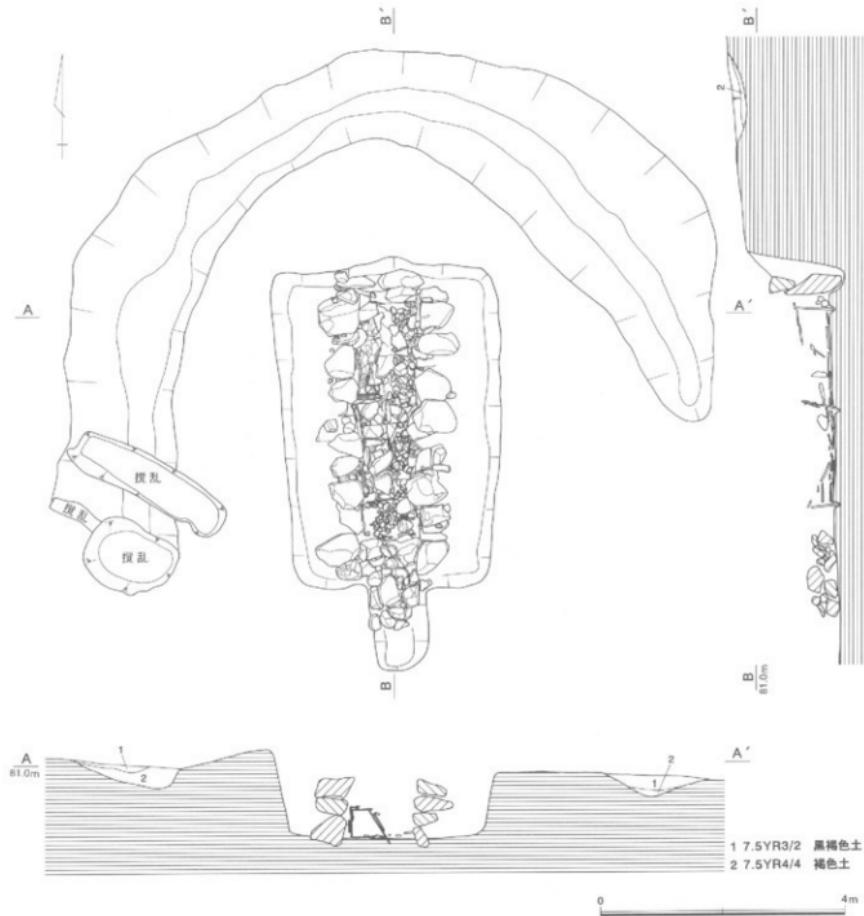


第21図 2区 全体図

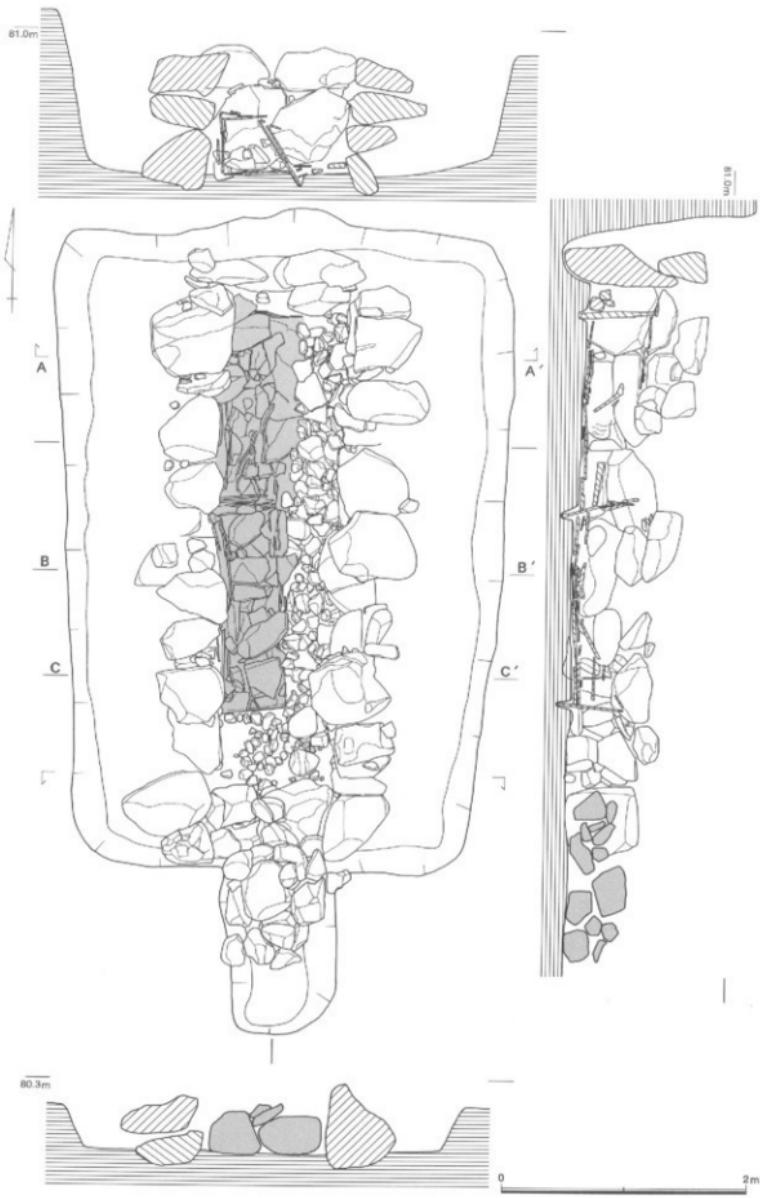
## 1 3号墳（第22図～第32図 図版8～13）

## 填丘

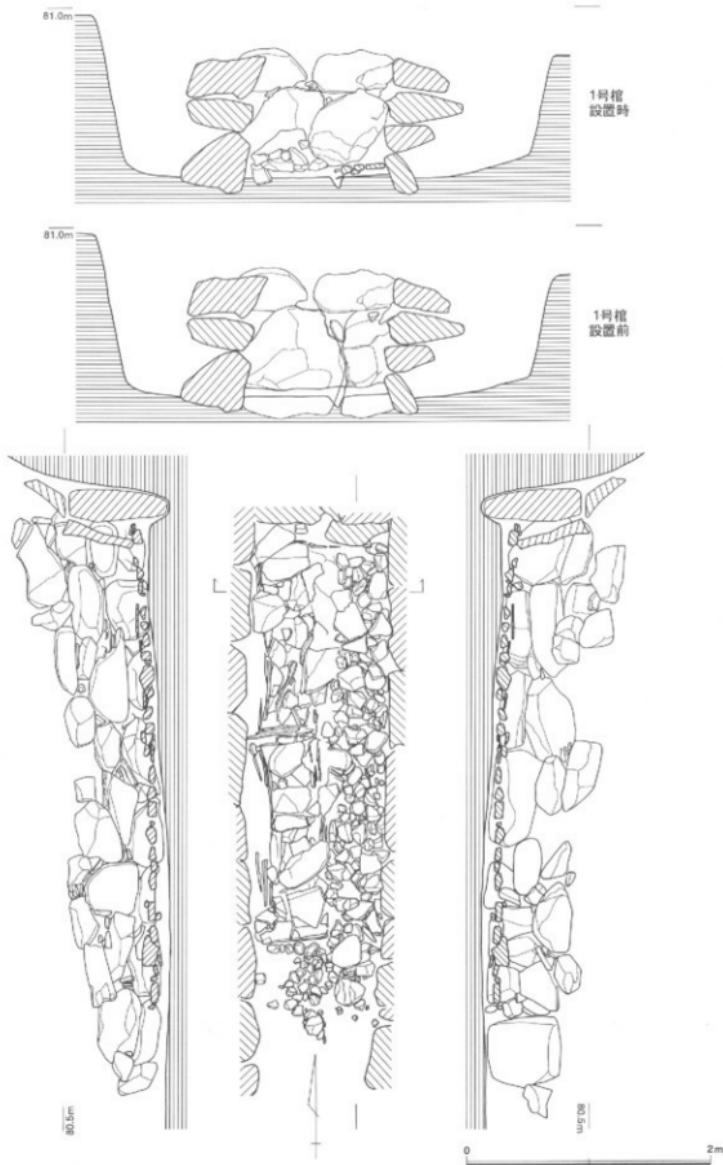
3号墳は1・2号墳が立地する丘陵と南に張り出す丘陵の付け根部分に位置する。1・2号墳の床石レベルと3号墳の床石レベルにはおよそ6.0mの比高差が認められる。周溝は比較的明瞭に判別でき、ここから推定すると墳丘は東西で径11.0mの円墳であり、周溝は開口部の手前まで検出された。周溝は、幅2.0m深さ0.2～0.3mである。周溝の立ち上がりは1号墳と比べると緩やかである。表土直下は地山面で、墳丘盛土はすでに流失していたため、この面で遺構検出を行った。3号墳の立地状況は1・2号墳



第22図 3号墳 填丘図



第23図 3号墳 閉塞石実測図



第24図 3号墳 石室展開図

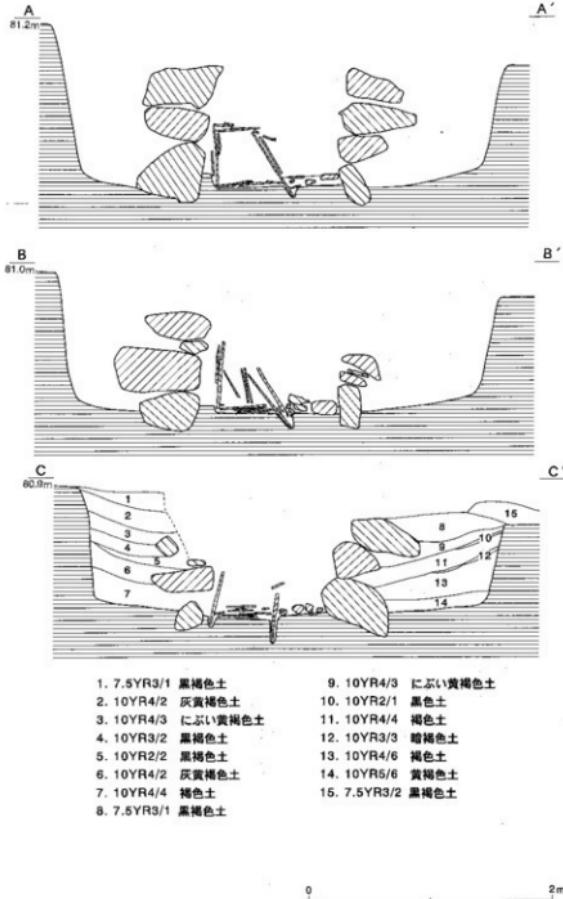
の立地と比べると比較的平坦地に選地していることから、墳丘内の列石や溝等の墳丘構築に関わる造作は認められなかったと思われる。

#### 石室掘り方

石室掘り方の形状は長方形を呈しており、コーナー部分を明確にしている。奥壁と掘り方の位置は近接しているが側壁は0.5~0.8m離れ、石室裏込め土が明瞭に認められた。この裏込めには石を用いておらず、黄褐色土、暗褐色土を互層にしており、1段積むごとに厚さ0.20mの暗褐色土と厚さ0.10mの黄褐色土を入れている様子が観察された。墓道は直線的に延びており、残存長1.3m幅0.92mである。

#### 石 室

3号墳の埋葬施設は南から西に1°傾く方向に開口する無袖式石室である。天井石はすでに除去されていたが、側壁、奥壁ともに比較的遺存状況は良好であった。この天井石と思われる石材は、3号墳の南方に集積されており、4枚ほど確認された。左側壁中央部の側壁は一部崩落する危険性があり、作業の安全を確保するため、この上部の石材を除去して、石室内の調査を行った。石室全長は4.5m幅1.18m残存高1.0mである。石室の長さと幅の比率は4:1である。奥壁は格子状に大型の石材を用い、特に基底石は広口縦積み、上部は広口横積みに設置している。側壁は2段から4段遺存しており、小口、横口積みが認められる。左側壁の開口部に、この立柱石を基底石として据えており、この部分より南には側壁は設置されない。1号墳も同様に左側壁には立柱石が認められるが、側壁2段目に設置されている



第25図 3号墳 断面図

こと、また、その前方には側壁が設置されていることから、この構築方法は1号墳と若干異なる。奥壁から閉塞石まで床石が認められるが、組合式箱形石棺の床下には認められない。拳大ほどの石を使用し、石材は側壁と同様である。閉塞石は、開口部の立柱石の位置で認められた。上部は人頭大の石が乱雑に積まれていたが、最下部は側壁を構築する大型の石を用い、奥壁に小口面を向け2石設置されていた。

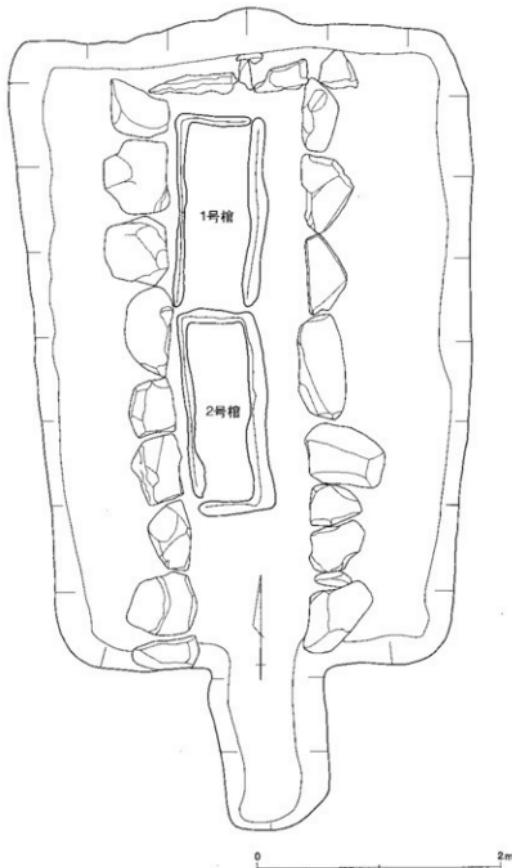
### 組合式箱形石棺

#### 1号石棺（第28・29図 図版10）

1号石棺は右側壁寄りの奥壁側で検出された。石棺の内法は全長1.54m幅0.55m高さ0.51mで、床面積は0.84m<sup>2</sup>を測る。石棺を構築する石材は基本的に板状節理の輝石安山岩で、色調は灰白色を呈する。この石材は箱根山麓の小田原市根府川周辺で採取される可能性があるという（森嶋氏のご教示による）。この石棺の検出状況は、左側の長側石は石棺の内側に傾き、蓋石も崩落している部分も認められるが、右側壁部分の側壁は自立しているなど、残存状況は比較的良好である。

1号棺と2号棺の設置順序は、短側石を仕切り石として使用していることから、明確な時期差は不明である。しかし、この仕切り石は1号棺とほぼ同じ幅であることから奥壁側から石棺を据え、その後に2号棺を据えたと考えられる。また、石棺自体は同時に築造し、石棺外からは耳環が1対開口部寄りで検出されていることから、追葬時は石棺外に遺体を埋葬したと考えられる。

3号墳から検出された組合式箱形石棺は、短側石は1枚で構成され、蓋石、長側石、床石は複数の板石を重ね合わせて箱状に空間を確保していることを特徴としている。特に短側石、長側石ともに平滑な面を内側に据えている。



第26図 3号墳 石室基底石実測図

### 短側石

奥壁側の短側石は1枚で構成され、縦の長さ0.65m横幅0.7mの正方形状で、端部には調整痕が明瞭に残る。掘り方下に据えられていた。奥壁と石棺の間には0.2m程の間隙があり、短側石の西半部分を固定するため拳大の石が設置されていた。さらに東半部分には、鏡石状の石を奥壁とは別に設置し、そこに短側石に密着させ固定していた。この短側石の重量は15kgである。

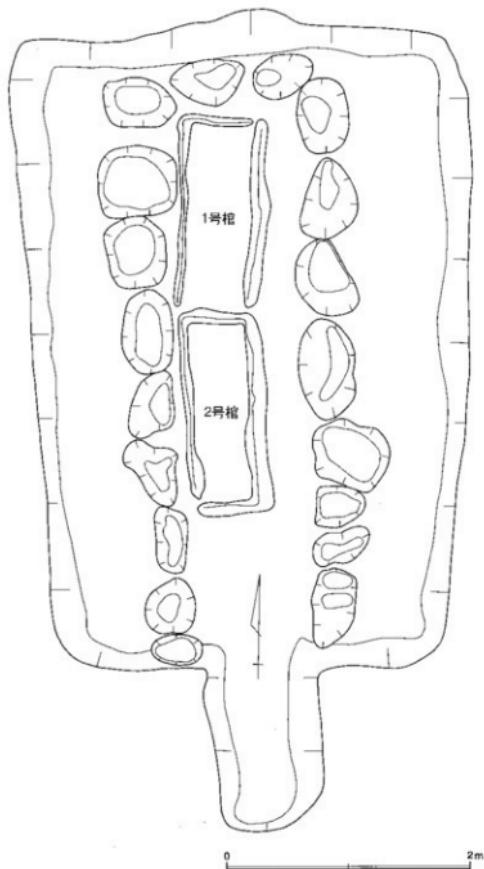
### 蓋石

奥壁側では蓋石が側石に載っており、その他は石棺内に崩落した状態で検出されている。復原するとおよそ7～8枚の蓋石が載っていたと推定される。この蓋石は、縦0.4m横幅0.7mの長方形形状の板石を重ね合わせて設置していたと考えられる。石材は他の側石や床石より厚く重い。この蓋石の総重量は、

およそ49kgである。開口部側の短側石も同様に掘り方下に据えられているが、2号石棺の短側石と共に用いている。

### 長側石

左長側石は4枚から構成される。長さ0.7m幅0.5mの長方形形状の板石を重ね合わせて縦位に用いている。蓋石と接する端部は、面を揃えて研磨されているが、側石は掘り方下0.1～0.15mまで深く据えられており、基底部には調整痕はみられず、一定していない。他方、右側石は5枚から構成され、長方形形状の板石を縦位に据え、重ね合わせている。長側石の総重量は、左側石で51kg、右長側石は49kgで、ほぼ同程度の重量である。つまり、この両側石の端部で総重量49kgの蓋石を支えていたことになる。この蓋石と接する端部には、直線状に白色物質が付着しており、蓋石にも認められることから目張りとして密封していた可能性がある。短側石は両長側石を挟み込むようなかたちで組まれている。



第27図 3号墳 石室掘り方実測図

## 床石

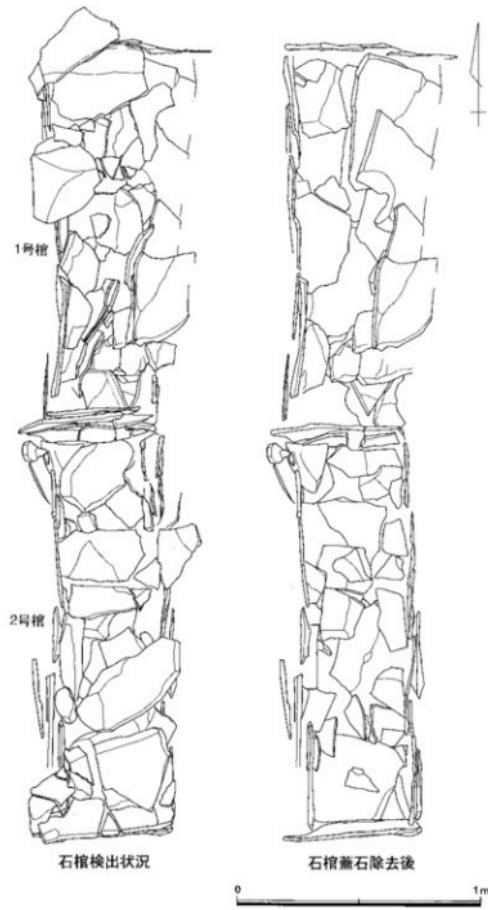
床石は12~13枚の板石を用いている。この石材は他の部材と同じ輝石安山岩であるが、厚さの薄い石材を使用している。重ね合わせ方は一定しないが、石棺幅に合わせるように2枚ないし3枚ずつ重ね合わせている。この床石の総重量は40kgである。床石全面に敷設されておらず、空白域が、若干残る程度である。床石はほぼ水平であり、安山岩の細片が多数認められた。これは石棺外の床石下にも認められ、床石上にはほとんど検出されていないことから、石室構築時に石棺の一部を整形していたと考えられる。また、側壁裏側にはこの石材は検出されていないため、ある程度側壁が設置された段階で、端部の整形等の微調整が行われたと推定される。

### 1号石棺内遺物出土状況（第32図）

1号石棺内の床石からは小刀3本、刀子1本、弓金具1点が出土した。右長側石に沿って奥壁側から弓金具1点が出土し、そこから0.3m離れた位置で小刀2本、刀子1本が切先を奥壁側の短側石に向けて設置されていた。35図-4は、銀象嵌が施された小刀である。一方、左長側石に沿って35図-3は、切先を開口部に向けて配置されていた。

### 2号石棺（第28・30図 図版11）

2号石棺は1号棺に接続して検出され、奥壁側の短側石は2号棺と共に用いている。使用される石材も1号棺と同様で、床石も薄い板石が認められる。仕切り石としての短側石の幅は1号棺に相当する幅であることから、石棺の構築順序は、1号棺→2号棺であると考えられる。石棺の内法は全長1.55m幅0.47m残存高0.4mで、床面積は0.72m<sup>2</sup>である。全長は1号棺より長いが、幅は狭く、高さは低い。



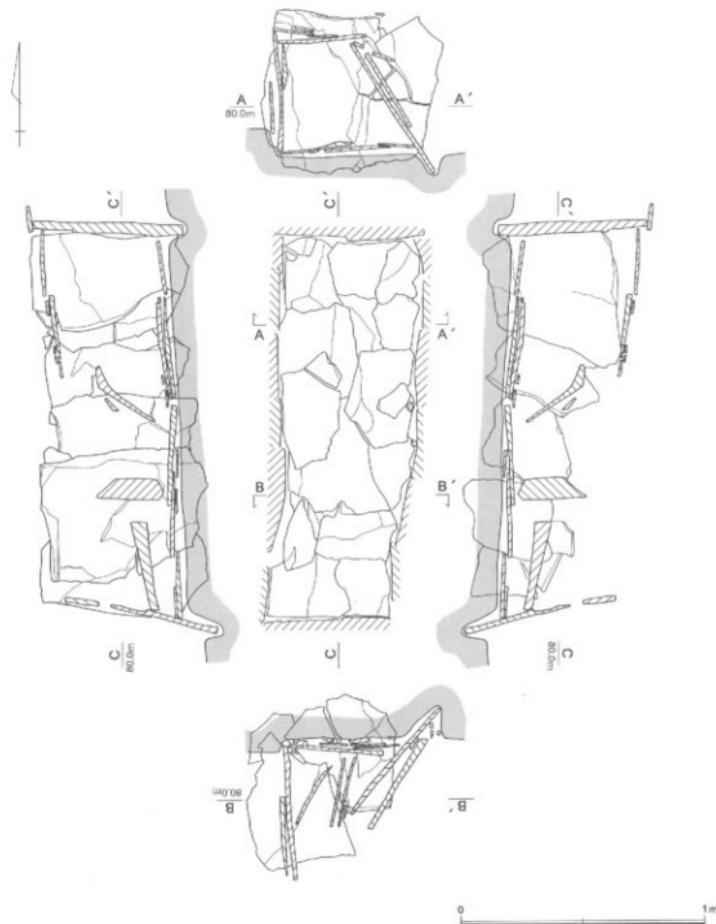
第28図 3号墳 1号棺・2号棺平面図

### 短側石

開口部側の短側石は1枚の石で構成され、縦0.55m横0.6mのほぼ正方形である。端部に整形痕が残る。石棺幅より大きい石材を用い、平滑面を内側に向けて設置している。掘り方下に据えられ、短側石を固定する石は認められなかった。この短側石の重量は10.6kgを測る。

### 蓋石

開口部側の蓋石は短側石の上にのっていたが、奥壁側では崩落した状態であった。復原すると1号棺同様、およそ7～8枚が使用されていたと推測される。石棺内部に平滑な面を向け、重ね合わせて設置

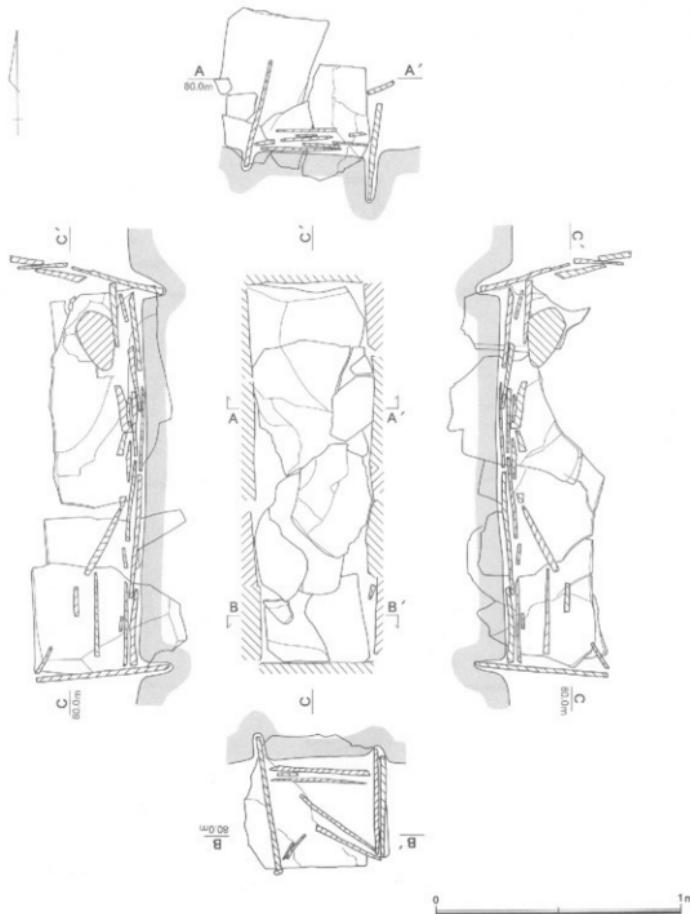


第29図 1号棺展開図

している。これらの蓋石は他の側石より厚さのある石材を用いており、総重量は56kgである。短側石寄りの蓋石は、整形された長方形の石を用いている。

#### 長側石

長側石は、両側とも4枚の石から構成される。右長側石には長方形の石を横位に設置し、その他の石は、縦位に据えている。左側石は4枚とも縦位に据え、重ね合わせている。特に石棺中央付近で、複数の石が重ねられていた。長側石には固定する石が置かれていたが、石棺を据える溝内には、裏込めとして板石などが認められた。長側石の重量は左側石35kg、右側石38kg、奥壁側の長側石は上部が欠



第30図 2号棺展開図

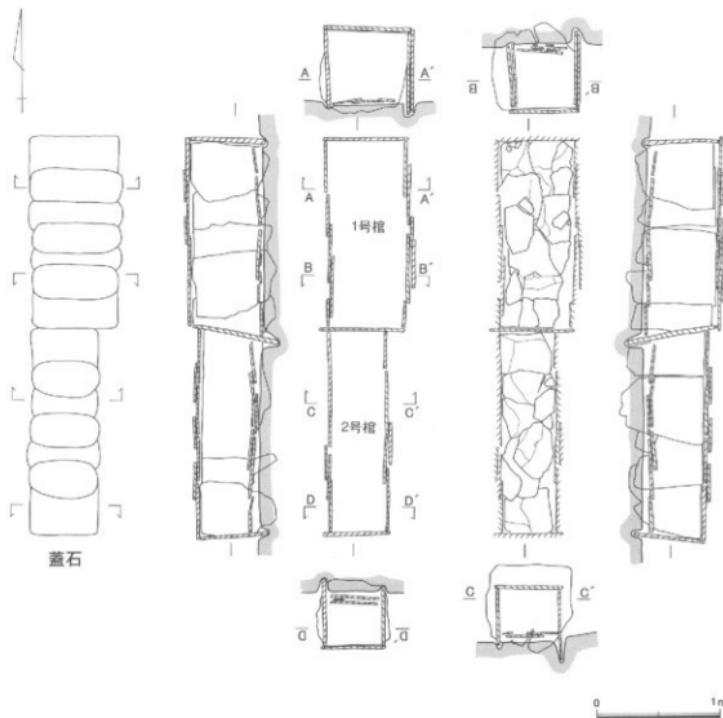
損しているが、ほぼ同程度の重量である。この長側石を挟み込むように短側石は設置されている。1号棺と比べると石棺掘り方下に深く長側石を据えて設置している。

#### 床 石

床石は10~11枚の板石を用いている。1号棺と同様、薄い石材を用いており、総重量は41.25kgであった。床石の設置には、石棺幅にはほぼ相当する1枚の石が両短側石寄りで認められ、中央で複数の石が重ね合わせていた。床石の構築順序は両短側から板石をひき、中央部で複数の石を組み合させていると考えられる。左侧石寄りには、若干の空白域が残るが、詰め石等は認められない。床石の下部には石棺石材と同じ安山岩の小破片が認められ、石室内において石棺の製作が行われていたことが伺える。

#### 2号石棺内遺物出土状況（第32図）

2号棺からは耳環2点、管玉1点、丸玉6点などの装身具類が出土している。これらの遺物は、石棺の南半部分に分布しており、耳環は開口部寄りの中央部の床石上面で認められ、すぐ北側で管玉と丸玉が出土している。

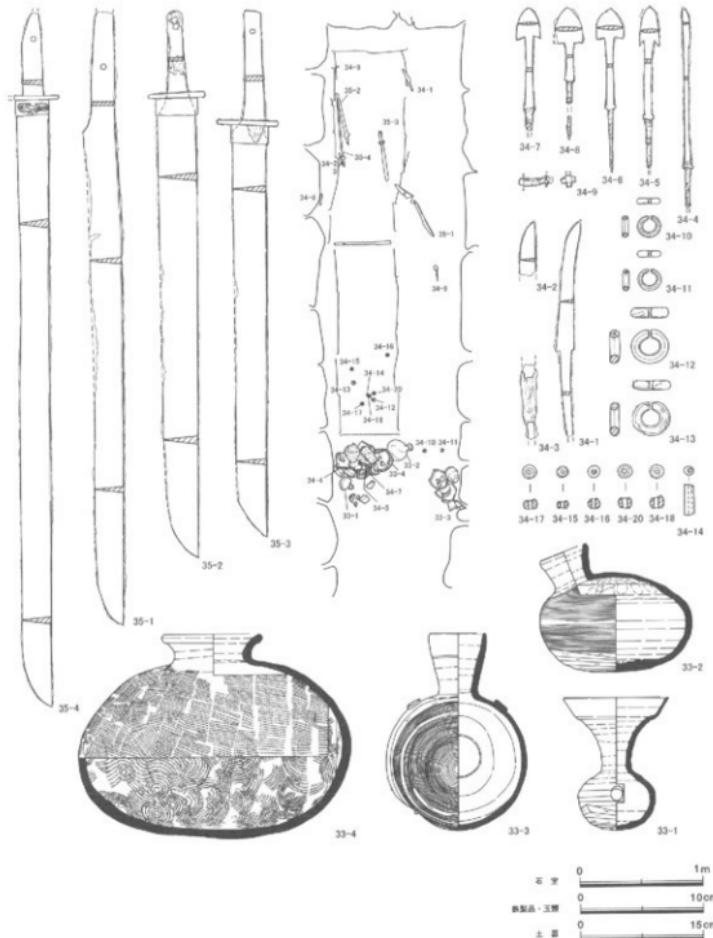


第31図 1・2号棺 復原模式図

## 組合式箱形石棺の復原（第31図）

今回、この2基の組合式箱形石棺の構築石材をすべて取り上げ、接合・復原作業を試みた。検出された状況は、蓋石が崩落した状態で、かつ長側石は内側に倒れかけた様子であったため、実測図をもとに組合式箱形石棺の復原模式図として提示する。なお、すべての石材が残存しているわけではなく、蓋石や側石の数については、接合された石材をもとに大きさ等から推定した。

1号棺の蓋石は、およそ7枚の大型の石材を用いている。特に両短側部分にかかる蓋石は、長方形形状の石を意図的に用いており、箱形を意識している。その他の石は、不整形な細長い石を用いている。蓋



第32図 3号墳 遺物出土状況図

石の崩落状況から両短側の蓋石をのせ、順次中央部に向けて、重ね合わせて設置していたと推測される。板状節理する石材の性格のため、長側石の正確な枚数について不明であるが、およそ5枚ないし6枚ほどの石材から構築されたと考えられる。石棺内法は長さ1.52m幅0.62m高さ0.56mと復原した。

長側石の継ぎ方は長方形の板石を縦位に設置し、重ね合わせていることを特徴とする。特に、蓋石との接合部にあたる端部は整形した痕跡が観察され、面を揃えている。側辺部にも加工が施されている石材も見受けられる。一方、石棺掘り方に据えた下部には、その痕跡はみられず、不整形である。この端部整形時における小破片は、石棺内の床石下からは検出されず、石室床石下から多数出土しているため、石室構築時にこの作業が行われていたと考えられる。両短側石は1枚から構成され、正方形状を呈し、組合式箱形石棺を構成する石材のなかで最大規模を有するものである。長側石と同様に上部の端部は整形され、下部は不整形である。北側の短側石の固定には、根固石が配されていた。

短側石と長側石の組み合わせ方は、短側石が長側石を挟むように設置している。床石は薄い板状節理の石材を用いており、やや青みを帯びた色調で他の長側、短側、蓋石とは、やや異なる印象を受ける。大小の不整形な長方形状の板材を多用し、組み合わせ方は一定しないが、コーナー部分や辺のあたりは石棺幅に合わせるように設置している。床面には、南側の短側石と長側石とのコーナー部分にかけて空白域が若干残る。

2号棺の蓋石は1号棺同様、7枚の石材を用い、両短側には方形状の石を設置している。長側は右側で4枚、左側で5枚の石材から構成される。石棺内法は長さ1.66m幅0.44m高さ0.43mである。特に、右側は細長い石を横位に用いていることや、端部に研磨した痕跡が認められる。一方、左側石は長方形状の板を縦位に用い、端部には粗い整形痕が残るだけである。この長方形状の石材は、他の縦位に用いる石材より浅く据えられている。2号棺の短側石は、北側で1号棺の短側石を共用しているため、南側部分のみであった。この短側石は正方形状で、側辺には整形痕が残る。長側石と短側石の組み合わせ方は、1号棺と同じく短側石が長側石を挟むように設置している。床石は1号棺と比べるとやや大きい石材を用い、両側から長方形状の石を据え、中央部に向けて重ね合わせている。また、玉類や耳環はこの石材が多く重ね合わされた部分から出土している。

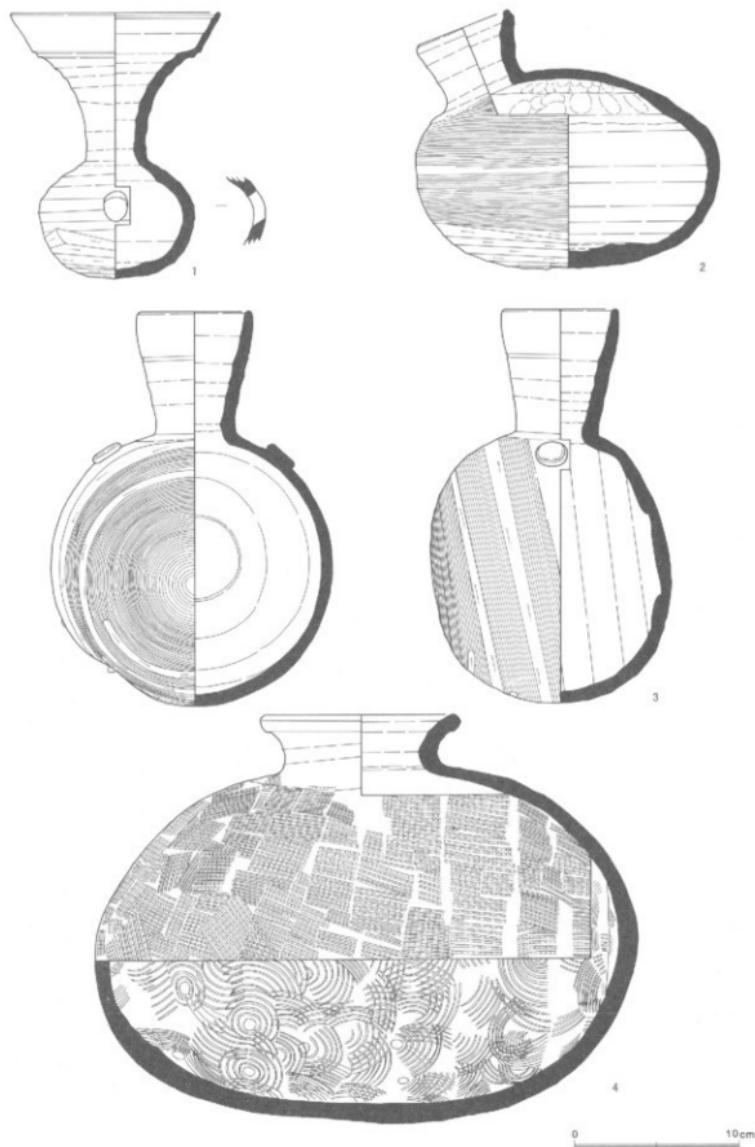
このように2基の組合式箱形石棺の想定復原を試みた結果、1号棺と2号棺の石棺規模の差異が看取される。1号棺と2号棺の時期差は明確ではないが、2号棺の短側石が1号棺の短側石を共用していることから、最初に1号棺から構築されたと考えられる。同時葬あるいは追葬段階で2号棺が構築されたとしても、構築・設置方法などの差異は明瞭ではなかった。むしろ、その設置方法には次のような共通点が見出すことができる。

それは短側石と長側石の組み合わせ方や、1号棺や2号棺の片方の長側石にみられるように長側石の継ぎ方には、長方形状の板石を主に縦位に用いていることである。これは、夏墓木古墳群で検出されている組合式箱形石棺の長側石の継ぎ方と類似する。しかし、2号棺のように一部の長側石には横位に設置している例もあり、長側石の継ぎ方に、厳格な規範はなかったと思われる。

愛鷹山麓、箱根山麓でみられる多くの組合式箱形石棺は板状節理する安山岩を用い、荒く加工された石材を組合み合わせ、床下に据えつけただけの単純な構造である。こうした単純な構造から小口構造や長側石の継ぎ方などから細かな時間的前後関係を追うことは困難であると考えられる。

#### 石室内遺物出土状況（第32図）

石室内からは鐵鏪3点、刀子2点、耳環2点、須恵器醜、横瓶、平瓶、提瓶が出土した。特に開口部には須恵器類が認められた。2号棺の短側石の前には横瓶、醜、平瓶が配置され、左側壁の開口部立柱石付近には提瓶が出土した。須恵器は完形またはそれに近い状態であり、この下には床石が認められないことから本来の埋納状態より大きく移動していないと考えられる。須恵器の坏蓋は全く認められず、



第33図 3号墳 遺物実測図(1)

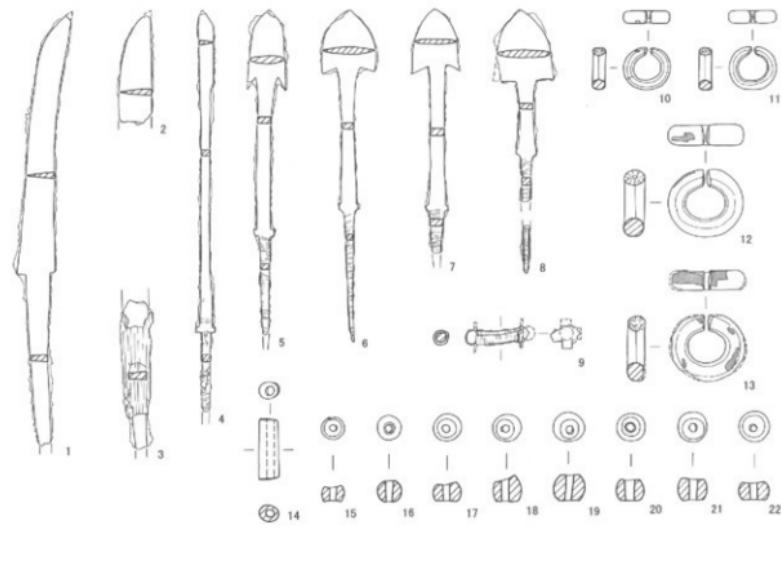
瓶類のみのセット関係が考えられ、奥壁側からも土器の出土が認められないことから、2号棺と閉塞石の間の空間が副葬する空間と考えられる。さらに、この土器の出土レベルより0.05m上で尖根式鐵が出土している。2号棺に隣接する床石には河原石が1個設置されていた。この上面から耳環が2点並んで出土していることから、枕石と考えられる。これらの遺物はほぼ同レベルから出土していることから追葬期によるものと考えられる。奥壁側で直刀1点、1号石棺寄りから刀子が出土していることから、この位置にも埋葬されていた可能性がある。つまり、すくなくとも石棺内に2体、石棺外に2体が埋葬されていたと推測される。また、1号棺と右側壁の狭い隙間から平根式三角形鐵が1点出土しており、鐵身を奥壁側に向かって意図的に置かれていたと考えられる。

#### 出土遺物（第33図～第35図 図版20～23）

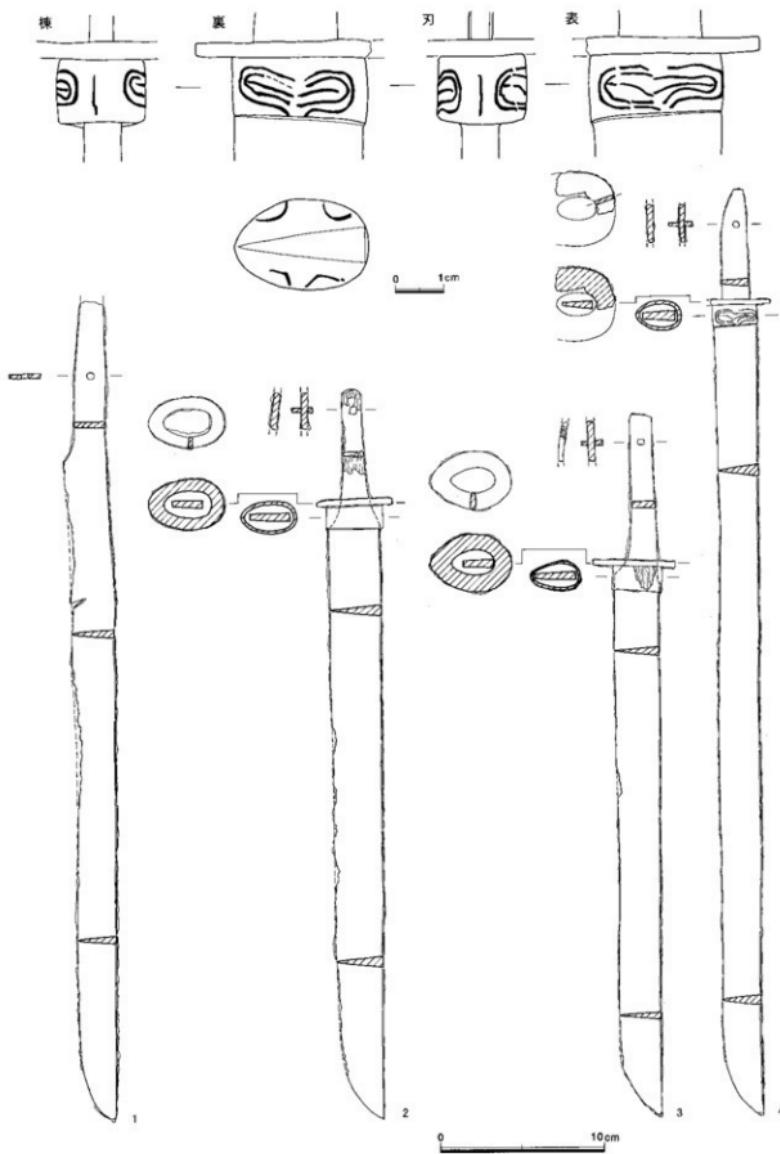
33図-1は壺である。口径12.55cm器高16.25cmである。体部径より口径が上回り、細長い頸部をもつ。口縁部下端には1条の沈線が巡る。頸部や体部には沈線、列点文は認められない。底部外面には回転ヘラケズリが認められる。焼成は良好で灰色を呈する。胎土には2.5mm以下の白色粒子を含むことを特徴とする。6世紀末葉～7世紀初頭に比定される。

33図-2は平瓶である。最大径は肩部にあたり、明瞭な稜は持たない。口径5.5cmで短い頸部をもつ。体部と口頸部をナデ調整により接合した痕跡が何える。体部下半には回転ヘラケズリが認められ、その上部にはカキメが頗著に残る。体部上面の内部には粘土円板により塞いだ痕跡が残り、指頭痕が観察される。この部分はやや器壁が薄い。焼成は良好で、青灰色を呈する。胎土には1と同様2.5mm以下の白色粒子を含む。6世紀末葉～7世紀初頭に比定される。

33図-3は提瓶で、口縁部はわずかに内湾する。口径6.75cm器高24.1cmである。頸部には1条の沈線



第34図 3号墳 遺物実測図(2)



第35図 3号墳 遺物実測図(3)

が遡り、肩部には円形浮文が貼付される。口頸部は細長い印象を受ける。体部は球胴状で、フラスコ形瓶に近い形状である。体部外面にはカキメが施される。体部下半には焼台として転用した坏類が付着しており、自然釉の降灰状況から斜位に置かれていたことが伺える。色調は灰白色を呈し、胎土はやや砂質気味で、1・2と比較してやや異なる印象を受ける。6世紀末葉～7世紀初頭に比定される。

33図一4は横瓶で俵形をなす。口径11.5cm器高24.9cm最大径32.85cmである。外面は平行タタキ、内面は青海波状のタタキが認められる。両端とも丸みをもつが、片側はやや尖り気味で、内部には粘土板で蓋をした痕跡が残る。この部分の器壁は、やや厚い。口頸部は短く「く」字に大きく外反する。端部は肥厚し、縁帯状をなす。色調は灰色で、胎土には3mm以下の白色粒子を含む。6世紀末葉～7世紀初頭に比定される。

刀子は3点出土している。34図一1は残存長17.5cm刃部10.5cm元幅1.7cm茎部7.0cmである。闇は両側面に直に作り出される両闇である。棟は反り気味で、刃部は緩やかに外反しながら切先に至る。目釘穴は認められない。

34図一2・3は同一個体である。2は残存長4.5cmで、3は残存長6.0cmである。棟は直線的であり、切先は丸みを帯びる。茎には柄の木質が残る。

34図一4は尖根式片刃箭鏃で、鎌身部3.1cm頭部9.5cm茎部3.1cmである。鎌身闇は撫闇で、茎闇は棘闇である。

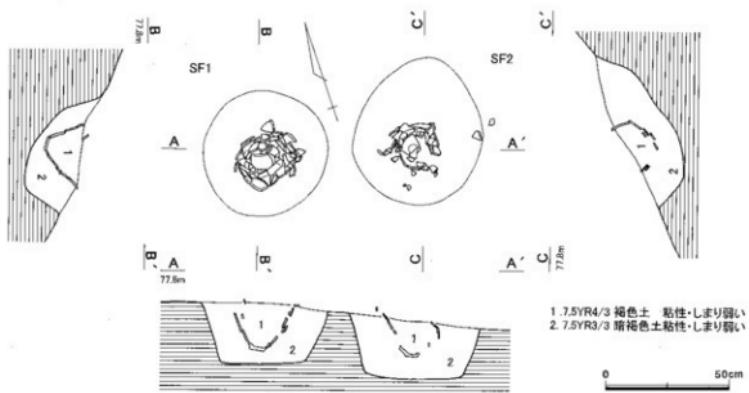
34図一5は尖根式腸抉三角形鎌で、4とともに開口部から出土している。鎌身部3.3cm頭部6.5cm茎部4.0cmである。逆刺は深く切先から鎌身闇にかけて直線的に垂下する。茎闇は棘闇である。これらは耳環2点とほぼ同レベルの位置から出土していることから追葬時に伴う副葬品と考えられる。

34図一6は尖根式腸抉三角形鎌で、ふくらがやや張る形態である。鎌身2.4cm頭部6.0cm茎部5.4cmである。茎闇は棘闇である。

34図一7は尖根式腸抉三角形鎌で切先から鎌身闇にかけて曲線的に若干くびれる。茎闇は棘闇である。鎌身2.6cm頭部6.0cm茎部1.2cmである。

34図一8は平根式三角形鎌で、ややふくらが張る形態である。右側壁と1号石棺の間隙から出土した。鎌身2.9cm頭部3.0cm茎部4.8cmである。茎闇は台形闇である。

34図一9は弓金具で1号石棺内から1点出土している。片側部分の頭部のみが残存していたが、全長



第36図 SF1・2 実測図



第37図 SF1・2 遺物実測図

2.5cmである。両端に頭部をもつ鉄棒に筒形が覆っている状態で、筒形の接合部分も観察される。筒形には切り込みを入れて折り返し、弓本体と固定する構造となっている。花弁は4枚と推定される。筒形部分は2.0cmで、この部分に木質が残存していることから、およそその弓の太さが推定できる。1点のみの出土であるため、弓の長さを正確に復元できないが、少なくとも1号棺に納まる1.5m以内の大きさと推定される。

耳環は2対4点出土している。34図-10・11は石室内より出土している。10・11の遺存状態は良好で、金色を呈する。細めの銅芯に金属箔を巻きつけたもので、小口面に箔を折り曲げた痕跡が残る。34図-12・13は2号石棺内より出土し、銅の錫化が著しく、金属箔の遺存状態は良好ではないが、太めの銅芯に金属箔を巻きつけている。10・11と同様に小口面に折り曲げた痕跡が残る。色調は銀色を呈する。

玉類すべては2号棺より出土している。丸玉8点、管玉1点である。34図-14の管玉は長さ2.5cm幅0.8cmである。孔径は0.3cmで緑色を呈し、表面は滑らかである。34図-15～22の丸玉はいずれも蛇紋岩製であり、青灰色、灰白色を呈している。径0.9～1.25cmである。

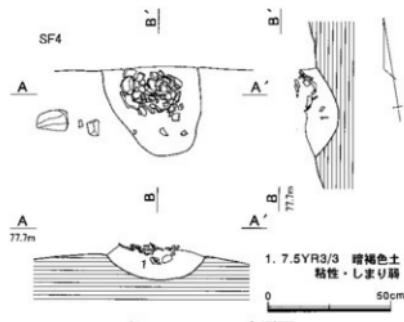
35図-1は石室から出土している。刀身長40.1cm茎部9.8cmである。切先はわずかに丸みを帯びる。片闊で、やや曲線をなして切れ込む撫角である。茎は茎元から茎尻にかけてわずかに先細くなる。茎尻は、曲線なす栗尻である。茎尻から4.4cmの位置で径4mmの目釘穴が認められる。

35図-3は刃部33.0cm茎部9.9cmを測る。元幅は2.7cmでやや幅広的印象を受ける。切先は、わずかに丸みを帯びる。片闊で、曲線をなす栗尻である。茎胴部は茎尻に向かってやや先細くなり、一文字尻をなす。茎尻から1.5cmの位置で目釘穴がみられ、長さ1.4cmの鉄製目釘が遺存する。鍔は倒卵形の喰出鍔で、長径5cm短径3.6cmを測る。鍔部分には木質が遺存する。

35図-2は刃部36.0cm茎部8.6cmの小刀である。刀身は断面形が二等辺三角形に近く、刃幅の比較的厚い重厚な造りである。切先はふくらである。闊は不均等な両闊で撫角である。茎は茎元から茎尻にかけて先細くなり、茎尻は栗尻である。茎尻から1.1cmの位置で方形の目釘穴が認められ、長さ1.3cmの鉄製目釘が遺存する。鍔は倒卵形の喰出鍔で、長径4.6cm短径3.1cmである。また、闊の部分には梢円形の鉄製筒形鍔が遺存する。

35図-4は全長56.6cm刃部48.2cm茎部8.4cmの小刀で、1号石棺内から出土した。1号石棺内から出土した3振りの直刀のうち一番長い。元幅2.6cm先幅2.2cmで、刀身は、断面形が二等辺三角形に近い平棟平造りである。切先はふくらである。闊は片闊で、撫角である。茎胴部は先細り、茎尻はやや丸みを帯びる。目釘穴は茎尻から1.9cmの位置で1箇所認められ、長さ1.5cmの目釘が遺存する。鍔は喰出鍔で、倒

卵に近い形状であろう。窓はなく、象嵌も認められない。闊に接して長さ2.7cm幅1.4cmの鉄製筒形鍔がある。この外面にハート形文が施された銀象嵌が、X線撮影により確認された。表裏には左右の曲線による2重のハート形を施し、内部にも左右に1本ずつ曲線を配置している。また、棟及び刃方には1本ずつ短線を配置し、区画している。さらに、ハート形の先端部にあたる鍔の側面にも曲線が認められる。柄頭金具や鞘尻金具等は出土しておらず、銀象嵌が認められたのは鍔のみであった。



第38図 SF4 実測図

## 火葬墓の概要

火葬墓は2区と3区で4基検出されている。中でもSF3は土坑内に木炭を詰め、土師器長胴窯を正位に据えている。肉眼では人骨等は検出できなかったため、この窯内の土壤を対象にリン・炭素分析を行ったが、遺体痕跡を示すまでには至らなかった（付編 参照）。しかし、全国各地で検出されている火葬墓をみると墓壙内に木炭を充填する例は比較的多く認められることから、この遺構も火葬墓としての性格を持っていたと思われる。また、2区で検出されているSF1・2に関してはも墓壙内に木炭等は認められず、人骨等も確認されない。火葬墓ではなく、土坑墓としての性格も否定できないが、SF3と同様の土師器長胴窯を使用し、ほぼ同時期であることから火葬墓の可能性が強いと思われる。

### 2. SF1（第36図 圖版14）

SF1は3号墳が位置する場所から南東へ10mの位置にあたり、標高77mの緩やかな斜面で検出された。隣接してSF2が位置している。表土下0.2mで検出された。包含層は頂部では薄く、遺物も少量認められるにすぎない。この周辺の緩やかな斜面からは、比較的多くの土器片が認められることからこの周辺には類似した遺構の存在が想定される。土壤の平面は梢円形であり、長径0.54m短径0.5m深さ0.25mである。その中央部には土師器長胴窯が正位の状態で据えられていた。口縁部はあまり遺存していないが、頸部以下は良好であった。この窯内には粘性の弱い暗褐色土が堆積しており、炭化物、人骨等は検出されなかった。墓壙内の土も暗褐色土で、比較的粘性は強いものの色調はほとんど窯内と同じであった。炭化物や石等は認められなかった。

#### 出土土器（第37図 圖版25）

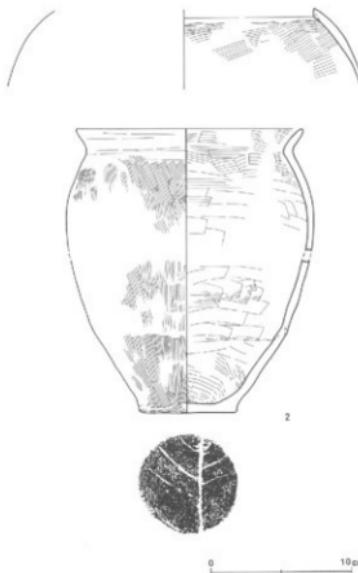
37図-1は長胴窯で復原すると口径25.4cm底径6.6cm器高（35.1cm）である。底部には木葉痕が残り、器壁は薄い。窯部最大径は中位から上位にかけてあり、口径より小さい。外面は磨耗しているため調整は不明瞭であるが、下位には縦位のハケが認められる。内面は接合痕が明瞭に観察でき、横位の細かいハケが施される。口縁部は垂直に立ち上がり、外方にのびる。外面の色調は明赤褐色を呈する。8世紀後半に位置付けられる。

### 3. SF2（第36図 圖版14）

SF2は隣接してSF1が位置し、並列して分布している。土壤の平面は梢円形であり、長径0.6m短径0.54m深さ0.25mである。その中央部には土師器長胴窯が正位の状態で据えられていた。SF1と同様、口縁部はあまり遺存していないが、頸部以下は良好であった。墓壙内、窯内からは炭化物、人骨等は認められなかつた。

#### 出土土器（第37図 圖版26）

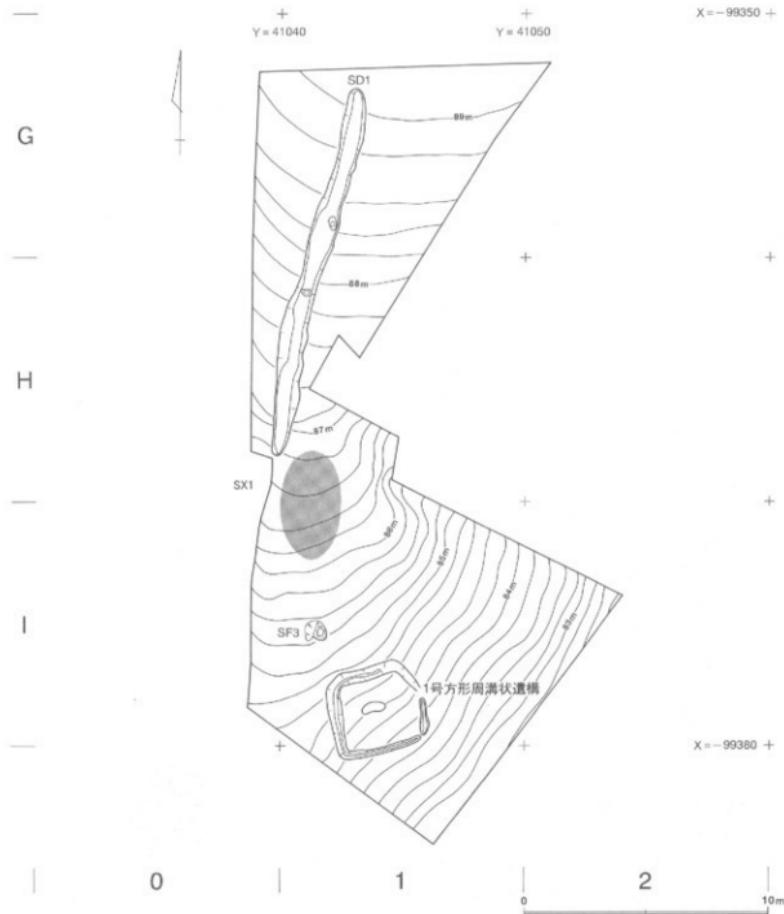
SF2からは口縁部から窯部上位部分を除いた長胴窯が出土した。底部は木葉痕が残り、器壁は薄い。外面は縦位のハケが施され、内面は横位の細かいハケがみられる。色調は褐色を呈する。SF1と同様8世紀後半と考えられる。



第39図 SF4 遺物実測図

#### 4. SF4 (第38図)

SF4は3号墳の南側に位置する。この部分は削平を受けており平坦となっている。本来は緩やかな斜面を形成していたと考えられる。長径(0.39m)短径0.38m深さ0.13mである。遺存状況は良好ではないが、土壤内に2個体の土器が認められた。土壤底部には壺の底部が正位の状態で据えられており、その上部には長胴壺と思われる破片が潰れた状態で出土している。これらの土器を復原すると小型の壺を正位に据え、上に長胴壺をかぶせた状態となり、合口であった可能性がある。また、この長胴壺は頭部から胴部にかけての破片のみであり、口縁部は意図的に外されていた可能性もある。



第40図 3区 全体図

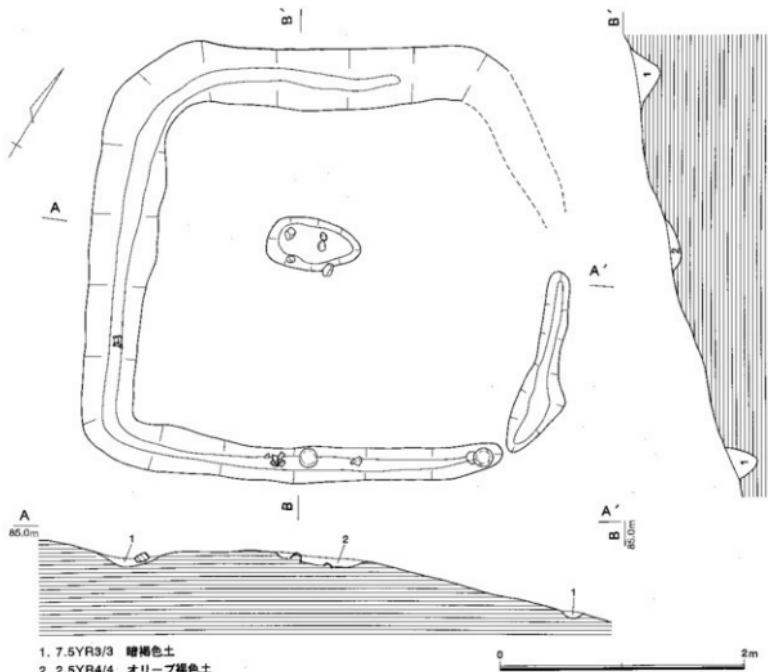
## 出土器（第39図 図版26）

SF4からは2個体出土している。39図-1は長胴壺の胴部上位のみが復原できた。口縁部から頸部にかけて、意図的に破砕された可能性がある。外面は磨耗のため調整は不明で、内面は横位のハケが施される。色調は明褐色を呈する。

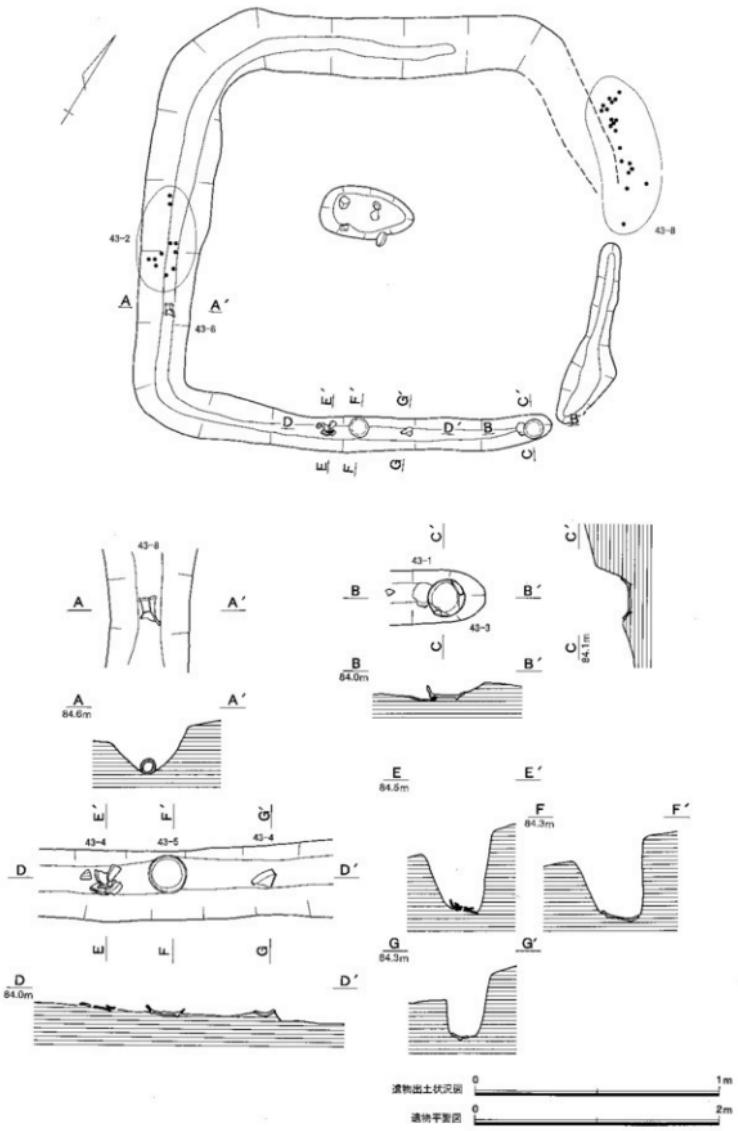
39図-2は小型の壺である。口径16.3cm底径7.0cm器高20.4cmである。底部は木葉痕がみられる。胴部最大径は上位にあたり、やや肩が張る。口縁部は短く、外方へのびる。外面は縦位、斜位のハケが施される。内面は口縁部から胴部上位にかけて横位のハケ、中位はナデがみられる。色調は明赤褐色を呈する。三島市箱根田遺跡から同様の小型壺が出土しており、8世紀後半以降に位置付けられる。

## その他の遺構（第21図）

3号墳より南東方向の東側縁辺部でSD1が検出された。長さ4.4m最大幅0.4mで弧状を呈する。覆土より土師器、須恵器の細片が出土している。時期は古墳時代後期～奈良時代に推定される。遺構検出は基盤層で、周辺には横穴式石室を構築する石材や墓壙の痕跡は全くみられなかったため、性格については不明である。



第41図 1号方形周溝状遺構 実測図



第42図 1号方形周溝状遺構 遺物分布図

### 第3節 3区

#### 3区の概要

3区は1・2号墳と同一丘陵で田方平野に延びる丘陵先端部の南斜面にある。遺構は方形周溝状遺構や火葬墓、集石遺構、溝状遺構が検出された。1区及び2区の間で確認調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。微地形をみると1・2号墳は、やや谷状に窪んだ緩やかな斜面に対し、3区は比較的急斜面に方形周溝状遺構が立地していることから、同一丘陵内においても空白域をもちながら、古墳及び古代の墓域が認められる。

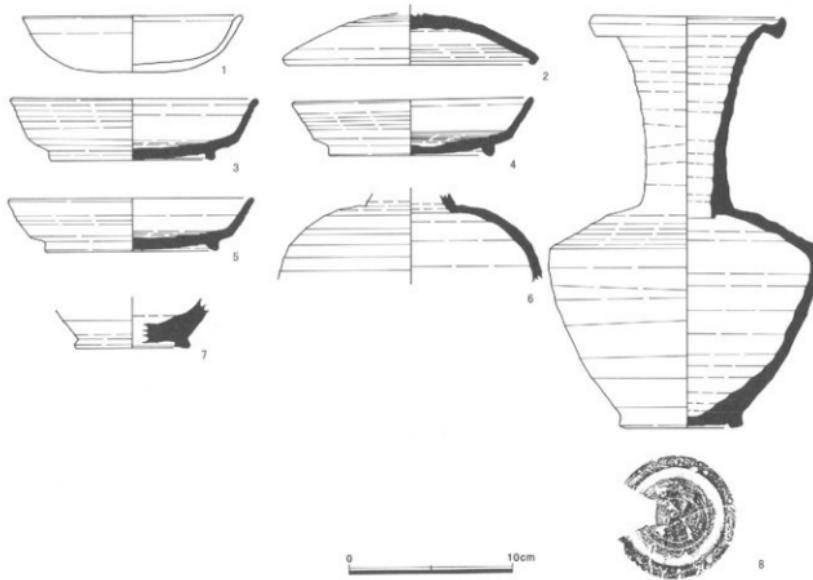
SF3はそのすぐ北側の尾根の頂部に近い位置で検出された。梢円形の土壌内に長さ1cmほどの木炭が充填されており、中央部には土師器長脣甕が正位の状態で埋設されていた。

尾根の頂部で集石遺構が検出されており、土師器の細片等が認められた。この遺構は火葬墓や方形周溝状遺構と密接に関わる儀礼等の可能性が想定されたが、礫に焼けた痕跡や炭化物などの痕跡は認められず、下部にも土坑等の遺構が確認されなかったため、この遺構の性格については不明である。また、尾根筋に沿って直線的に溝状遺構が検出されていたが、溝の底部から近現代の瓦片が1点認められた。よって、この遺構は火葬墓あるいは古墳とは関連がないことが確認された。

#### 1 1号方形周溝状遺構（第41図～第42図 図版15・16）

##### 墳丘

1号方形周溝状遺構は1・2号墳が立地する丘陵の先端部の南斜面に位置する。標高84～85mに占地し、北側にはSF3が存在する。墳丘はほとんど流失しており、表土下0.2mで遺構を検出した。墳形は方



第43図 1号方形周溝状遺構 遺物実測図

墳状をなし、周溝はコ字状に検出された。周溝は幅0.3~0.6mで、深さは最大で0.25mである。東側は周溝が消失しているが、須恵器長頸壺が出土しており、本来は全周していたと考えられる。規模は東西3.98m南北3.55mである。

中央部に浅い土坑状の窪みがみられ、この部分が埋葬施設と考えられる。長径0.8m短径0.44m深さ0.08mである。今回の遺構検出面は、基盤層上面での検出であるため、埋葬施設が確認されにくかったが、本来は墳丘内に設置されていたと推測される。この中からは土器、火葬骨などは検出されていない。このように周囲には、石室を構築する石材がみられないことや火葬骨や埋葬施設に骨蔵器と思われる容器が出土していないことから木棺直葬の可能性が考えられる。

周溝内には暗褐色土が堆積し、須恵器、土師器が出土している。特に南側の周溝の底部から土師器壺、須恵器高台壺が重ね合わせて出土し、その西側には0.2~0.3m間隔で須恵器高台壺が2点認められた。また、西辺の周溝内からは長頸壺の頸部片が出土し、東側から出土している須恵器底部片と接合した。また北辺上層からも須恵器摘み蓋の破片が出土している。これらの土器から8世紀中葉の遺構と推定される。  
出土遺物（第43図 図版25）

43図-1は土師器の壺である。43-3の須恵器高台壺とともに溝内から出土している。口径13.2cm、器高3.4cmである。底部はやや扁平な半球状を呈する。口縁部はやや外反し、端部は肥厚する。外面は磨耗しており、調整不明。色調は橙色である。

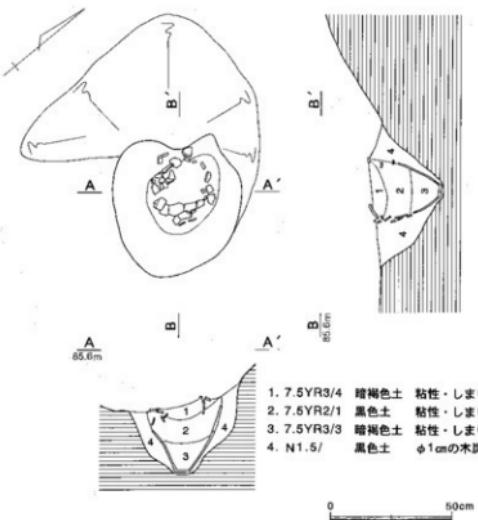
43図-2は須恵器の摘み蓋である。口径(14.85cm)器高3.15cmである。天井部は内湾し、つまみ部は欠損している。天井部は回転ヘラケズリがみられる。口縁端部は内側に短く屈曲し、丸く仕上げている。軟質であり、色調は灰色を呈する。8世紀中葉に比定される。

43図-3~5は須恵器高台壺である。3は口径14.8cm器高3.83cm高台径9.8cmである。平底の底部からゆるやかに屈曲し、外方へのびる。口縁部はややナデ調整により外反する。体部中位にはノタメが残る。

底部は回転ヘラケズリが認められ、断面方形の高台がつく。色調は灰白色を呈し、胎土には径3mm程度の白色粒子が顕著に認められる。

43図-4は口径14.5cm器高3.5cm高台径9.85cmである。平底の底部からやや強く屈曲し、外方へのびる。体部中位にはノタメが残る。底部は回転ヘラケズリが残り、断面は丸みを帯びた方形の高台がつく。色調は灰白色を呈し、胎土には4mm以下の白色粒子が認められる。

43図-5は口径14.75cm器高3.2cm高台径10.25cmである。平底の底部からやや強く屈曲し、外方へのびる。



第44図 SF3 実測図

底部は回転ヘラケズリが残る。断面はやや丸みを帯びた低い方形状の高台がつく。体部中位にはノタメが残る。色調は灰白色を呈し、胎土には径2mm以下の白色粒子が認められる。このように3~5は形態、技法、色調、胎土などが近似しており、8世紀中葉に位置付けられる。

43図-6は須恵器長頸壺の胴部片である。肩部の肩は緩やかに張り、屈曲しない。外面は回転ヘラケズリが認められ、自然釉が付着する。

43図-7は須恵器長頸壺の底部片である。底部は、回転ヘラケズリが施され、断面方形の高台がつく。色調は灰色を呈する。

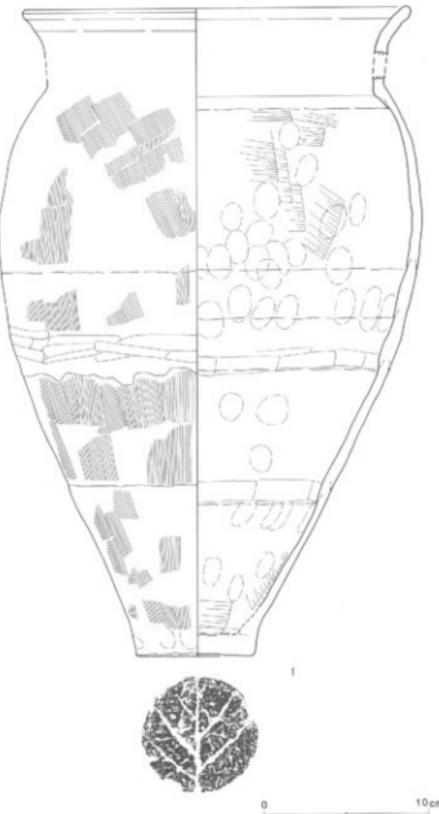
43図-8は須恵器長頸壺である。頸部は周溝内で検出され、胴部片は周溝東側から出土し、ほぼ完形に復原できた。口径11.5cm器高25.5cm高台径6.15cm胴部最大径16.35cmである。底部から体部下位には回転ヘラケズリが施される。高台の断面は低い方形で、やや外方へ広がる。肩部の屈曲は明瞭である。頸部は細長くラッパ状に開く。口部高は11.5cmを測る。端部は上下に肥厚し、強いナデにより、受け口状を呈する。頸部が細長く、肩部の稜が明瞭であること、他の高台壺との出土状況から8世紀中葉に位置付けておきたい。

## 2. SF3 (第44図 圓版17)

SF3は3区の方形周溝状遺構の北側に位置する。表土下0.2mでこの遺構を検出し、尾根の後線上に占地していた。北側は根による搅乱のため判然としないが、土坑の平面は梢円形を呈する。長径0.63m短径0.53m深さ0.3mである。中央部には土師器長胴甕を正位に据えているが、口縁部の遺存状況は良好ではない。墓壙内には長さ1cm程度の木炭が混じっており、黒褐色土である。甕内は色調と粘性から3層に分離される。いずれの層からも骨は確認されなかった。

## 出土土器 (第45図 圓版26)

SF3からは骨蔵器として土師器の長胴甕が出土している。出土状態は口縁部が欠損していたが、ほぼ完形に復原できた。口径23.7cm器高39.7cm底径6.3cmを測る。底部には木葉痕が残る。胴部最大径は中位にあり、長胴状を呈する。外面は磨耗しており、2次焼成を受けている可能性があるが、縦位、斜位のハケが施される。煤などは認められない。器壁は薄く、接合痕は胴部下位、中位、口縁部に認められる。胴部中位には強い横ナデが認められる。内面も同様で接合痕周辺には横位のナデが残る。また、上位と下部には荒



第45図 SF3 遺物実測図

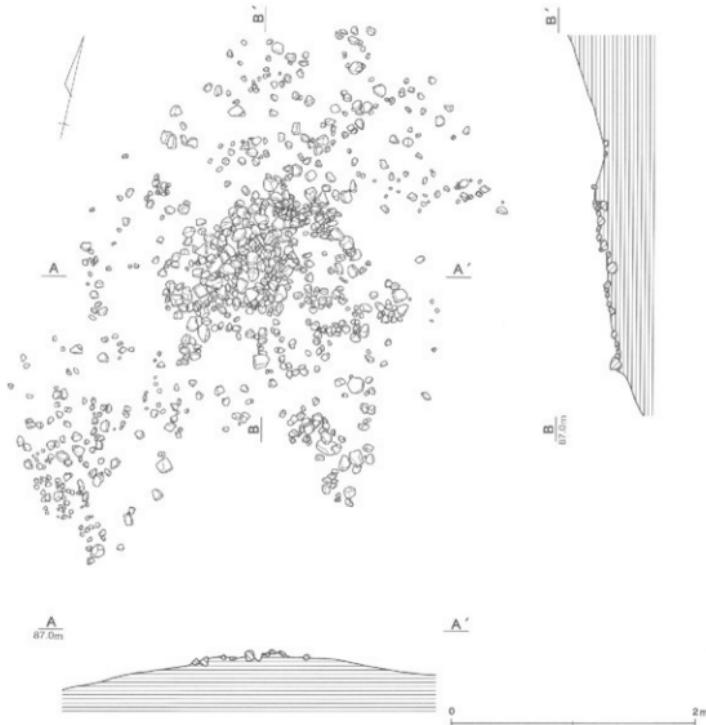
いハケがみられる。口縁部はやや垂直に立ち上がり、やや外方にのびる。色調は赤褐色を呈する。8世紀後半に位置付けられる。

### 3. SX1 (第46図 図版18)

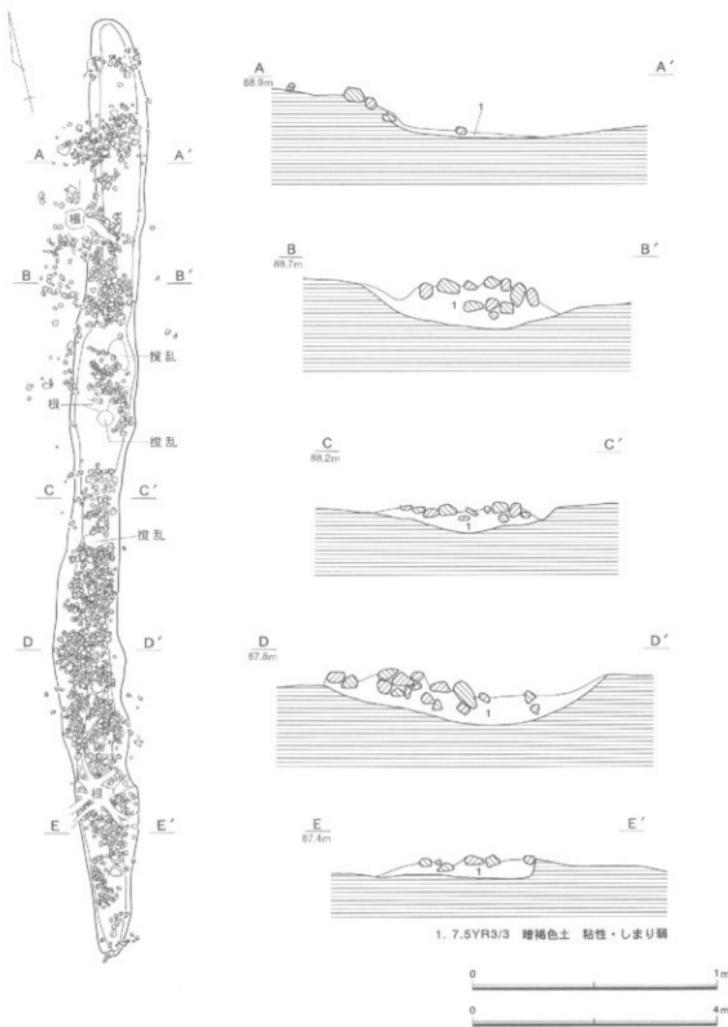
SX1はSF3より北東に位置する。表土下0.2mで検出し、集石の範囲は東西3m南北4mにわたる。遺物は集石の上面から土師器、須恵器が少量認められる。当初はSF3が検出されていることから火葬に伴う遺構と想定し、下部の状況を把握するため十字にトレンチを設定したが、掘りこみ等はみられなかった。また、拳大の石には2次的に焼成を受けた様子や炭化物等は認められなかった。しかし、集石下からも土師器の細片が出土しており、遺構の位置関係から8世紀代のものであると考えられる。遺構の性格については不明である。

### 4. SD1 (第47図 図版18)

SD1は3区の北側の調査区に位置し、尾根の稜線上に直線状に延びる。表土下0.2mで検出し、溝内には多量の石がみられた。当初は墓道としての性格も考えられたが、溝の底部から近現代の瓦片が出土したため、新しい時期のものと判断した。規模は長さ15.4m最大幅1.2mである。この溝内に落ち込んだ石は拳大ほどで何箇所か集石のまとまりがみられたが、敷き詰めた状態ではなく廃棄された状態であった。



第46図 SX1 実測図



第47図 SD1 実測図

## 第4節 包含層出土遺物

### 1. 土 器 (第48図 図版26)

48図-1は手捏土器である。器壁は厚く、屈曲して外方に張り出す。色調はぶい橙色を呈する。

48図-2は土師器の坏で外面は横方向のミガキで、内面は斜方向のミガキが施される。色調は橙色を帯びる。

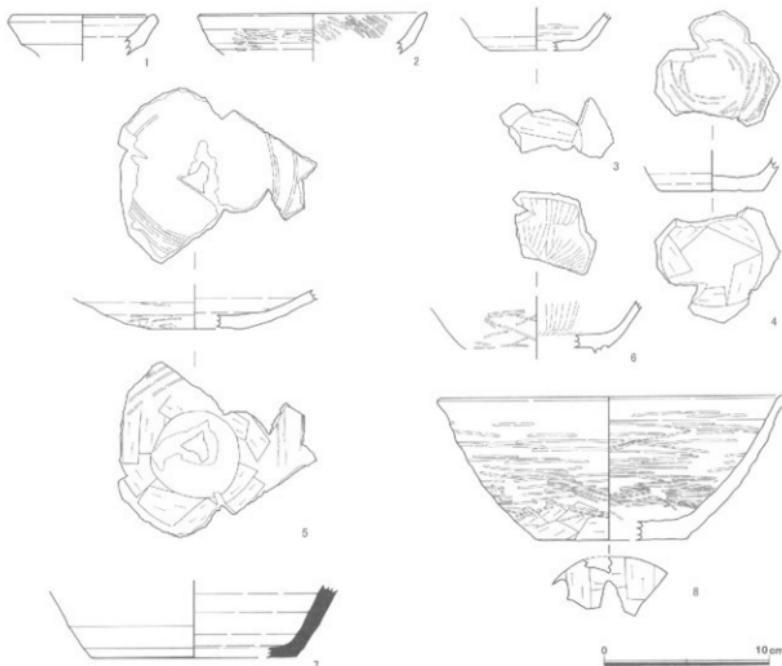
48図-3は駿東型の坏で外面に横方向のミガキが施される。底部外面はケズリがみられる。色調は赤褐色を呈する。

48図-4は駿東型の坏で、内面に横方向の荒いミガキが認められる。底部外面は糸切痕が中央部に残り、周縁部には手持ちヘラケズリが施される。

48図-5はやや低い立ち上がりをもつ駿東型の坏である。内外面に横方向のミガキが認められる。底部外面はケズリが施される。

48図-6は土師器高台坏の底部片である。外面は横あるいは斜方向の粗いミガキが施される。内面は縱方向のミガキ、見込み部分は放射状のミガキが認められる。高台は欠損しているが、貼り付けた痕跡が確認される。

48図-7は須恵器壺の底部片であろう。底部から外面にかけてケズリが認められる。



第48図 包含層土器実測図

48図-8は駿東型の大型の坏で、鉢の可能性もある。口径20.8cm底径9.0cm器高8.65cmを測る。口縁部は横ナデによりやや外反する。底部側の外面はケズリが認められ、その後に横方向のミガキが施される。内面は横方向のミガキが外面より密に施される。色調は赤褐色を呈し、白色粒子や赤褐色粒子を含む。

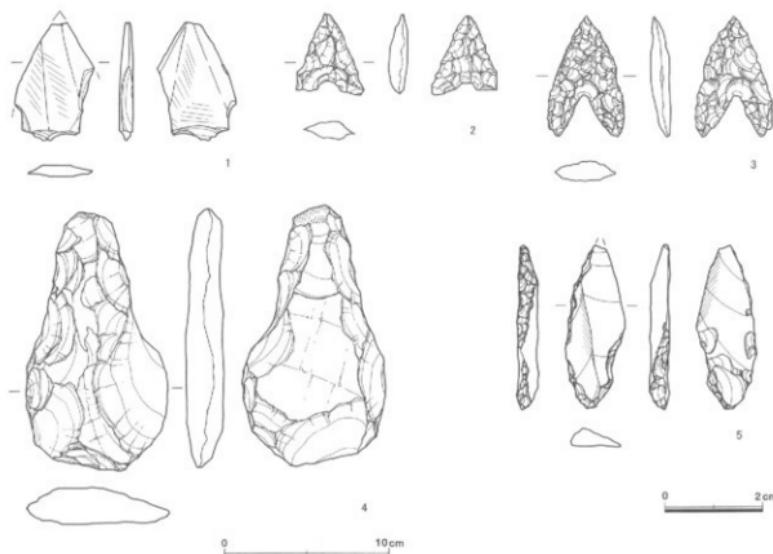
## 2. 石 器 (第49図 図版27)

49図-1は磨製石鎌である。残存長2.36cm最大幅1.66cm厚さ0.26cm重さ1.0gで、石材は粘板岩である。斜方向の線状痕がみられる。

49図-2・3は無茎石鎌である。2は長さ1.62cm幅1.36cm厚さ0.42cm重さ0.6gで、多孔質玄武岩製である。3は抉りが深い。中央部の孔は球頭が抜けたものである。長さ2.47cm幅1.57cm厚さ0.39cm重さ0.9gで黒曜石製である。

49図-4は打製石斧で、石材は凝灰質粘板岩である。自然面を持たない剥片を用い、撥形を呈する。刃部は尖刃で、基部には着装に伴う磨耗痕がみられる。全長7.96cm幅4.38cm厚さ1.2cm重さ44.9gを測る。

49図-5は二側縁加工のナイフ形石器で、基部調整が施されている。先端部は欠損しているが、残存長3.28cm横幅1.11cm厚さ0.43cm重さ1.4gである。黒曜石製。



第49図 包含層石器実測図

表4 土器計測表

押出 番号	調査区	遺構・層位	種別	器種	残存率 (%)	口径 底径 器高 (cm)	焼成	色 調	備 考	写真 図版
33-1	2区	3号墳	須恵器	壺	85	(12.55) — 16.25	良好	N6/0(灰白色)	体部径 9.5cm	図版21
33-2	2区	3号墳	須恵器	平瓶	100	5.5 — 15.8	良好	5B6/1(青灰色)	体部径 18.5cm	図版21
33-3	2区	3号墳	須恵器	提瓶	100	6.75 — 24.1	良好	内面:N7/0(灰白色) 外面:5Y7/1(灰白色)	頸部径 5.1cm 体部:長径 16.7cm 短径 14.55cm	図版21
33-4	2区	3号墳	須恵器	横瓶	100	11.5 — 24.9	良好	内面:5B4/1(暗青灰色) 外面:7.5Y4/1(灰白色)	体部:長径 32.85cm 短径 23.3cm	図版20
37-1	2区	SF1	土師器	甕	60	(25.4) 6.6 (35.1)	良好	7.5YR5/4(にぶい褐色) 5YR5/6(明赤褐色)	体部径(23.9cm) 木葉瓶	図版26
37-2	2区	SF2	土師器	甕	40	— 5.6	良好	7.5YR4/6(褐色)	木葉瓶	図版25
39-1	2区	SF4	土師器	小型甕	60	— —	良好 (中空)	7.5YR5/6(明褐色)	頸部径(18.6cm)	図版26
39-2	2区	SF4	土師器	甕	90	(16.3) 7.0 (20.4)	良好	5YR5/6(明赤褐色)	頸部径(14.9cm) 体部径(17.8cm) 木葉瓶	図版26
43-1	3区	1号方形周溝状遺構	土師器	壺	70	(13.2) — 3.4	良好	内面:10Y5/4(化粧)黒褐色 外面:7.5YK7/6(褐色)	—	図版25
43-2	3区	1号方形周溝状遺構	須恵器	蓋	90	(14.85) — 3.15	良好	7.5Y6/1(灰白色)	最大径(15.6cm)	図版25
43-3	3区	1号方形周溝状遺構	須恵器	壺	100	14.8 9.8 3.83	良好	N7/0(灰白色)	—	図版25
43-4	3区	1号方形周溝状遺構	須恵器	壺	90	14.5 9.85 3.5	良好	N7/0(灰白色)	—	図版25
43-5	3区	1号方形周溝状遺構	須恵器	壺	100	14.75 11.25 3.2	良好	N7/0(灰白色)	—	図版25
43-6	3区	1号方形周溝状遺構	須恵器	壺	25	— —	良好	7.5Y7/1(灰白色)	頸部径(5.4cm)	—
43-7	3区	1号方形周溝状遺構	須恵器	壺	10	6.75	良好	内面:5Y8/1(灰白色) 外面:N6/0(灰白色)	—	—
43-8	3区	1号方形周溝状遺構	須恵器	長颈壺	70	(11.5) (6.15) 25.5	良好	N8/0(灰白色)	頸部径 5.55cm 体部径(16.35cm)	図版25
45-1	3区	SF3	土師器	甕	80	(23.7) (6.3) (39.7)	良好	5YR4/6(赤褐色)	体部最大径(25.8cm) 木葉瓶	図版26
48-1	1区	包含層	土師器	手捏	20	(8.6) —	良好	7.5YR6/4(にぶい褐色)	—	—
48-2	1区	表採	土師器	壺	15	(13.65) —	良好	7.5YR6/6(橙色)	—	—
48-3	1区	包含層	土師器	壺	20	(5.45) —	良好	5YR4/6(赤褐色)	破壊壺	—
48-4	1区	包含層	土師器	壺	80	— —	良好	5YR4/6(赤褐色)	破壊壺	—
48-5	1区	表採	土師器	壺	30	(5.4) —	良好	5YR5/4(にぶい赤褐色)	破壊壺	—
48-6	1区	包含層	土師器	壺	20	(8.7) —	良好	5YR4/6(赤褐色)	—	—
48-7	1区	表採	須恵器	壺	15	(11.45) —	良好	5Y7/1(灰白色)	—	—
48-8	1区	包含層	土師器	鉢	75	20.8 9.0 8.65	良好	5YR4/8(赤褐色)	—	図版26

表5 鉄鎌・針・弓金具計測表

図版番号	古墳名	鎌身形状	長さ			備考	写真図版
			鎌身部	頭部	茎部		
16-1	1号墳	尖椎式片刃箭	(10.6)	—	—	—	図版19
16-2	1号墳	尖椎式片刃箭	(11.3)	—	2.4	—	図版19
16-3	1号墳	尖椎式片刃箭	3.0	11.0	(0.8)	—	図版19
16-4	1号墳	尖椎式片刃箭	3.7	(6.8)	—	—	図版19
16-5	1号墳	尖椎式片刃箭	3.1	10.1	(1.7)	—	図版19
16-6	1号墳	尖椎式片刃箭	3.2	10.4	(2.2)	—	図版19
16-7	1号墳	尖椎式片刃箭	(3.8)	10.3	(1.8)	—	図版19
16-8	1号墳	尖椎式片刃箭	3.5	(6.6)	—	—	図版19
16-9	1号墳	尖椎式片刃箭	3.3	11.2	(1.9)	—	図版19
16-10	1号墳	尖椎式片刃箭	3.0	(2.9)	—	—	図版19
16-11	1号墳	—	—	(8.1)	4.3	—	図版19
16-12	1号墳	—	—	(4.6)	(2.2)	—	図版19
16-13	1号墳	—	—	—	(2.3)	—	図版19
16-14	1号墳	—	—	—	(3.0)	—	図版19
16-15	1号墳	—	—	—	(3.1)	—	図版19
16-16	1号墳	—	—	—	(3.3)	—	図版19
16-21	1号墳	針	全長(10.6)	—	—	—	図版19
20-2	2号墳	尖椎式片刃箭	(2.5)	—	—	—	図版19
20-3	2号墳	尖椎式片刃箭	(3.5)	—	—	—	図版19
20-4	2号墳	—	—	(4.7)	—	—	図版19
20-5	2号墳	—	—	(7.3)	(0.2)	—	図版19
20-6	2号壇	—	—	(7.4)	—	—	図版19
20-7	2号壇	—	—	—	(2.3)	—	図版19
34-4	3号墳	尖椎式片刃箭	(3.1)	9.5	(3.1)	—	図版22
34-5	3号墳	尖椎式脛快三角形	3.3	6.5	(4.0)	—	図版22
34-6	3号墳	尖椎式脣快三角形	2.4	6.0	5.4	—	図版22
34-7	3号墳	尖椎式脣快三角形	2.6	6.0	(1.2)	—	図版22
34-8	3号墳	平椎式三角形	2.9	3.0	(4.8)	—	図版22
34-9	3号墳	弓金具	全長2.5	筒金(2.0)径0.5	—	—	図版22

表6 玉類計測表

図版番号	古墳名	種別	径	高さ	孔径	備考	写真図版
16-23	1号墳	丸玉	1.05	0.80	0.23~0.28	蛇紋岩	図版19
16-24	1号墳	丸玉	1.05	0.90	0.25~0.30	蛇紋岩	図版19
34-14	3号墳2号棺	管玉	長さ2.5	幅0.80	0.30	滑石	図版22
34-15	3号墳2号棺	丸玉	0.90	0.60~0.65	0.25	蛇紋岩	図版22
34-16	3号墳2号棺	丸玉	1.00	0.85	0.23~0.28	蛇紋岩	図版22
34-17	3号墳2号棺	丸玉	1.15	0.65~0.75	0.25	蛇紋岩	図版22
34-18	3号墳2号棺	丸玉	1.15	0.80~1.05	0.30~0.33	蛇紋岩	図版22
34-19	3号墳2号棺	丸玉	1.25	1.05	0.30	蛇紋岩	図版22
34-20	3号墳2号棺	丸玉	1.18	0.85	0.35~0.40	蛇紋岩	図版22
34-21	3号墳2号棺	丸玉	1.20	0.85~0.90	0.30~0.35	蛇紋岩	図版22
34-22	3号墳2号棺	丸玉	1.25	0.70~0.75	0.30	蛇紋岩	図版22

表7 耳環計測表

図版番号	古墳名	長径	短径	断面厚	重量	備考	写真図版
16-22	1号墳	1.6	1.5	0.6	3.3	金属箔剥落	図版19
34-10	3号墳	1.9	1.7	0.5	2.6	—	図版22
34-11	3号墳	1.9	1.7	0.4	2.7	—	図版22
34-12	3号墳2号棺	3.1	2.8	0.7	20.9	金属箔剥落	図版22
34-13	3号墳2号棺	3.0	2.7	0.7	14.5	金属箔剥落	図版22

表8 直刀・刀子計測表

図版番号	古墳名	長さ	刃部長 刃部幅	茎 長 幅	備考	写真図版
16-17	1号墳	(14.7)	10.2 1.5	4.5 1.0	—	図版19
16-18	1号墳	—	(3.4) 1.0	—	—	図版19
16-19	1号墳	(7.3)	(3.5) 1.3	(3.8) 1.0	—	図版19
16-20	1号墳	—	(3.8) 0.9	—	—	図版19
16-25	1号墳	(45.6)	37.0 2.6	(8.6) 2.0	—	図版19
20-1	2号墳	(10.4)	(3.6) 1.6	6.8 1.5	—	図版19
34-1	3号墳	(17.5)	(10.5) 1.7	(7.0) 0.9	—	図版22
34-2	3号墳	—	(4.5) 1.4	—	—	図版22
34-3	3号墳	—	—	(6.0) 1.0	—	図版22
35-1	3号墳	49.9	40.1 2.6	9.8 2.0	—	図版23
35-2	3号墳	44.6	36.0 3.1	8.6 1.4	—	図版23
35-3	3号墳	42.9	33.0 2.7	9.9 1.5	—	図版23
35-4	3号墳	56.6	48.2 2.6	8.4 1.6	類似鉛象嵌	図版23

表9 石器計測表

図版番号	調査区	遺構・層位	器種	最大長 最大幅 最大厚 (cm)	石材	重量 (g)	備考	写真図版
49-1	1区	表様	磨製石器	2.36 1.66 0.26	粘板岩	1.0	—	図版27
49-2	1区	包含層	石器	1.62 1.36 0.42	多孔質玄武岩	0.6	—	図版27
49-3	1区	包含層	石器	2.47 1.57 0.39	黒曜石	0.9	—	図版27
49-4	1区	包含層	打製石斧	7.96 4.38 1.20	凝灰質粘板岩	44.9	—	図版27
49-5	1区	包含層	ナイフ形石器	3.28 1.11 0.43	黒曜石	1.4	二側面加工	図版27

表10 横穴式石室計測表

古墳名	墳形	埋葬施設				埋葬施設の出土遺物	周溝・墓道の出土遺物	備考				
		南北	東西	石室形態	主軸方位							
1号墳	円形	(11.00)	10.80	無袖式開口部立柱	N-21°-W	4.10	3.00	0.76	1.06	針1・鉄織10・小刀1 丸玉2	耳環1	—
2号墳	円形	(6.30)	8.80	無袖式	N-20°-W	2.43	2.20	0.70	0.82	刀子1	—	鉄織
3号墳	円形	(10.00)	11.00	無袖式開口部立柱	N-1°-W	4.50	4.10	1.10	1.18	銀象嵌小刀1・小刀3 丸金具1・耳環4・丸玉8 管玉1・刀子2・鉄織5	—	組合式箱形石棺2基

表11 方形周溝状遺構計測表

古 墓 名	墳 形	埋 葬 模		埋葬施設	埋葬施設の出土遺物	周溝 の 出 土 遺 物	備 考
		南北	東西				
1号方形周溝状遺構	方形	3.55	3.98	木棺直葬カ	—	須恵器高台壙3・長甕壙2・摘み蓋1・土師器壙1	—

表12 火葬墓計測表

遺構名	規 様			骨 藏 器	埋 納 状 態	備 考
	長 径	短 径	深 さ			
SF1	0.54	0.50	0.25	長胴甕	正位	—
SF2	0.60	0.54	0.25	長胴甕	正位	—
SF3	0.63	0.53	0.30	長胴甕	正位	炭を充填
SF4	(0.39)	0.38	0.13	小型甕・長胴甕背部	小型甕正位	合口カ

## 第IV章 まとめ

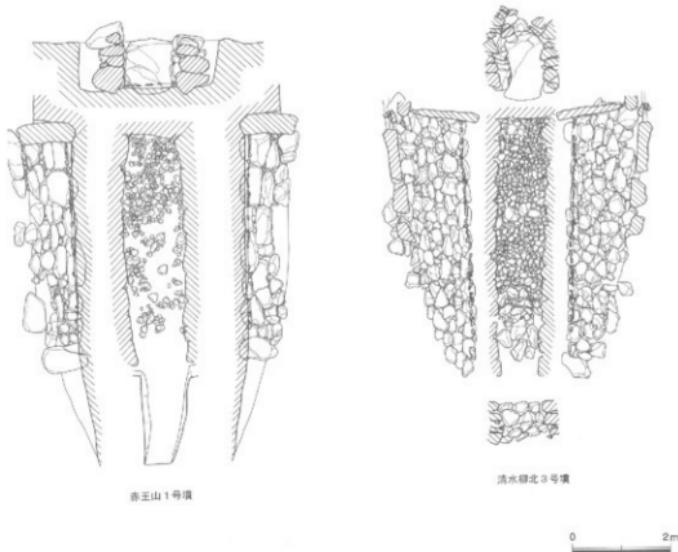
### 第1節 横穴式石室について

#### 1 無袖式（開口部立柱）の石室の検討

今回検出された3基の横穴式石室を開口部の造作から分けると1・3号墳は立柱石をもつ無袖式の石室形態で、2号墳は小型の無袖式石室である。特に開口部に立柱石をもつ石室の分布は箱根山西麓を中心として愛鷹山麓の東部地域まで広がりをもつ。また、わずかではあるが静清平野の東部にも散見される。この石室をさらに細分すると、両側壁の開口部に立柱石をもつ石室と、片方の側壁のみに立柱石をもつ石室に分けることが可能である。

両側壁に立柱石をもつ無袖式石室は三島市夏梅木16号墳、三島市赤王山1号墳、沼津市東原1号墳などに確認される。他方、片方の側壁のみに立柱石が認められるものは三島市田頭山1・3号墳、沼津市清水柳北3号墳などが挙げられる。この石室の特筆すべき点としては、いずれも左側壁のみに立柱石が据えられており、石室構築に際して共通の規範が存在することを伺わせる。これらの石室の築造時期は6世紀末葉～7世紀前半で、当地域においては比較的早い時期である。玄室平面形は長方形、長台形、胸張りとバラエティに富んでいる。

この開口部に立柱石をもつ無袖式石室の系譜関係は明らかではないが、現状で東駿河においては畿内系の両袖式石室や擬似両袖式石室は認められず、基本的には無袖式石室のみの单一系譜である。これらをさらに細分すれば開口部に段をもつ無袖式石室、長方形玄室の無袖式石室、開口部に立柱石をもつ無袖式石室に分けられる。特に富士山麓から富士川西岸域の小地域では在地色の強い開口部に段をもつ無



第50図 開口部立柱石をもつ石室の諸例

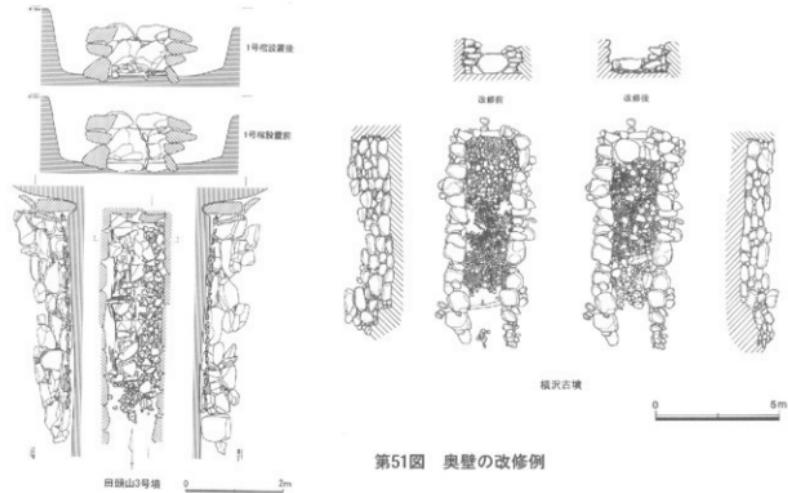
袖式石室が分布し、独自の地域圏を形成している。近年、段を有する石室は堅穴系横口式石室の系譜関係が想定されているが、いずれにしても東駿河は遠江や西駿河と比べると横穴式石室に関する情報が極めて限定的に流入してきたといえる。このため、愛鷹山麓及び箱根山麓における無袖式石室は立柱石という属性のみが付加したものと捉えておきたい。そこには袖部の造作による通路として差道の認識はなく、玄室のみの埋葬空間であったと思われる。

## 第2節 改修された石室の検討

田頭山3号墳の石室には組合式箱形石棺が2基直列で設置され、1号棺設置時に奥壁の石とは別の鏡状の石を剥えた痕跡を残している。石室の改修には追葬時に礫床、棺台の追加・改修などが一般的であり、奥壁や側壁など石室の基本構造を変えるほど大規模に改修された石室はあまり知られていない。そこで県内において奥壁、側壁（袖石の付加）の補強された石室について若干の検討を行う。なお、ここでいう改修された石室とは古墳が継続して営まれたものを指し、後の再利用などは含めない。

### 1 奥壁の補強

**富士市横沢古墳** 横沢古墳は富士山麓に所在する径16m高さ3~3.5mの外護列石を有する円墳で、段をもつ無袖式石室である。注目されるのは奥壁の改修に伴い、墳丘に改修が施されている点である。石室の一部が崩落するとともに墳丘裾部も崩落したようで、厚さ0.5mの黒色土が全面に盛土されている。また、周溝も再掘削されている。改修前の石室規模は全長8.3m幅2.3m高さ2~2.5mと推定されている。奥壁は0.85×1.35mの鏡石を2段積みに中央に据え、左右に小型の礫を小口横積みや横口積みにより奥壁を構成している。改修後の石室は大型の礫を奥壁の基底石とし、その両側に人頭大の礫を横口、小口に積み奥壁全面に再構築している。その結果、全長7.3m幅2.3mの玄室空間が作り出されている。側壁に改修の痕跡は認められず、そのまま利用したようである。床面は3面確認され、第1・2面が改修後の石室に対応し、最下面が改修前の石室に伴うものとされる。この改修された奥壁下の床面からは提瓶、甕、金銅製鈴等が出土している。これらの須恵器は6世紀後半とされることから初葬はこの時期と考え



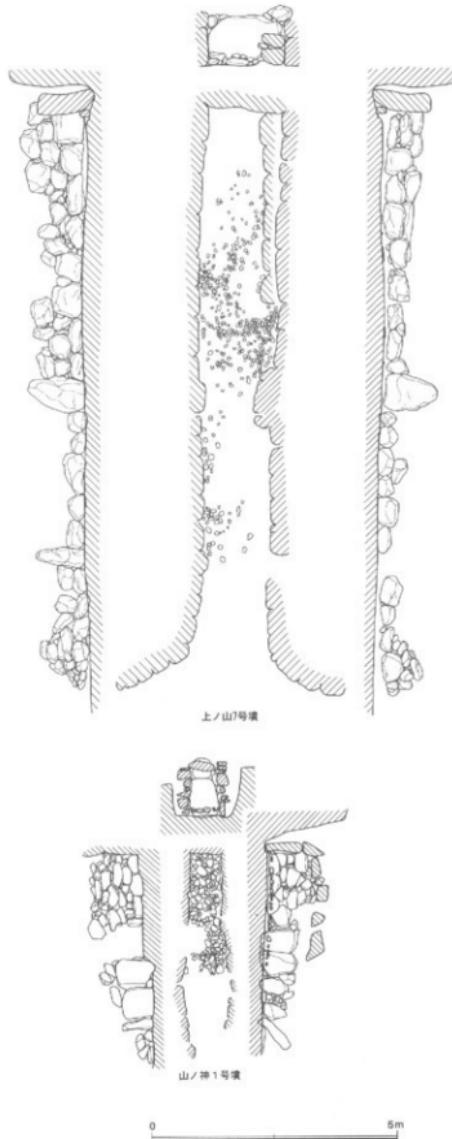
第51図 奥壁の改修例

られる。そして、改修後の2次床面からは7世紀前半の坏蓋が伴っていることから、この時期に石室の崩落に伴い奥壁が改修され、8世紀初頭まで墓前祭祀が執り行われている。

**三島市田頭山3号墳 径10mの円墳で**開口部に立柱石を有する無袖式石室である。石室内部には右側壁寄りに組合式箱形石棺を2棺連接させ、直列に設置されている。奥壁は格子状に鏡石を設置し、4枚の石が残存していた。この奥壁寄りの1号石棺を据える段階で右側壁寄りに石棺の短側板を固定させるため、拳大ほどの礫を込め込んでいる。さらに、左側壁寄りには鏡石状の石を広口に設置し、1号石棺と密着させている。1号棺と2号棺の連接状態から1号棺が先に設置されており、奥壁より手前の長さ20cm幅1.1mの狭い空間は墓室空間として利用不可能な構造となっている。この狭い空間からは副葬品等の遺物が出土していない。墳丘や石室上部は流失・崩落しているため、この造作が完成時のものかあるいは石室の構築途中であるかどうか不明であるが、少なくとも1号棺の補強に伴う奥壁の改修と思われる。

## 2 側壁の改修

静岡市上ノ山7号墳 静岡市大谷に所在し、石室墳は7基確認されている。7号墳は1辺17mの方墳で、全長9.2m玄室幅1.6mの擬似両袖式石室で、前庭側壁を有している。奥壁から4mの部分まで左側壁が改修されており、2段残存している。これにより幅1.3mの玄室が作り出されている。奥壁や掘り方底面の設置状況から外側の側壁の完成後により側壁の改修が行われたとされる。床面は玄室から羨道にかけて床石がみられるが、これらが敷石の除去後に据えられたものかは判断しない。



第52図 側壁の改修例

### 3 無袖式と胴張り石室の改修

藤枝市山ノ神1号墳 山の神1号墳の墳丘規模は不明であるが、石室には天井石が5枚良好に残存しており、やや弧状を描く天井構造である。天井石は胴張り部分にも一部掛かっている。奥壁は2段積みで大小の石から構成される。石室の平面形は奥壁から1.6mまでは長方形で、そこから前方の4.2mまでは胴張りを呈している。石材の使用方法も大きく異なり、奥壁側では5~6段積まれているのに対し、開口部側は大型の礫が縦位に積まれている状況である。基底石の設置面にも0.1mほどの比高差が認められ、石室の主軸方位も若干のズレが生じている。このことは構築時期の差を示していると考えられる。また、床石は奥壁側では全面に施され、胴張り側では一部にしか認められない。出土遺物は胴張り側で須恵器壺蓋、平瓶、鉄鎌などが出土し、奥壁側では人骨のみが認められたにすぎない。築造時期は7世紀後半で、追葬は7世紀末葉と考えられる。

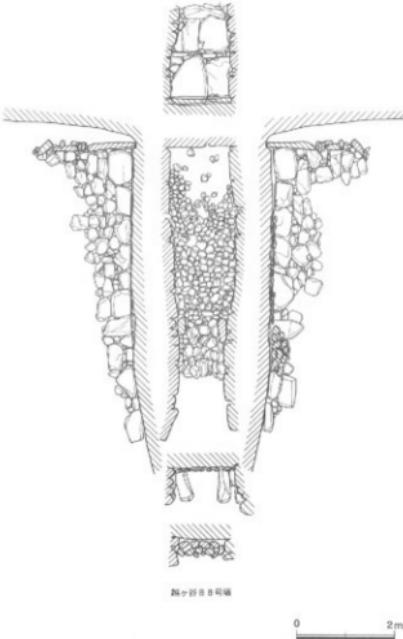
これらを総合すると、長方形と胴張りの側壁の時期的関係は明確ではないが、追葬の段階で改修が行われていた可能性がある。つまり、被葬者と追葬者との間に石室平面形や構築技法の差異が認められ、そこには石室に対する意識の違いを読み取ることができる。

### 4 袖石の付加

藤枝市越ヶ谷B-8号墳 越ヶ谷B-8号墳は径11.0m高さ2.3mの円墳で、全長6.0m幅1.3mの擬似両袖式石室である。天井石は4枚確認されている。奥壁は薄い板状の石を用い、田字形に組み合わせて

いる。石室の平面形はやや胴張りを呈し、閉塞石の設置部分で窄まり、羨道部分は広がる形態である。玄室部分の側壁は腰石を用いている。築造時期は7世紀中葉で、追葬は7世紀後半とされている。注目されるのは袖の部分で長さ0.75mの石を用い、両側壁に張り出すように設置している。さらに、この袖石の裏側には礫が小口積みとして配され、奥壁から続く側壁が形成されている。報告ではこの袖石の上に天井石が載せられておらず、袖石を立てるのみで玄室と羨道の区別がされていたとしている。袖石が当初から設置されたものか、または追葬時に追加されたかは不明であるが、一例として紹介しておく。

以上、横穴式石室の構築・追葬段階において奥壁や側壁の補強・改修がわざかではあるが認められる。現時点では資料的制約があるが、簡単にまとめると奥壁の改修は田頭山3号墳の場合では、2号棺設置時に鏡石状の石を据え、さらに拳大ほどの礫で固定しており、組合式箱形石棺の短側石が崩落しないように据えられている。また、横沢古墳は、幅2mを有する幅広の石室であるため、中央に鏡石と両側に礫を多段積みが施されており、崩落しやすい状況であったと考えられる。このよ



第53図 袖石の付加

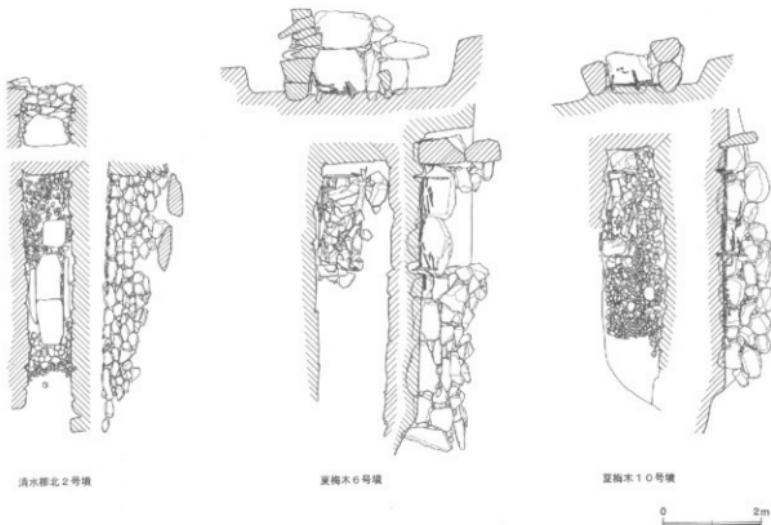
うに奥壁に施された造作は、石棺や奥壁そのものの補強的意味合いが強かったと思われる。一方で、玄室部分の側壁の改築は上ノ山7号墳にみられるように後続する小型の横穴式石室が築造されず、追葬段階に玄室を中心として改築を行ったと推測され、玄室の狭小化を目的とした可能性もある。

袖石の改修例は、今回挙げた古墳以外にも少なからず認められる。当初からの石室構築途中での作業なのか、追葬段階のものなのかは判然としないものもあるが、山ノ神1号墳のように長方形玄室から胴張りへの石室形態を指向していく様子が伺えることから、先葬者と追葬者の横穴式石室という葬送観念の理解度の差として捉えることもできよう。

### 第3節 組合式箱形石棺の検討

東駿河・伊豆地域の石室を特徴づけるものとして無袖式石室以外に、組合式箱形石棺の存在が挙げられる。この組合式箱形石棺の研究については小野真一氏や植松草八氏により集成、研究が試みられており、静岡県内において80例、その内61例が富士川以東の東駿河・伊豆地域に認められる（小野1970）。現在ではさらに組合式箱形石棺を有する石室の基数は増加しているが、東駿河・伊豆地域の優位性に変わりはないと思われる。そこで今回は実測図が提示されている古墳群を取り上げ、棺構造と棺配置について検討してみたい。

組合式箱形石棺の検討をする前にどのような形態の石室に採用されているのかをみていく。東駿河・伊豆における石室形態には先述のとおり、無袖式石室、開口部に段を有する無袖式石室、開口部に立柱石をもつ無袖式石室が存在する。箱根山麓においては開口部に立柱石をもつ無袖式石室、富士山麓にお



第54図 組合式箱形石棺を有する石室の諸例

いては段構造を有する無袖式石室、愛鷹山麓ではこれらすべての石室形態が存在するように地域ごとに主要となる石室形態が認められる。他方、組合式箱形石棺の分布範囲は、愛鷹山麓東部から箱根山麓、伊豆半島の西海岸部まで広がるとされ（小野1970、植松1976）、石室形態の差異と石棺の採用には関連性・特殊性は伺えない。

東駿河地域でみられる組合式箱形石棺はいわゆる「ヘギ石」と称する板状節理の安山岩を用いている。これらは愛鷹山麓、箱根山麓、天城山等で採取が可能とされ、基本的には在地で産出される石材を使用していると思われる。

### 1 組合式箱形石棺の構造

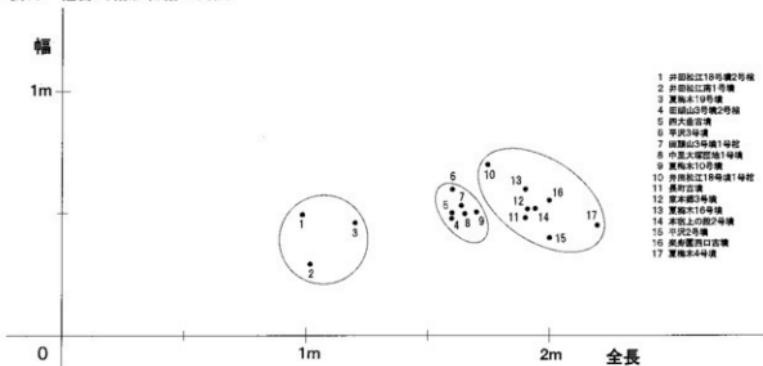
基本構造は、短側石は1枚、長側石は複数重ね合わせて縫いでおり、蓋石や床面も複数の板石を重ね合わせている。さらに田頭山3号墳の組合式箱形石棺の場合は、蓋石と側石の接する部分には整形・研磨して面をそろえている。このようなことを考慮にいれつつ、組合式箱形石棺の全長・幅、長側石の縫ぎ方、床面構造の項目に着目し、それぞれの属性の示す特徴を明らかにしたい。

**組合式箱形石棺の規模** 規模にばらつきがあるものの、ある程度のまとまりが認められる（表13）組合式箱形石棺の全長をもとに1.9m前後を大型棺、1.6~1.7m前後を中型棺、1m未満を小型棺に分類できる。2mを超えるものはなく、1.6~1.7mの部分に規格が集中している。規模から副葬品による階層差は見出しづく、被葬者の身長が基本となっていると考えられる。

**床面構造** 床面は底石を有するものが一般的であるが、石棺の据え直し等で砾床のものもみられる。底石を有するものは基本的に複数枚重ねられていることを特徴とする。田頭山3号墳の底石は蓋、側石より薄く、色調もやや青みを帯びており、同じ石材でありながら選択する意図が働いていたことが伺える。底石の設置状況は石棺幅に相当する細長い板を横位に複数重ねているものと、やや大型の細長い板を縦位に設置する例がみられる。

**石の縫ぎ方** 横穴式石室内に組合式箱形石棺が最も早く採用された古墳は沼津市清水柳北2号墳で、築造時期は6世紀後半である。石棺は石室中央に設置されており、左右の長側石には細長い大型の石を横位に用いている。枚数は、両側に1枚ずつ確認されているに過ぎないが、残存する底石の状態から1~3枚程度の石が据えられていたと推測される。底石は残存長1.8m幅0.63mを測り、この長さに対して底石は大型の石が2枚確認され、底石の厚さも0.05mほどで他のものより厚い。間隙には小型の石が詰められている。長側石の設置方法は基本的に横位から縦位に変化していく、使用される枚数も増えていく

表13 組合式箱形石棺の内法

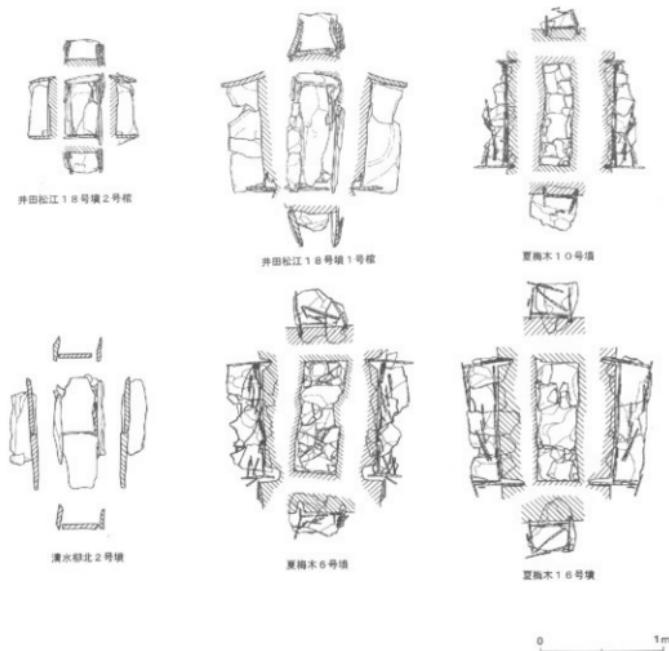


ものと思われる。6世紀末葉以降には大型棺や中型棺の長側石は長軸を縦位に設置し、複数枚重ね合わせることを基本とするが、他にも長軸を横位に設置してあるものも認められ、多様な組み合わせが見受けられる。また、小型棺の長側石は1枚の細長い石が横位に設置されている例が多い。このように左右長側石の枚数は一定せず、継ぎ方も規則性は認められない。しかし、短側石・長側石とともに平滑な面を内面に向けて設置しており、長側石の枚数や短側石と長側石の組み方よりも、内側の空間を箱状に確保しようとする指向が強いと思われる。

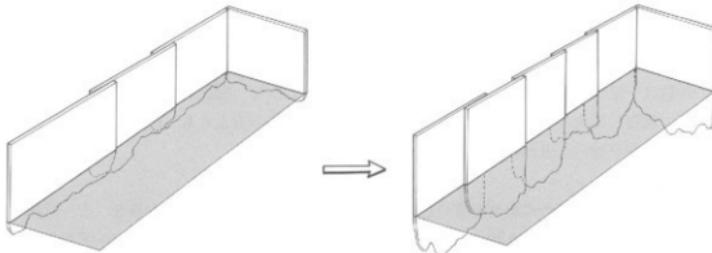
## 2 棺配置

横穴式石室内における組合式箱形石棺の設置状況には第57図のように単数棺の場合、A～C類に分類できる。圧倒的に多い配置例はA類で、C類は少ない傾向がある。複数棺設置例はD～F類に分けられる。田頭山3号墳では2基の組合式箱形石棺が採用されており、棺の配置状況はD類である。石室幅は1.1～1.2m内に石棺幅0.65m、0.45mの石棺を設置し、2号棺の北側短側石を1号棺の短側石と共用している。この2棺連接して配置されたD類は他に沼津市石川A6号墳にみられる。石棺の構築順序は明確にしがたいが、追葬あるいは同時埋葬にしても、棺配置における強い計画性が伺える。

複数棺の設置例は長泉町土狩長塚古墳、長泉町山王塚古墳でもみられ、これらの配置はいずれも奥壁より0.2～0.3m南側でD類を採用している。E類は戸田村井田松江18号墳のように奥壁側に小型棺を横位に、1号石棺を右側壁に沿って縦位に配置している。F類には長泉町上ノ段古墳がある。さらに、沼



第55図 組合式箱形石棺の諸例



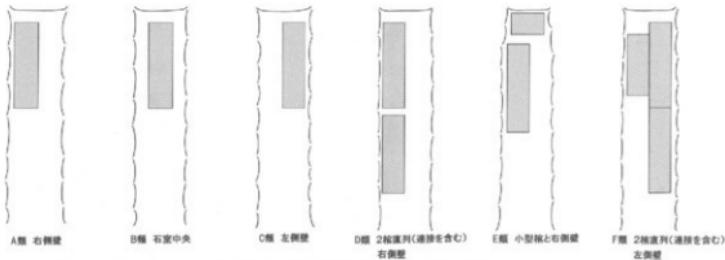
横位に用いる

縦位に用いる

第56図 長側石の継ぎ方（模式図）

津市石川6号墳、三島市夏梅木17号墳のように奥壁寄りの石室中央に2棺設置されている場合もある。このほか3棺設置、4棺設置されるものもあるという（小野1970）。なお、2棺が並列して設置される例は現状ではみられない。

資料的制約はあるが、これらの分布状況をみると箱根山麓においては右側壁寄り（奥壁からみて）に設置される例が多く、左側壁寄りに設置される例は認められない。黄瀬川以西では右側壁に設置されるものも存在するが、左側壁寄りに設置されるものも散見される。また、西伊豆海岸部の石室には小型棺を採用する例もある。当然、石室幅1.2～1.4mの狭長な無袖式石室のために中型棺以上のものを据えられず、縦位に設置せざるを得ない物理的状況や、石棺を据えるときの足場や通路の確保や石棺外にも埋葬するためといった要因も考えられるが、棺の配置には一定の規範が少なからず存在していたであろう。



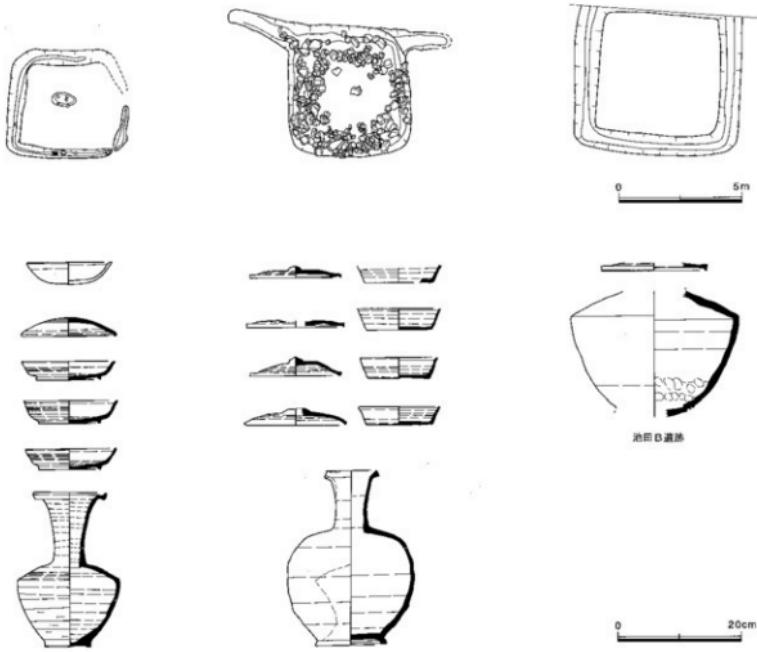
第57図 組合式箱形石棺の配置状況

## 第4節 方形周溝状遺構と火葬墓について

### 1 方形周溝状遺構について

田頭山古墳群の1号方形周溝状遺構は1・2号墳が立地する丘陵から西に50m離れた丘陵先端部の南斜面で検出されている。1辺4mで、中央に埋葬施設と思われる土坑状の掘り込みがみられる。この部分から遺物は出土していないが、周溝底部に須恵器高台壺、蓋、長頸壺、土師器壺が出土しており、これらの土器から築造時期は8世紀中葉と思われる。

この遺構の類例は少なく、類似する資料として長泉町池田B遺跡、沼津市尾上III橋西遺跡が知られる。池田B遺跡の方形周溝状遺構は1辺7mの規模を有し、埋葬施設は検出されていないが周溝内より須恵器摘み蓋、長頸壺などが出土しており、8世紀後半に築造されたと考えられる。他方、尾上III橋西遺跡の遺構は1辺5mの規模を有し、周溝内より多くの礫がみられることから墳丘には列石が巡っていたと推測される。遺物は須恵器長頸壺、摘み蓋、無台壺など比較的多く出土しており、8世紀後半以降に築造されたと考えられる。埋葬施設は検出されていないが、報告者は火葬墳墓としている。この3例に共通する点として少なくとも8世紀中葉以降に築造されていることが挙げられる。また、池田B遺跡と尾上III橋西遺跡は愛鷹山麓の丘陵上に分布し、単独で検出されている。周辺には横穴式石室墳などが分布



田頭山1号方形周溝状遺構

尾上III橋西遺跡

第58図 方形周溝状遺構の諸例

しておらず、きわめて限定的である。

田頭山の1号方形周溝状遺構の場合は1辺4mと小型であること、石室墳が分布する同一丘陵であること、炭を詰めた火葬墓が近接した場所で検出されていることなど、先の2例と比べると立地状況、墳墓の継続性が大きく異なることを指摘でき、火葬墓SF3との関わりの中で考える必要があるだろう。

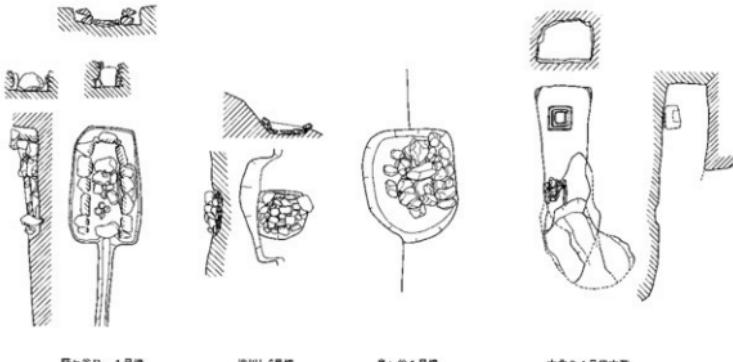
## 2 火葬墓について

田頭山古墳群では火葬墓は4基検出されており、そのうち1基は木炭を充填したものが見つかっている。SF1～SF3は3号墳の南側に位置し、宮川に張り出す丘陵と西に延びる丘陵の付け根にあたる緩やかな南斜面に分布している。特にSF1・SF2は並列して立地しており、骨蔵器として共通の土師器長胴甕を正位の状態で埋設している。そこから西側へ3mの場所でSF4が検出されている。この土壇からは小型の甕と長胴甕の肩部が出土している。掘り込みも浅く、潰れた状態であったが、小型甕を正位に据え、その上部には長胴甕をかぶせ合口にしていたと想定される。

県内で検出された火葬墓の類例は少なく、沼津市清水柳北1号墳・伊豆長岡町大北横穴墓・静岡市泉ヶ谷1号墳・藤枝市萩ヶ谷B1号墳・藤枝市滝川I 6号墳などが挙げられる。清水柳北1号墳や大北横穴墓は凝灰岩製の石櫃を有している。特に大北横穴墓には1横穴墓内に複数の石櫃を有しており、火葬という葬法を取り入れながらも古墳時代からある追葬の原理が働いたことを示している。静岡市泉ヶ谷1号墳では長さ0.9m幅0.35m、高さ0.40mの小石室内に長胴甕を正位に据え、上部は石で蓋をしている。

滝川火葬墓群は小石室6基、焼壁土坑10基が検出されており、同一丘陵には横穴式石室はみられない。その内、火葬骨が確認されたのは滝川I 6号墳である。全長0.6m幅0.6mで床石より火葬骨が出土していることから須恵器などの容器ではなく、有機質のものに埋納されていたとされる。

このように火葬の導入に際して、特殊な墳形の採用が認められるものの小石室あるいは横穴墓に骨蔵器が伴っている例が認められる。これは古墳という伝統的な概念・思想が残存しながらも、火葬という新たな埋葬方法を取り入れており、古墳から火葬墓への過渡的な性格をもつものといえよう。また、周辺には横穴式石室墳が検出されていないことから、前代の墓域を継続して利用するのではなく、あらたな墓域が設定されたことであろう。田頭山古墳群は6世紀末葉～7世紀までは横穴式石室墳を採用し、



第59図 火葬墓の諸例

8世紀中葉に方形周溝状遺構へ、8世紀後半には火葬墓といった大まかな変遷が追えると同時に継続的に営まれた同一集団による墓域といえよう。

県内における最近の調査例では、磐田郡豊岡村上神増古墳群、磐田市二子塚古墳群のように古墳群内において火葬墓を伴う事例が増えているが、いずれも古墳との時期的な隔絶性が大きい。これらの状況をふまえて、今後古墳群と火葬墓との関係を捉える必要があるだろう。

## 第5節 結語

調査は平成14・15年度に実施され、多くの成果を得ることができた。ここではその成果を2点に絞り、総括としておきたい。

第1の成果として横穴式石室に関する事例である。3基の横穴式石室が検出され、その内2基は開口部に立柱石をもつ無袖式石室である。箱根山西麓においては両側壁に立柱石をもつ石室が一般的であるが、今回の調査例では2基とも左側壁のみに立柱石をもつもので、田頭山古墳群内において共通の石室構築の規範が存在することが伺える。

3号墳は組合式箱形石棺を2基有し、右側壁寄りに2棺直列に連接して設置されていた。東駿河は石室内に組合式箱形石棺を有する地域でもあるが、単数設置が基本で、複数設置例は少ない。配置状況は奥壁側の右側壁寄りに設置する例が多く、今回の設置状況はその典型例と示すと同時に石室内の空間利用に関する意識の一端を示すものといえよう。さらに石棺構築にあたっては石室の床面下より、板状節理の安山岩の破片が多く認められ、石棺にも調整痕がみられることから石室構築時に石棺の整形等の作業を行っていた可能性がある。石棺設置順序は1号棺を据え、2号棺は1号棺の奥壁側の小口を利用し、石棺を構築していると考えられる。1号棺設置時に奥壁と石棺の間隙を埋めるために鏡石状の石を据えている状況が認められた。

石室の形成順序として出土土器や石室形態・規模から3号墳→1号墳→2号墳と考えられ、開口部立柱を持つ石室→小型の石室への変遷が想定される。

副葬品には1号墳と3号墳で特筆すべき遺物が出土した。田頭山3号墳の1号棺では銀象嵌が施された刀身長48.2cmの小刀が出土した。鍔には象嵌はみられず、鍔の表裏に銀象嵌によるハート形文が認められ、棟側、刃部側、側面にも象嵌が施される。今回の調査では鞘尻金具や鞘口金具などは出土していないが、一般的に鍔に象嵌が認められるものには鍔部分にも象嵌が施される例が多い。また、鞘尻金具や鞘口金具に銀象嵌が施されていた可能性は否定できないが、1号棺の出土状況から盗掘等の影響は少なく、当初から鍔部分にのみ銀象嵌が施されていたと考えられる。

田頭山1号墳では奥壁と左側壁のコーナー部分の床面から鉄針とともに鉄針が出土している。先端部は欠損しているが残存長10.6cmで、断面は方形である。端部には径2mmの孔が認められる。鉄針は後期古墳からの出土は少なく、県内では富士市中原4号墳から出土例が認められるに過ぎない。この古墳から出土した鉄針は鑿、鉄鋸などの鉄器とともに奥壁付近から出土している。鉄針は長さ17cmの長針である。また、この長針とともに短針が10本以上出土している。中原4号墳からは鉄鋸といった鍛冶具や鍔先、鑿、鉄斧といった豊富な鉄製品が出土しており、鉄器生産に関わる被葬者が想定できる。資料が少ないので、その評価について明確に示すことができないが、中原4号墳のような鉄器生産との関わりが認められる事例が存在することを重視すれば、1号墳の鉄針は職掌内容を象徴的に示すとともに技術者集団が存在していた可能性が指摘できよう。

他にも、3号墳の1号棺からは弓金具が1点出土している。弓の規模や棺内に飾り弓の副葬を示すとともに群集墳の中でも比較的豊富な副葬品をもつ古墳からの出土例として県内の典型的な事例である

う。

第2の成果として古代の墓制である。1号方形周溝状遺構は1・2号墳が立地する丘陵の先端部の南斜面に位置し、炭を詰めた火葬墓（SF3）とともに検出されている。1辺4mで方形を呈し、周溝は3辺のみの検出であるが、本来は全周していたと考えられる。盛土はほとんど流失しているため、浅い土坑状の掘り込みがみられるに過ぎなかったが、木棺直葬のような埋葬施設と考えられる。この埋葬施設からは副葬品は出土していないが、周溝内の底部より須恵器高台壺と土師器壺が重ねられて出土しており、供献された状態を示している。これらの土器から築造時期は8世紀中葉と考えられる。県内において方形周溝状遺構の類例は少なく、沼津市尾上三橋西遺跡や長泉町池田B遺跡で確認されているに過ぎない。これら2遺跡の周辺では後期古墳は見つかっておらず、単独に立地していることを特徴とする。特に池田B遺跡で検出された1辺7m前後の方形周溝状遺構の存在は、南関東とのつながりを示すものであろう。

火葬墓は合計4基検出され、3号墳の周辺で3基、方形周溝状遺構の北側で1基確認された。土坑内には主に土師器長胴壺を使用し、正位の状態で埋納されていた。SF3の土坑内には木炭が充填されており、その他の土坑には炭の充填は認められなかった。また、SF4は小型の壺と長胴壺が合口であった可能性が高い。東駿河・伊豆地域における火葬の導入には他地域より早く既に8世紀前半には清水柳北1号墳や大北横穴墓群などで石櫃に火葬骨が納められている。今回の検出例により石櫃以外の骨蔵器を用いていることが明らかになり、この被葬者の性格、身分を考える上で示唆的であろう。

このように田頭山古墳群では同一丘陵内において6世紀末～8世紀後半まで墓域として維持していたことが認められ、無袖式開口部立柱（1・3号墳）→小型石室（2号墳）→1号方形周溝状遺構→火葬墓（SF1～4）へと変遷する過程が辿れる。若干墓域の移動や空白期間がみられるものの、同一集団による墓域といえよう。当地域は6世紀末から7世紀後半まで築造される夏梅木古墳群、7世紀後半以降に築造される赤王法師隠横穴墓群が群在しており、古代の墓制を考える上で貴重な成果が加わったといえよう。

## 参考文献

- 池谷初恵 1995 『大場川遺跡群』大場川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 三島市教育委員会  
井鍋聰之 2003 『東駿河の横穴式石室』『静岡県の横穴式石室』 静岡県考古学会  
植松章八 1976 『中里大塚团地古墳』 富士市教育委員会  
植松章八 1992 『遠江・駿河・伊豆における古墳の終末』『国立歴史民俗学博物館研究報告』 第44集  
大谷宏治 2003 『遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄織の変遷とその意義』 『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』 第10号  
大谷宏治 2004 『装飾大刀三頭』『静岡県考古学研究』 第35号  
岡村 涉 2000 『ふちゅ～る』No.8 平成10年度 静岡市文化財年報 静岡市教育委員会  
小野真一他 1972 『本宿上ノ段古墳群』 加藤学園考古学研究所  
川江秀孝 1992 『飾大刀』『静岡県史』 資料編 考古三  
輕部慈恩 1958 『三島市誌』上巻 三島市  
菊池吉修 2003 『静清地域の横穴式石室の形態』『静岡県の横穴式石室』 静岡県考古学会  
栗木 崇 1999 『生茨沢遺跡』 岐静岡県埋蔵文化財調査研究所  
小池 寛・松井忠春 1996 「改革された横穴式石室—京都府中丹地例を中心に」『京都府埋蔵文化財情報』第62号 財團法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
後藤健一 1989 『湖西古窯跡群出土の須恵器と壺』『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会

- 笠原千賀子 2000 『池田B遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 静岡県 1990 『静岡県史』 考古2
- 静岡県教育委員会 1986 『駿河・伊豆の横穴群』
- 静岡大学人文学部考古学研究室 1981 『群集墳を巡る諸問題 一静大古墳群を中心に』
- 静岡県考古学会 2001 『東海の横穴墓』 シンポジウム実行委員会
- 静岡県考古学会 2003 『静岡県の横穴式石室』
- 清水町教育委員会 1998 『清水町史』資料編・(考古)
- 志村 博他 1981 『横沢古墳・中原1号墳伝法遺跡群(伝法A～E地区)天間地区』岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書 富士市教育委員会
- 鈴木一有 2003 『東海東部の横穴式石室にみる地域図の形成』『静岡県の横穴式石室』 静岡県考古学会
- 鈴木隆夫他 1977 『藤枝市原古墳群越ヶ谷支群B地区発掘調査報告書』藤枝市文化財調査報告1 藤枝市教育委員会
- 鈴木隆夫他 1980 『市部古墳群山ノ神支群・藪古墳群三ツ池支群』国道1号バイパス(藤枝地区)埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 藤枝市教育委員会
- 鈴木隆夫他 1990 『女池ヶ谷古墳群発掘調査報告書』藤枝市教育委員会
- 鈴木敏中 1998 『赤王山古墳群』三島市埋蔵文化財報告書VI 三島市教育委員会
- 鈴木敏中 2000 『夏梅木遺跡群』三島市鎌が丘団地宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・獅子追面遺跡・源平山遺跡・夏梅木古墳群一』 三島市教育委員会
- 鈴木敏則 1986 『静岡県内の象嵌文』『四ツ池古墳群』
- 鈴木敏則 2001 『湖西窯古墳時代須恵器編年』『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 構造・考査 東海土器研究会
- 鈴木裕篤 1980 『西大曲遺跡発掘調査概報』沼津市文化財調査報告 第20集 沼津市教育委員会
- 鈴木裕篤 1985 『埋蔵文化財報告書2の場古墳』沼津市文化財調査報告 第35集 沼津市教育委員会
- 鈴木裕篤 1989 『清水柳北遺跡発掘調査報告書』その1 沼津市教育委員会
- 滝沢 誠也 2000 『井田松江古墳群調査整備報告書』戸田村教育委員会
- 滝沢 誠也 1999 『井田遺跡II・井田松江南古墳群』戸田村教育委員会
- 滝瀬芳行・野中仁 1996 『埼玉県内出土象嵌物の研究—埼玉県の象嵌大刀』『研究紀要』 第12号 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 辻村純代 1989 『箱式石棺に葬られた人々』『考古学ジャーナル』No.307 ニューサイエンス社
- 寺田光一郎他 1997 『小平C遺跡』三島市埋蔵文化財報告書 三島市教育委員会
- 寺田光一郎他 2003 『箱根田遺跡』三島市教育委員会
- 中野宥・浅野穂 1986 『駿河 捕ヶ沢古墳群』 静岡市教育委員会
- 長泉町 1982 『長泉郷土誌』
- 西澤正晴 2000 『井田松江18号墳出土の象嵌刀装具類について』『井田松江古墳群調査整備報告書』 戸田村教育委員会
- 西山要一 1986 『古墳時代の象嵌一刀装具について』『考古学雑誌』 第72巻 第1号
- 沼津市 2002 『沼津市史』 資料編 考古
- 橋本博文 1986 「金銅製象嵌装飾円頭大刀の編年」『考古学ジャーナル』266号
- 橋本博文 1993 「亀甲繁縝文象嵌大刀再考」『昭古論聚—久保哲三先生追悼記念論文集』真陽社
- 長谷川睦 2003 『静岡県における鉄錆の地域色と生産・流通』『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』 第10号
- 平野吾郎 1981 『狩野川流域における横穴群について』『静岡県考古学会シンポジウム3 群集墳と横穴』静岡県考古学会
- 富士市教育委員会 1994 『中原3・4号墳発掘調査概報』 富士市教育委員会

- 町田 章 1987 「岡田山1号墳の儀仗大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』 島根県教育委員会
- 望月薫弘・中野 宿 1983 『駿河・牧ヶ谷古墳』 静岡市教育委員会
- 森 威史 1984 『上ノ山遺跡発掘調査(第一次)概報I 遺構編』 静岡市教育委員会・上ノ山遺跡発掘調査団
- 八木勝行 1981 『埋蔵文化財発掘調査報告書IV 奈良時代～近世編 滝ヶ谷古窯跡・内瀬戸火葬墓群・他』藤枝市教育委員会
- 横田義章 1985 「古墳時代の象徴文様—九州の諸例紹介を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』10

### 謝 辞

田頭山古墳群の調査・資料整理にあたって多くの方からご指導・ご教示をいただきました。末筆ながら感謝申し上げます。(敬称略五十音順)

大塚淑夫 木ノ内義昭 志村 博 鈴木一有 鈴木敏中 平野吾郎 廣瀬高文 向坂鋼二

# 付 編 田頭山古墳群の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 土壤理化学分析

### はじめに

静岡県三島市大場に所在する田頭山古墳群は、箱根山西麓から延びる丘陵の南斜面に立地している。発掘調査の結果、火葬墓、方形周溝状遺跡、集石遺構などが検出されている。ただし、これらの遺構からはいずれも火葬骨等は検出されておらず、埋葬施設である根拠を示す資料は得られていない。

本報告では、本遺跡から検出された奈良時代の方形周溝状遺跡の主体部、及び火葬墓3基から採取した土壌を対象に土壤理化学分析を実施し、これらの遺構内の内容物に関する検証を実施する。

### 1. 試 料

分析調査対象の1号方形周溝状遺構では埋葬施設と考えられる土抗が中央部より検出されている。また、3基の火葬墓と考えられる土抗(SF-1, SF-2, SF-3)からは、在地と考えられている長胴壺が正位の状態で埋設される状況が検出されている。特に、SF-3では土抗覆土に炭化物が充填されている状況が確認されている。

試料は、1号方形周溝状遺構の中央主体部覆土、SF-1, SF-2の長胴壺内覆土(SF-1 1層, SF-2 1層)、及びSF-3の長胴壺内覆土上層、中層、下層(SF-3 1層, SF-3 2層, SF-3 3層)と掘り方覆土(SF-3 4層-1, SF-3 4層-2)の計8試料である。

本分析調査では、これらの試料を対象とし、土壌中に含まれるリン酸含量を測定し、リン酸の特徴的な濃集状態から遺体痕跡を定性的に調査し、埋葬施設の可能性を検証する。リン酸は人骨に多量に含まれる成分であることに加え、土壌中に含まれるアルミニウムや鉄と結合して難溶性の酸化化合物を形成し、土壌に残留固定されやすいことから遺体痕跡検証における成果が期待される。特に火山灰土壌のようにリン酸と結合しやすいアルミニウムや鉄が多い土壌では期待が大きいものとなる。なお、土壌中におけるリン酸は植物遺体によっても富化される。このことから、動植物どちらに由来するものか判別材料として、土壌中に主に植物遺体によって供給される腐植含量も調査対象項目としている。

### 2. 分析方法

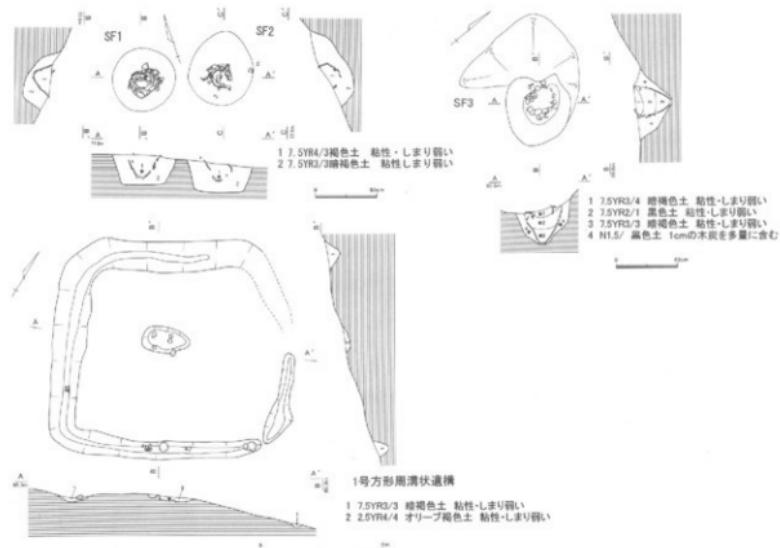
リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解一バナドモリブデン酸比色法、腐植含量はチューリン法(土壌養分測定法委員会 1981、土壌標準分析・測定法委員会 1986)による。以下に、各項目の操作工程を示す。

#### (1) リン酸含量

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105°C、5時間)により測定する。風乾細土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO<sub>3</sub>)約5mLを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO<sub>4</sub>)約10mLを加えて、再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mLに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g)を求める。

#### (2) 腐植含量

風乾細土試料の一部を粉碎し、0.5mmのふるいを全通させる(粉碎土試料)。粉碎土試料0.100~0.500gを100mL三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mLを正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニ



第60図 内容物採取位置図

ウム液で滴定する。滴定値および加热減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org-C 乾土%) を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

### 3. 結果

試料はいずれも粘質土であり、国際法区分における野外土性（ペドロジスト懇談会編 1984）はLiC（輕埴土）に分類される。一方、土色については1号方形周溝状造構1層、SF-1 1層、SF-2 1層のオリーブ褐色～暗褐色に対し、炭化物の混入が確認されたSF-3の各覆土でやや黒色味が強い傾向が見られる。

腐食含量は土色と良く対応した関係を示し、炭化物の混入が見られない1号方形周溝状造構1層、SF-1 1層、SF-2 1層が2%前後の腐植含量である。これに対し、炭化物が混入するSF-3では全体的に高い傾向にあり、3.59～6.37%の腐植含量を示す。一方、リン酸含量については各土抗覆土ともに低い傾

表14 土抗覆土の理化学分析結果

試 料 名	土 性	土 色	腐植含量(%)	P205(mg/g)	備 考
1号方形周溝状造構 2層	LiC	2.5Y4/4 オリーブ褐色	2.11	0.41	
SF-1 1層	LiC	7.5YR4/3 褐色	1.76	0.88	
SF-2 1層	LiC	7.5YR4/3 褐色	1.82	0.83	
SF-3 1層	LiC	7.5YR3/4 暗褐色	4.42	0.59	
SF-3 2層	LiC	7.5YR3/3 暗褐色	6.37	0.71	
SF-3 3層	LiC	7.5YR3/3 暗褐色	3.59	0.72	
SF-3 4層-1	LiC	N1.5/黑色	5.05	0.43	
SF-3 4層-2	LiC	N1.5/黑色	3.73	0.53	

註 (1)土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色結（農林省農林水産技術会議監修 1967）による。

(2)土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編 1984）の野外土性による。

LiC：軽埴土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

向にあり、 $0.41\sim0.88 \text{P}_2\text{O}_5 \text{mg/g}$  の範囲に収まる。なお、1号方形周溝状造構2層、SF-1 1層、SF-2 1層とSF-3の各覆土のリン酸含量を比較した場合、炭化物の有無によるリン酸含量への影響は比較的小ないと考えられる。

#### 4. 考 察

方形周溝状造構埋葬施設及び土抗覆土は、炭化物混入の有無により腐植含量に影響が認められるが、リン酸含量への影響は少ないと考えられる。各試料のリン酸含量に顕著な差は認められないものの、長胴窓内覆土の1～3層と墓壙から土壤を採取したSF-3では、墓壙（4層-1、4層-2）と比べ、長胴窓内覆土（1～3層）において僅かにリン酸が多い。また、長胴窓内においても下層覆土（3層）ほど、リン酸が多い傾向が認められる。さらに、SF-3の墓壙採取試料（4層-1、4層-2）を対照試料とするならば、SF-1 1層およびSF-2 1層についてもリン酸が富化された可能性が示唆される。

ただし、これまでの報告事例（Bowen 1983；Bolt・Bruggenwert 1980；川崎ほか 1991；天野ほか1991）によれば、リン酸の天然賦存量の上限が $3.0 \text{P}_2\text{O}_5 \text{mg/g}$  程度であること、また骨片などが認められる土壤では、リン酸がこれらの天然賦存量を超える傾向にある。これらの事例を考慮すると、方形周溝状造構主体部や各土抗覆土のリン酸含量は低い水準にあることが指摘される。このことからSF-3における層位別のリン酸含量の差やSF-1 1層およびSF-2 1層におけるリン酸含量の富化は、有意と捉えるまでには至らず、今回の分析調査結果を見る限りでは、各造構内に遺体痕跡を示唆することは困難である。

#### 引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信 1991 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量、土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発、農林水産省農林水産技術会議事務局編、28-36.
- 川崎 弘・吉田 淳・井上恒久 1991 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量、土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発、農林水産省農林水産技術会議事務局編、23-27.
- 土壤標準分析・測定法委員会編 1986 土壤標準分析・測定法、博友社、354 p.
- 土壤養分測定法委員会編 1981 土壤養分分析法、養賢堂、440 p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 新版標準土色帖。
- ペドロジスト懇談会編 1984 土壤調査ハンドブック、博友社、156 p.
- Bowen, H.J.M. 1979 Environmental Chemistry of Elements. [浅見輝男・茅野宏男(訳) 1983 環境無機化学、元素の循環と生化学、博友社、297 p.]
- Bolt, G.H. & Bruggenwert, M.G.M. 1976 SOILCHEMISTRY. [岩田進午・三輪春太郎・井上隆弘・陽 捷行(訳) 1980 土壤の化学、学会出版センター、309 p.]

写 真 図 版



1. 田頭山古墳群全景(富士山を望む)



2. 1・2号墳全景(東より)

图版2



1. 1号填全景(南より)



2. 1号填石室全景(南より)



1号墳石室全景(南西より)

図版 4



1. 1号墳奥壁突出状況(南より)



2. 1号墳石室掘り方土層堆積状況(奥壁側)



3. 1号墳石室掘り方土層堆積状況(右側壁側)



4. 1号墳左側壁開口部立柱石突出状況(西より)



5. 1号墳鐵鎌束出土状況(西より)



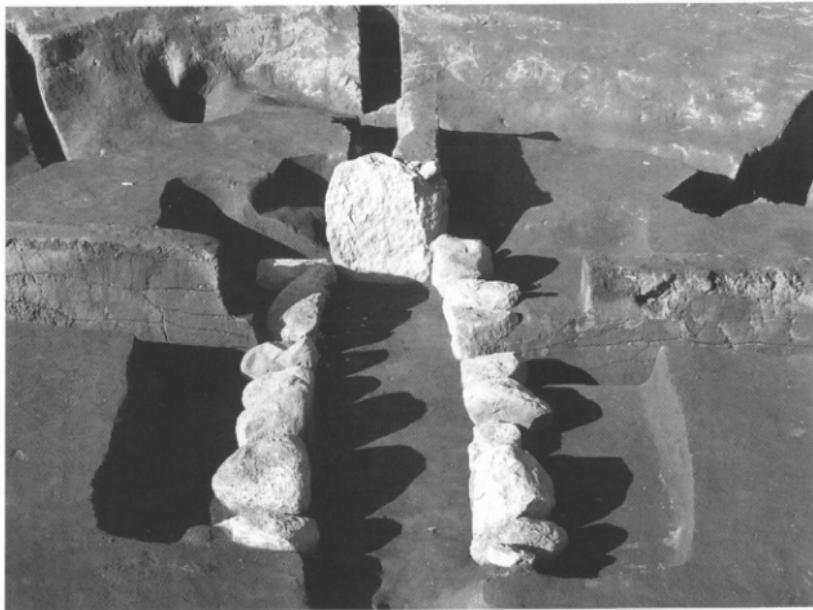
6. 1号墳丸玉出土状況(石室床石)



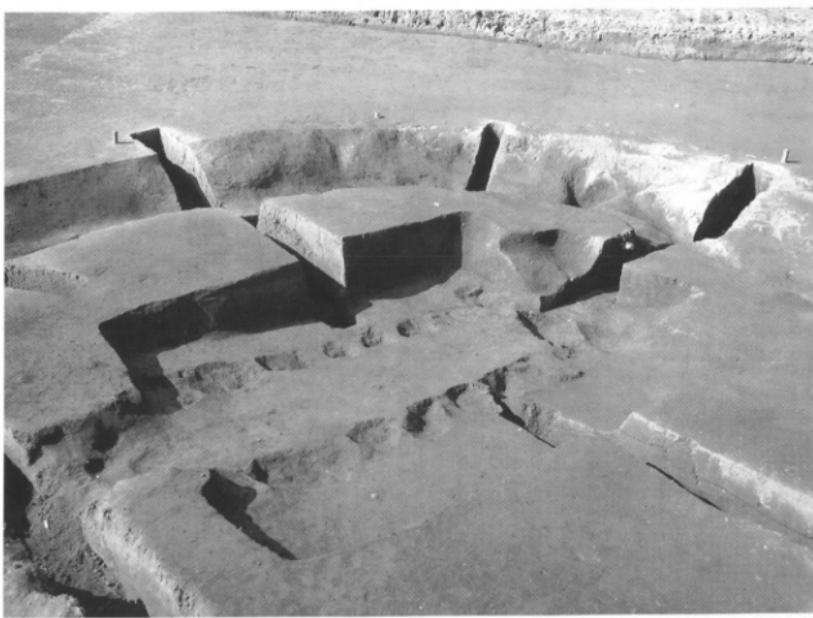
7. 1号墳直刀出土状況(南東より)



8. 1号墳直刀出土状況(西より)



1. 1号墳基底石検出状況(南より)



2. 1号墳石室掘り方検出状況(南東より)

図版 6



2号墳全景(南東より)



1. 2号墳奥壁検出状況(南東より)



2. 2号墳刀子出土状況(北東より)



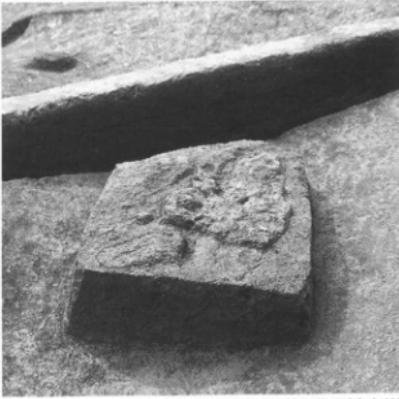
3. 2号墳閉塞石検出状況(北東より)



4. 2号墳基底石検出状況(東より)



5. 2号石室掘り方検出状況(南より)

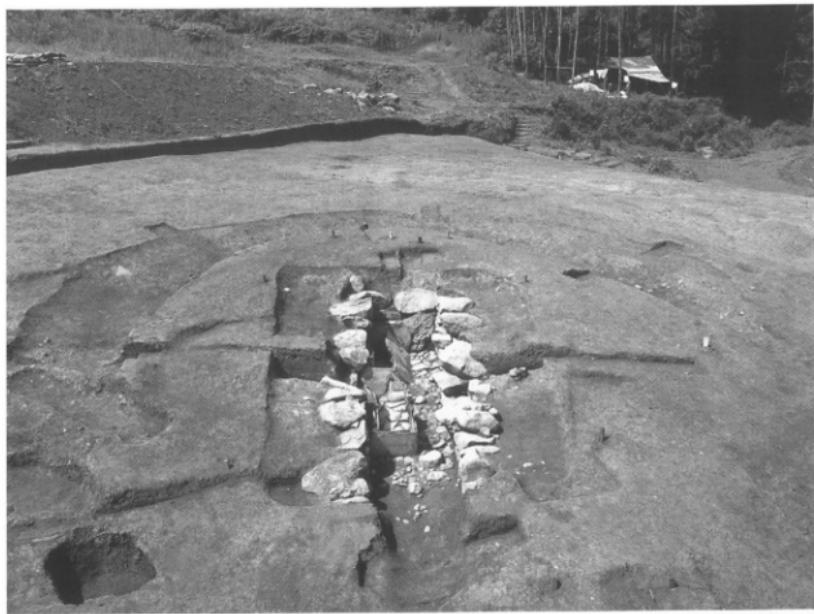


6. 2号墳周溝内焼土検出状況(東より)

図版8



3号埴石室全景(南より)



1. 3号墳全景(南より)



2. 3号墳石室検出状況(南より)



3. 3号墳石室検出状況(北より)

図版10



1. 3号墳1号棺検出状況(南東より)



2. 3号墳1号棺内直刀出土状況(南東より)

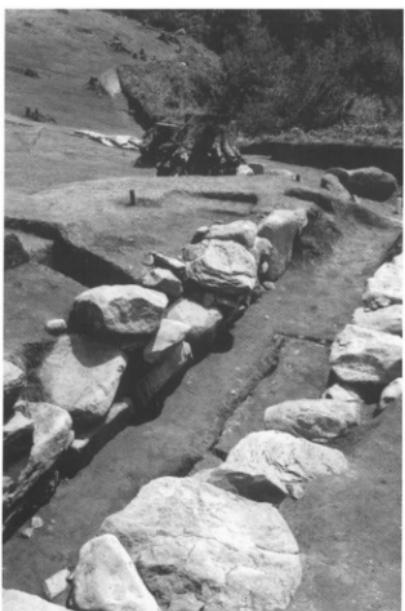


1. 3号墳2号棺検出状況(南東より)



2. 3号墳2号棺内耳環・玉類出土状況(南より)

図版12



1. 3号墳2号棺左侧壁検出状況(北西より)



2. 3号墳右側壁検出状況(南東より)



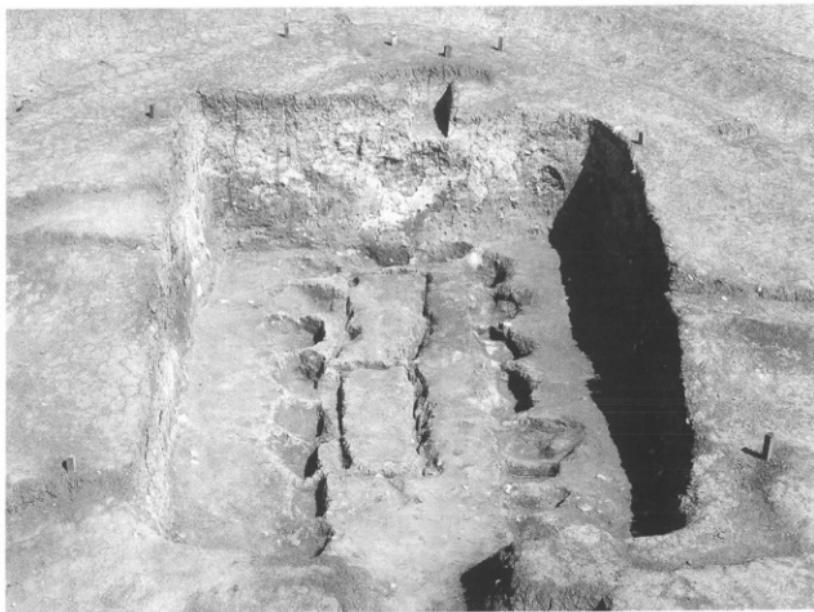
3. 3号墳1号棺除去後奥壁検出状況(南より)



4. 3号墳奥壁検出状況(南より)



1. 3号墳基底石棟出状況(南西より)



2. 3号墳石室掘り方検出状況(南より)

図版14



1. SF1・SF2検出状況(南より)



2. SF1・SF2完掘状況(南西より)



1号方形周溝状遺構・SF3検出状況(北東より)

図版16



1. 1号方形周溝状造構築状況(南西より)



2. 周溝内須恵器高台坏・土師器坏の出土状況(南西より)



3. 周溝内高台坏出土状況(南より)



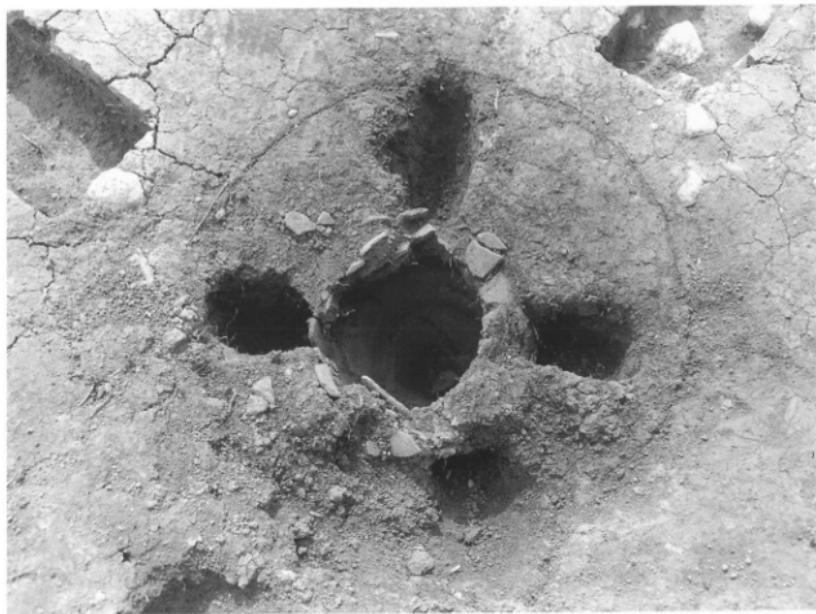
4. 方形周溝状造構長颈壺出土状況(南より)



5. 須恵器摘み蓋出土状況(北東より)



1. SF3検出状況(南西より)



2. SF3長期間検出状況(南より)

図版18



1. SX1検出状況(北より)



2. SD1検出状況(北東より)



16-1~20



16-21

20-1~7

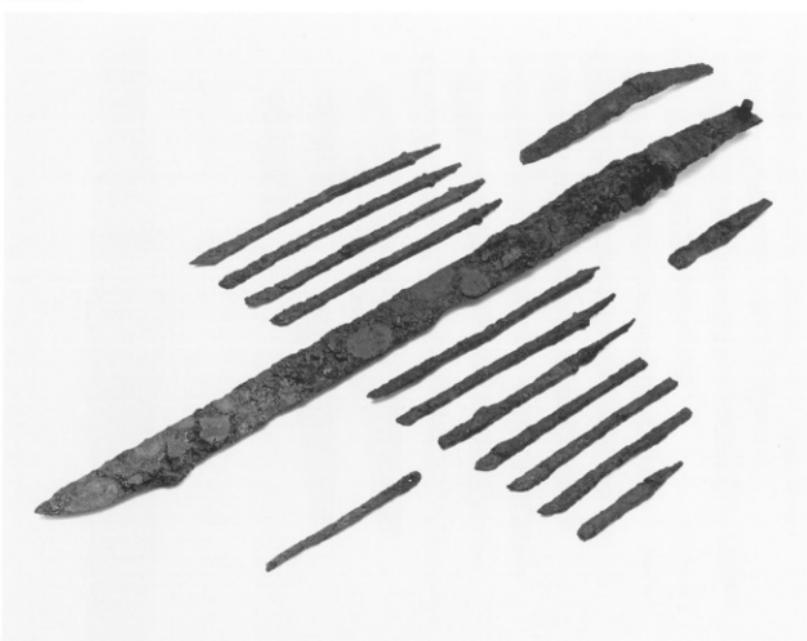


16-23・24

16-22

16-25

図版20



横穴式石室より鉄針が出土





33-1



33-2

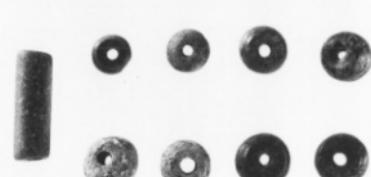


33-3

図版22



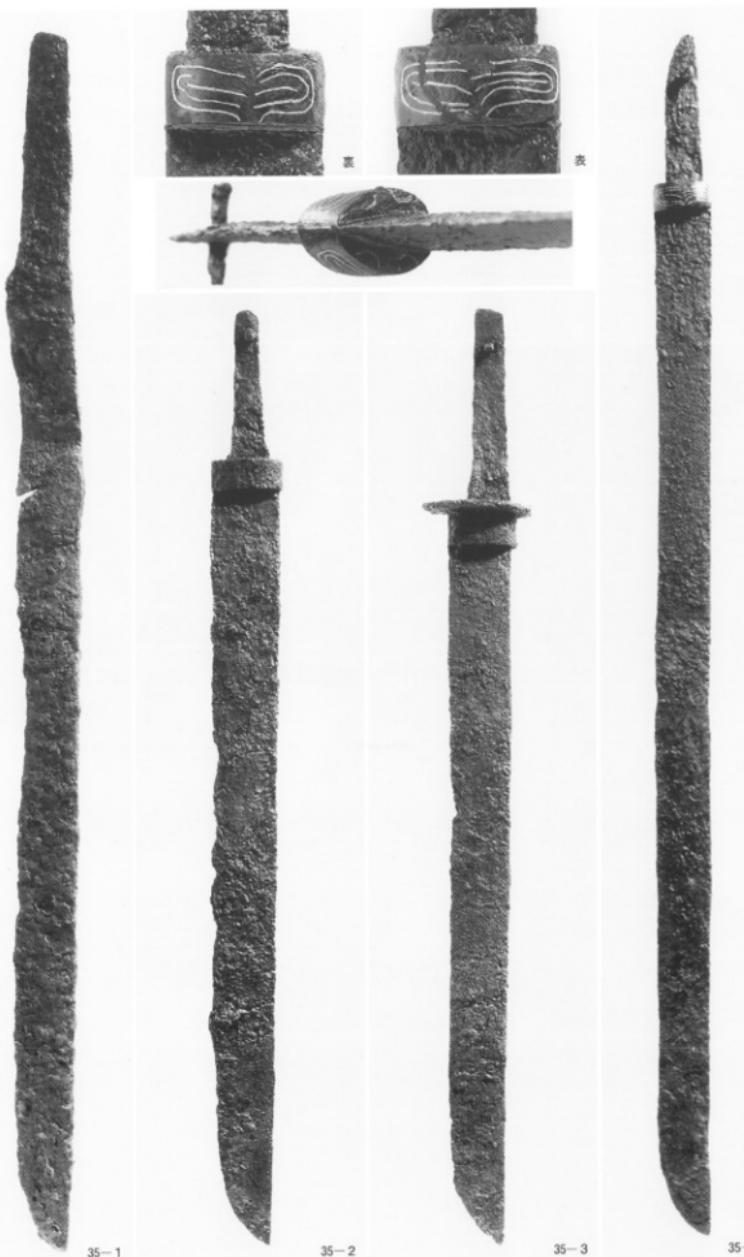
34-1~9



34-14~22



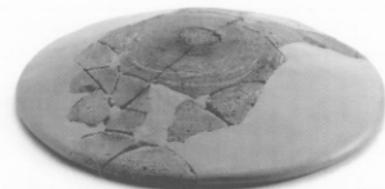
34-10~13



図版24



奈良時代出土遺物集合写真



43-2

43-1



43-4



43-3



43-5



43-8

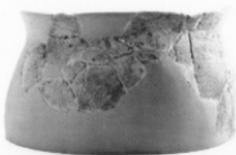


37-1

图版26



39—1



37—2



39—2

45—1



48—8



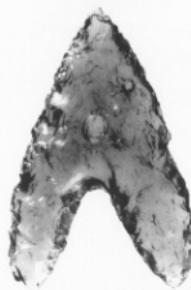
49-1



49-2



49-4



49-3



49-5



組合式箱形石棺の石材  
石室床下より出土

## 報告書抄録

ふりがな 書名	たがしらやまこふんぐん 田頭山古墳群						
副書名	平成14・15年度 東駿河湾環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告						
シリーズ番号	第146集						
編著者名	吉村たまみ 井鍋誓之						
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261㈹						
発行年月日	西暦2004年3月25日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ○/×	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
たがしらやま 田頭山古墳群	しづおかけん 静岡県 みよしし いはなばな 三島市大場字 たがしらやま 田頭山	22206	423	35度 6分 14秒	138度 57分 01秒	20020901 20021130 20030601 20030924	500m <sup>2</sup> 1900m <sup>2</sup>
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
田頭山古墳群	散布地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代		ナイフ形石器1 石礫3 打製石斧1 磨製石礫1			
	古墳	古墳時代後期	横穴式石室墳3基	須恵器壺1 平瓶1 提瓶1 横瓶1 丸玉10 耳環5 管玉1 鉄針17 刀子6 弓金具1 直刀5 鉄針1	組合式箱形石棺を2基有する横穴式石室を検出 後期古墳では類例の少ない鉄針出土 部分にハート形の銀象嵌が施された小刀が出土		
	古墳	奈良時代中葉	方形周溝状遺構1基	土師器壺1 須恵器高台壺3 長頸壺2 摘み蓋1	箱根山麓では類例の少ない方形周溝状遺構の検出		
	古墓	奈良時代後半	火葬墓4基	土師器長胴壺3 小型壺1 鉢1	灰を充填した火葬墓の検出 古墳時代後期～奈良時代の墓制の変遷が大まかに伺える		

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第146集

### 田頭山古墳群

平成14・15年度 東駿河湾環状道路建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年3月25日

編集発行 財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
〒420-8002 静岡県静岡市谷田23-20  
TEL 054-262-4261㈹

印 刷 所 みどり美術印刷株式会社  
〒410-0058 沼津市沼北町2丁目16番19号  
TEL 055-921-1839